
Pure Love ～君しか見えない～

いとかなし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Pure Love 君しか見えない

【Nコード】

N2972E

【作者名】

いとかなし

【あらすじ】

和人と幸は幼馴染み。和人は幼い頃に聴覚を失ってしまったが、奥手ながらも前向きな文学青年になる。一方の幸は音楽学校に通いピアニストを目指していたが、事故で視力を失ってしまった……。手話でも筆談でも会話の出来ない二人。幼馴染みなどという枠組みを越え、傷付きながらも互いの大切さに気付いていく――。

1、序章

私は今、死の床にいる。

私の人生には、いつもあなたがそばにいた。あなたがいなければ、今の私はないと言いきれるだろう。

私はあなたを深く傷つけてきた。それでもあなたは、私のそばにいてくれた。ずっとずっと、いつづけてくれた――。

「さーっちゃん！ あーそーば」

一軒の家の前でそう叫ぶ、小さな男の子がいた。まだ五歳の男の子だ。

その声を聞いて、一人の少女が家から顔を覗かせる。男の子より一つ年上の女の子の名は、はいつたみち原田幸。ふわふわとした長い髪とくつきりした二重瞼が自慢の、近所でも可愛いと評判の女の子である。

「カズちゃん、何して遊ぶ？」

幸が男の子に向かって尋ねた。男の子は、幸の隣の家に住んでおり、名前を水上和人みななかみかずとという。和人はいつも明るく、人を笑わせるのが得意の元気な男の子だ。幸とは仲の良い幼馴染みで、和人が生まれた時から知っている。

家も隣同士のため、二人は毎日遊んでいた。

「今日はピアノのお稽古は？」

和人が尋ねる。幸はピアノを習っているので、稽古がある日は早く帰らねばならないのだ。

「今日はないよ」

幸がそう言うと、和人は嬉しそうに幸の手を取った。

「じゃあ、公園に行こうよ」

二人は、近くの公園へと向かっていった。

二人は砂場で遊んでいると、和人が何度も咳き込んだ。時には咽るように、苦しそうである。

「カズちゃん、大丈夫？ 風邪かなあ」

「大丈夫」

幸の質問に、元気にそう返す和人は、鼻水を垂らしながらも夢中になって遊んでいた。

その日も二人は、夕方に幸の親が迎えに来るまで遊んだ。

次の日。いつものように声をかけてこない和人に、幸は和人の家を覗く。

和人の家は共働きで、昼間に両親はいない。だが祖母が同居しているのも、和人の面倒はいつも祖母が見ていた。

幸は、和人の家の呼び鈴を鳴らした。

「あら、さっちゃん」

出てきたのは、和人の祖母である。

「おばあちゃん。カズちゃんは？」

「カズちゃん、お熱が出てるのよ。今日はお寝んねしてるから、また今度ね」

祖母の言葉に納得しながらも、幸は和人のことが心配になった。

「……カズちゃん、大丈夫？」

「うん、大丈夫よ。さっちゃんがお見舞いに来てくれたこと、ちゃんと伝えるから。元気になったら、また遊んでね」

「はい……」

幸は頷くと、自分の家へと帰っていった。

しかし、それから何日経っても、和人が幸の家へ遊びの誘いに来ることはなかった。

数週間後。幸は今日も和人の家を覗き込んだ。

「ここしばらくは和人の祖母の態度も一変し、「今、忙しいから」の一点張りで、門前払いを食っている。幸は幼いながらも、和人に何かあったのだと悟っていた。

幸が部屋から外を眺めていると、和人の家の前に一台の車が止まるのが見えた。中から和人の両親が降り、続いて和人の姿が見える。幸はすぐに、家の外へと飛び出した。

「カズちゃん！」

「……さっちゃん……」

和人の母親が幸を見て、困ったように呼びかける。和人も幸に気づいて、嬉しそうな顔を見せた。

「あっあー」

その時、和人がそう言った。幸はいつもと違う様子の和人を不思議に思つて、静かに和人へと近づく。

「……カズちゃん、どうしたの？」

幸がそう問いかけた時、幸の母親が家から飛び出してきた。

「中へ入りなさい、幸！ ごめんなさい、水上さん。足止めして……」

そう言った幸の母親に、和人の両親は苦笑し、和人を連れて家中へと入って行ってしまった。

それから幸が、和人が高熱により聴覚を失ったことを理解するまでには、少し時間がかかった。

「幸。カズちゃんは、お耳が聞こえなくなっちゃったの。だから、もうお外は危ないから、これからは二人で遊びに行ったりしちゃう駄目よ」

母親にそう言われたが、まだ小さい幸には、それがどういふことなのかわからない。

しばらくして、水上家も落ち着いたようだった。和人の両親は常に苦悩した顔をしていたが、やっと幸も和人と会うことを許された。しかし久しぶりに会う和人は、前とは違った――。

幸の言うことが理解出来ない。和人が発する言葉が、幸には理解出来ない。なにより和人自身が戸惑いを感じていて、いつもイライラし、幸に当たることもあった。

そんなことが続き、いつしか幸も和人の家を訪れなくなっていた。

一年後――。

幸は小学校へ入学した。和人とはもうほとんど会っていない。時々見かける和人は以前と違い、表情を失くし、いつも一人で寂しそうにしていた。

「返してほしかったら、返してくださいって言えばよ」

学校帰り、幸は和人とよく遊んでいた近くの公園に差しかかり、そんな声を聞いた。砂場では、和人が何人かの小学生に囲まれている。幸や和人ともよく遊んでいた、近所の子供たちであった。どうやら和人は砂場で遊んでいたようだが、小学生たちにスコップを取られたようである。

「あーあー！」

泣きながら、和人が小学生たちに体当たりする。しかし、すでに一回り大きい年上相手には、弾き返されるだけである。

「返してあげなさいよ」

その時、見かねて幸が間に入った。

「なんだよ。べつに、何もしてないよ……ちょっとからかっただけだろ」

「からかうって何よ。年下を苛めるなんて最低！」

怒りを露わにして、幸が怒鳴る。小学生たちは慌てて和人にスコップを返し、去っていった。

幸が和人を見ると、和人は幸のほうを向いて笑っている。そして

両手で一つの動きをした。拝むような、何かのメッセージに見える。
「……え？」

その意味がわからず、幸は和人を見つめた。和人は尚も笑いながら、幸を見つめる。

「あえあとお」

和人が丁寧な、無理やりにそう言ったことで、幸は和人が「ありがとう」と言おうとしていることがわかった。

「うっん」

幸は首を振ると、和人の手を取り、一緒に家へと帰っていった。

その日から、幸は手話の存在を知った。和人は施設に通っていて、手話を勉強していることを知ったのだ。和人と話するためには、幸も手話を覚える必要がある。なにより、今でも弟のような存在である和人を守りたいと思った。

十年後――。

市内の高校に通い始めた幸は、友達も大勢いて、同じクラスで卓也という恋人も出来、有意義な生活を送っている。

「じゃあ、またな」

駅で恋人の卓也に見送られ、幸は家へと帰っていく。すると、家の前で和人に出会った。

「久しぶり。今、帰り？」

幸が手話交じりで尋ねる。十年前に始めた手話で、和人とは普通に会話ができる。

「うん。そっちも、今帰り？」

和人が手話で尋ねる。和人は現在、聾学校に通っており、両親は相変わらず共働きである。和人の面倒を見ていた祖母は数年前に他界しており、和人にとって幸は、姉や母親代わりの存在となっていた。子供の頃のようにしょっちゅう会うわけではないが、二人は変わらず仲が良い。

「うん。今日もおばさんたち遅いんでしょ？　またうちで夕飯食べ
ていきなよ」

手招きして幸が言う。いつも一人でいる和人に、幸はよく食事へ
誘っていた。それに対して、和人が遠慮がちに首を振る。

『ありがとう。でも、そうしょっちゅうお世話になってたら、悪い
よ』

「馬鹿ね。今更そんなこと、関係ないわよ。宿題あるなら見てあげ
るよ」

『言ったね？　今日はいつもより多いよ』

「げ……まあいいや。とりあえず、持っておいでよ」

二人は笑って、一度お互いの家へと入っていった。

「ただいま。今日、和人来るから、夕飯よろしくね」

帰るなり、幸が母親にそう言った。

「あら、そうなの？　幸……あなたももう十七なんだし、そろそろ
カズちゃんばかりに構ってないのよ」

「え……どういう意味？」

母親の言葉に、首を傾げて幸が聞き返す。

「だから……カズちゃん、耳が聞こえないでしょう？　そんな人と
ばかり仲良くして……ねえ？」

突然の母親の言葉に、幸は衝撃を受けた。そして怒鳴るように口
を開く。

「……何言ってるの？　和人と仲良くして、何が悪いのよ！」

「べつに、お母さんは……」

「ひどいよ！　お母さん、昔から差別は駄目だって言ってたじゃない。
ましてや和人は、生まれた時から一緒だったんだよ？　どうし
て今更、そんなこと言うのよ！」

「幸……」

「もう知らない！　いいよ、お母さんなんか！」

幸はそう言うと、和人の家へと向かっていった。

2、別離

『どうしたの？』

突然、訪ねてきた幸に向かつて、和人が尋ねる。

「なんでもないよ……今日は夕飯、私を作るね」

そう言つて、幸は和人の家の冷蔵庫を開けた。

「キャベツと人参と豚肉……野菜炒めでいい？」

『なんでもいいけど……何かあったの？』

「なんでもないつたら。たまにはいいでしょ、私の手料理も」

明るく笑つて、幸は台所に立つ。和人は苦笑すると、ダイニングテーブルで宿題を広げた。

『ありがとう』

夜になつて、玄関先で和人が幸に礼を言つた。幸は軽く首を振る。

「ううん。じゃあ、またね」

『さっちゃん。お母さんと、早く仲直りしなよ』

和人がそう言つたので、幸は驚いた。

「どうしてわかつたの？ お母さんと喧嘩してるって……」

『当たつた？ なんとなく、そうかなつて思つて』

「……悔しいけど当たり。まあ大丈夫、親子だし。じゃあ、またね」

『うん、ありがとう。おやすみ』

「おやすみ……」

幸は自分の家へと戻つていった。

時間が冷静さを取り戻し、母親が心配する気持ちが、幸にも少しはわかつていた。だが、やはり母親の言葉は、ショック以外の何ものでもない。和人とはずっと一緒にいた、姉弟のような存在である。今更その関係を問われても、幸にはどうすることも出来ない。だが母親の心配もわかるような、少しは考えさせられるものがあつた。

数日後。幸はクラスメイトの女子数人と、休み時間に話をして
いた。

「知ってる？ 二組ってば、今度の合唱コンクールに向けて、朝練
までやってるんだって」

「へえ。私なんて、放課後練習だけでも、声枯れてきちゃったよ」
女子たちが、そんな話を続ける。

「まあ、うちの合唱コンクール、レベル高いらしいし。試験の合間
にはいい息抜きだよね」

「確かに。でも、うちは大丈夫でしょ。だって伴奏者が、学年一の
ピアノストだもんね」

そう言って一斉に視線が集まったのは、幸であった。

学校では近々、合唱コンクールがある。クラス対抗のコンクール
のため、ここ数ヶ月、幸のクラスでも気合を入れて練習をしていた。
幸は子供の頃から習っているピアノを生かし、合唱コンクールで
は伴奏を手がけることになっている。それは高校に限らず、中学時
代もやってきたことだ。将来はピアノの先生になることも、幸の小
さい頃からの夢でもある。

「やだなあ。変なプレッシャーかけないでよ」

困った様子で、幸が言う。

「またまたー」

「本当だよ。今回の曲、難しいし。まだ覚束ないところあるんだよ」
「じゃあさ、幸の家で自主練しない？ 幸のピアノの練習含めてさ」

幸の言葉に、一人が提案した。

「いいねえ。幸の家、大丈夫？」

「うちは構わないけど……」

「決定！ じゃあ放課後、幸の家に直行！」

一同はそう言って、放課後を待った。

学校を終えて、数人の女子が幸の家へ集まった。

「お邪魔します！ 幸の家、広いね」

「そんなことないよ。適当に座って。今、お茶持ってくるね」

幸はそう言って、友人たちを自分の部屋に案内し、部屋を出て行った。そしてお茶とお菓子を持って戻ると、一同は部屋の中を物色している。

「ねえ、幸。手話に興味あるの？ 本がいくつかあるけど」

一人が、本棚にある手話の本を取って尋ねた。

「興味っていうか、幼馴染みが聴覚障害者で……」

幸は正直にそう答える。

「へえ。なんか難しそう……」

「そんなことないよ。ジェスチャーに似た動きが多いし。慣れれば普通に会話出来るよ。耳に障害がある人は、それが声の変わりだもん」

本を見つめる友達に、幸が言った。

「でも障害のある人って、なんか怖くない？」

一人の言葉に、幸はハツとした。

「え、どうして？ そんなこと……」

「ああ、確かに。なんかやっぱり、うちらとは違うよね」

幸の言葉を遮って、話は進んでいた。幸は先日の母親の言葉を思い出し、また友人たちの話を聞いて悲しくなる。

「……みんなとはあんまり接する機会ないかもしれないけど、私とその子は幼馴染みで、普通の子と同じだよ？ 怖いところなんて全然ないし」

悲しさに似た怒りを抑え、幸が反論してそう言った。しかし友人たちも言葉を続ける。

「それは幼馴染みだからでしょう？ 近すぎるからわからないんだよ」

「そうそう、べつに差別する気なんてないけど、やっぱりうちらは住む世界が違っているか……」

「ボランティア程度ならいいけど、あんまり肩入れしないほうがいいんじゃない？」

「そうそう。そんなに必死になって反論してると、彼氏の卓也君も引くよ?」

「え……」

そう言った友人たちに、幸は眉をしかめて俯いた。

「だから、世界が違うんだってば。街で手話してる人とかいるけど、やっぱり特異に見えるでしょ。幸まで耳が聞こえないと思われるんだよ? うちらみたいに関わったことない人から見れば、やっぱりちょっと引くよ」

幸はもう反論する気にもなれなかった。

なぜここまで言われなければならないのか。和人は目の前にいる友人たちと同じだ。小さい頃から明るくて、今でもよく幸を笑わせしてくれる。耳が聞こえなくて、口が利けないというだけで、あとは他の十六歳の少年と一緒なのだ。

だがもう、そう反論は出来ないと思った。なにより母親にも注意されている今、自分だけが不可思議な正義になっているのではないかと心配になる。

「ああ、なんか暗くなっちゃったね。練習始めようよ」

一人がそう言ったことで、空気が変わる。

「そうだね、始めよう。発声練習からしようよ。ね? 幸」

「うん、うん……」

幸ももう考えるのはよそうと思い、ピアノの前に座るのだった。

合唱コンクール当日。コンクールを終え、幸は恋人の卓也とともに家路へと向かっていた。

「最優秀賞、やったなあ! 最初はやる気なかったけど、ハモって気持ちよかったなあ」

満面の笑みで卓也が言った。

幸のクラスは、先日の自主練習の成果があったのか、晴れて最優秀賞を受賞していた。

「うん。私もピアノ弾いてて、ゾクゾクしちゃった」

「そつだよな。それより、本当に家に行っているの？」

卓也が尋ねる。

今日は幸の母親が出かけているので、家には誰もいない。そのため幸は、家へ卓也を招くことにしたのだった。いつも卓也には駅まで送ってもらっただけで、家へ入ってもらったことは一度もない。しかし外では幸の母親とも面識があり、卓也は幸の家族に受け入れられている。

「いいよ。お母さんも、卓也のことは信用してるし」

「じゃあ、お邪魔します。急に緊張してきた」

「あはは。大丈夫だよ」

二人は笑いながら、幸の家へと向かった。

幸の家へ近づくと、向こうから和人が歩いてくるのが見えた。和人も幸に気づいて、大きく手を振っている。

そんな和人に気づいて、卓也は幸を見つめる。

「知り合い？」

「う、うん……」

家の前に着いて、幸は立ち止まった。

『彼氏？』

和人は幸に、笑いながら手話で尋ねる。

「う、うん……」

幸は頷くだけで、和人から視線を逸らした。先日、友人と少し口論になったことで、卓也に和人を会わせたくないと思った。

そうとも知らずに、和人はいつもと変わらぬ笑顔で話を続ける。

『さっちゃんも、やるね。カッコイイ彼氏じゃない』

「うん……じゃあね」

和人の言葉を遮って、幸は卓也を連れて、足早に家の中へと入っていった。

「なあ、今の障害者？」

卓也が尋ねる。

その質問に、幸は少し戸惑った。なぜだか和人に対しての気持ち
が、前とは違う。和人と友達でいることが、周りの友達や卓也まで
失ってしまうのではないかと思った。

「う、うん。隣に住んでる子……」

言葉を濁しながら、幸は答えた。出来るだけ早くこの話を終わら
せたいと思う。

「へえ。さっきの手話だろ？ 俺、初めて間近で見た。幸、理解出
来るの？」

「ちよつとだけ。卓也は……障害のある人のこと、どう思う？」

思いきって幸がそう尋ねた。卓也は少し首を傾げながら、口を開
く。

「どうって……べつに。でも、あんまり関わり合いになりたくない
のは事実だな。昔さ、家の近くに障害者が住んでたんだ。何の障害
かは知らないけどさ……よく、何もしてないのにぶつ叩かれてさ。
それ以来、あんまり良いイメージないなあ」

ストレートに卓也が言った。卓也は逆に、他の子より差別意識が
ないのだと感ずる。それでも良いイメージがないという卓也に、幸
は押し黙ってしまった。

「あ……今、お茶入れてくるね」

幸はそう言つて、キッチンへと向かつていった。

小さい頃から、親に差別はいけないと教わってきた。そんな母親
も、屈折した意識を持つていたのだと最近知った。出来れば関わり
たくないのだということを思い知らされる。友達にも否定され、幸
は自分自身の中に生まれる屈折した差別意識に、戸惑いを感じず
はいられなかった。

夕方。

「お母さん、何時に帰るの？」

幸の部屋でくつろぎながら、卓也が尋ねる。

「今日は遅くなるって言ってたよ」

「じゃあさ、もう少しゆっくりして、あとで夕飯食べに行かない？」

「うん、いいよ」

二人は笑うと、静かにキスをした。吸い寄せられるように抱き合う。

その時、家の呼び鈴が鳴り響いた。卓也と離れたくないと思い、幸は居留守を使うことを思いつく。しかし呼び鈴はしつこく鳴り響き、ドアを叩く音までする。その行為に、幸はその主に感づいた。

「早く出たほうがいいんじゃないの？」

「うん、大丈夫。和人だ……」

幸はそう言くと、少し苛立ちながら玄関へと向かっていった。

和人は幸の家を訪ねる際、こうして何度も呼び鈴を鳴らすことがあった。それは幸が家にいることがわかっていているからだ。しかし耳が聞こえないために、本当に呼び鈴が鳴っているのか、幸に聞こえているのかがわからずに、何度もボタンを押す。

「ハイハイ……」

卓也と作り上げたムードを壊され、少しうんざりして幸がドアを開けた。

『遅いよ』

笑いながら和人が言う。そんな様子の和人に、幸は苛立ちを隠しきれない。

「こつちにだって都合つてもんがあるの。なによ？」

『ごめん、邪魔した？』

「いいから、要件は？」

『……父さんが出張から帰ってきたんだ。お土産だって』
和人はそう言くと、紙袋を差し出す。

「ああ、ありがとう……」

幸が手話交じりにそれを受け取ると、和人は幸の後ろに向かって会釈をした。幸の後ろには、いつの間にか卓也が立っていたのだ。幸は和人と手話で会話していたことを、卓也に見られて恥ずかしく

なり、和人を玄関の外に追いやると、卓也の手を取った。

「卓也。外行こ」

幸はそう言うのと、そのまま和人を横切って、卓也とともに街へと出ていった。

それから数日後、幸は先日友人たちと、ファーストフード店にいた。恋や芸能の話題で盛り上がる。

そんな時、幸の目に、手話で会話をしながら店に入ってくる数人の男子学生が映った。その中に、和人の姿もある。聾学校の友達らしい。

和人は幸に気づくと、いつものように大きく手を振った。幸は慌てて立ち上がると、和人の元に駆け寄り、和人を外へと連れ出した。

「……………なに？」

店の裏まで連れてこられた和人が、幸に尋ねる。

「もう、話しかけないで……………」

徐に、幸がぼそつとそう言った。手話でなかったため、和人は理解出来ないといった表情で、幸の顔を覗き込む。幸の口元を見つめ、言葉を読み取ろうと凝視している。

幸は溜息をつくと、もう一度大きな声で言った。

「もう、話しかけないで！」

「……………どうして？」

和人は驚いた顔をして、ゆっくりとそう尋ねた。幸は一呼吸つくと、和人を見つめ、手を動かす。

「……………私まで変な目で見られるから。友達の前で、手話なんてやめてよ！」

手話とともにそう叫ぶ幸に、和人は傷ついた顔を見せる。幸はすぐに後悔したが、それは本心だった。

「……………わかった」

少しして、和人は頷きながら、右手の平で胸を打つ動作を見せた。

『……もう話しかけない。ごめんね……』
続けて和人はそう言っていると、そのまま去っていった。幸が店に戻ると、和人の友達すらいなかった。

3、再会

それからというもの、幸の周りに和人は現れなくなった。偶然会うこともあったが、和人は軽く会釈をするだけで、手話を見せようとはしない。幸は罪悪感にかられていたが、ホツとした気持ちにもなっていた。

三年後。幸は大学進学と同時に、一人暮らしを始めていた。和人とはもう長いこと会っていない。幸の中でも、和人の存在は次第に薄れていた。

四年制大学の音楽学部に入學した幸は、日々ピアノの練習に明け暮れている。高校時代に付き合っていた卓也とは進学と同時に別れ、今では大学で知り合った新しい恋人もいる。大学生活は順調で、楽しいものであった。

「幸。今日の合コン、来ない？」

食堂で幸を誘ったのは、同級生の山ノ内真由美。大学からの友人だが、明るくて活発である。忙しい大学生活の合間を縫って、数多くのサークルに在籍し、毎日のように合コンを繰り返している。そんな生活の真由美であるが、未だ特定の恋人はいないようだ。

「合コン？ ダメダメ、修吾が許さないもん」

幸が言った。修吾とは、現在の幸の恋人である。同じく音楽学部へ通う同級生であり、幼少時代から注目されている、バイオリニストでもある。誰よりも優しい、幸の自慢の恋人だ。

「大丈夫だって。バレなきゃいいじゃん」

「聞こえてるよ」

真由美の言葉に割って入ってきたのが、前島修吾。幸の恋人だ。

「真由美。うちの幸を、そういうところに引っ張りこまないでくれる？」

見せつけるように、修吾が幸の肩を抱きながら言った。

「いつもながらお熱いことですね。でも、幸だって合コン行きたいよね？」

「え、べつに」

「またまた……って、ヤバイ。今日はサークル行くって言うてたのに」

困った様子の幸を尻目に、真由美が突然、時間を気にして立ち上がった。

「じゃあ今日は諦めるけど、今度はおいでよ、楽しいから。なんなら修吾付きでも全然大丈夫！　じゃあね」

真由美はそう言つと、慌しく去っていった。

「相変わらずバタバタしてるな。今日は何のサークルやら……」

「あはは。でも凄いパワーだね。毎日合コンしててもガタがこない強靱な体でしょ？」

修吾の言葉に、幸が笑つて言う。

「幸はそんなこと見習わなくていいんだよ。そんなことより、話があるんだけど……」

突然、改まって修吾が言った。普段と違う修吾の態度に、幸も緊張して尋ねる。

「え、なに？」

「ええつと……突然なんだけどさ、今度の週末、俺の家に来ない？」
修吾がそう言った。修吾は実家暮らしだが、幸は何度も修吾の家へ行ったことがある。お互いの両親にも会っているため、二人は公然の仲だ。それなのに、どうしてそんなに改まった言い方をするのか、幸には理解出来なかった。

「いいけど、どうして？」

「うん、あのさ……」

尚も言いにくそうに、修吾が言葉を続ける。

「結婚、しない？　俺たち……」

赤くなりながらも真剣にそう言った修吾に、幸は飛び上がるほど驚いた。

「えっ……ええっ？」

「いや、もちろん、結婚するのは卒業してからになるけどさ……でも二年間幸と付き合ってきた、もう決めておきたいんだ。幸は俺の運命の人だと思う。本当はすぐにでも結婚したいけど、まだお互い学生だろ？ だから残りの大学生活は、結婚を前提として付き合ってくれないか？」

突然の告白であつた。普段は慎重派の修吾を知っている幸は、修吾の真剣な気持ちに、素直に嬉しくなる。

幸は静かに頷いた。

「うん、私も……結婚するなら修吾としたいって、思ってた……」その言葉を聞いて、修吾は顔を赤らめて幸を抱きしめる。まだ大学構内だったため、人が大勢見ているものの、二人は幸せいっぱいであつた。

そして週末には、幸は修吾とともに、双方の家へ挨拶に行った。未だ学生ながらも真面目で真剣な二人に、両親たちは快く承諾してくれたのだつた。

「嘘！ マジ？」

週明けの学校。放課後の学生会館では、事情を聞いた真由美が、幸の婚約指輪を見て驚きの声を上げた。

「う、うん……まだ卒業まで二年あるけど、うまくやっていくつもり」

照れながら、幸が言う。真由美は理解出来ないといった様子で、口をぽかんと開けている。

「なにそれ。まだ学生なんだよ？ 遊びたい盛りなのに、なんで一人の男に絞っちゃうかな……」

「そんな、真由美じゃないんだから……」

苦笑して、幸が言った。

「失礼ね。私だって特定の彼氏くらい、作ろうと思えばいつだって作れるもんね」

「でも、フラフラしてるじゃない」

「今はね。まあ、幸と修吾ならお似合いか……二年後には、前島幸？ うん、結構いい響きじゃない」

「まだ早いよ……」

「照れないの。早く慣れておいたほうがいいよ……って、もうこんな時間？ あれ、まだかな……」

突然、真由美が携帯電話の時計を見て言った。幸は首を傾げる。

「誰かと待ち合わせ？」

「うん。サークルで呼んだ講師。この間打ち合わせで会ったんだけど、これが可愛い男の子でさあ。背はちょっと低めだけど、今までにないタイプなんだ」

幸の問いかけに、はしゃぐように真由美が答えた。

「へえ。今日は何のサークル？」

「手話サークルよ」

「……手話？」

幸の忘れようとしている部分にある、懐かしい響きであった。

「なによ、手話に興味あるの？ ドラマとかでもやってて、流行ってきてるからね……って、来た来た」

真由美が体全体で手を振ると、一人の少年が真由美に近づいてきた。幸はそこで、目を見張った。

「あ、紹介するわ。友達の幸。こっちは一つ年下の、和人君っていつてね……」

つたない手話交じりで、忙しく互いを紹介する真由美とは対照的に、幸は固まっていた。そこには、数年間話もしていない、幼馴染みの和人がいた。和人もまた、幸と知って驚いている。

「なに？ もしかして、知り合い？」

二人の反応を見て、真由美が尋ねる。

「……う、ううん。私、もう行かなきゃ。じゃあね……」

幸はそう言うと、逃げるようにその場を去っていった。和人は幸の背中を、ただじっと見つめていた。

「なんだろ、幸ってば。婚約して、変になっちゃったのかな」

真由美の口の動きを見て、和人は人差し指を振った。

いくらか唇も読める和人は、ゆっくり話せば健常者の会話も理解することが出来る。しかし、今の言葉は半分わからず、気になって真由美の顔を覗き込んだ。

『なんて言ったの？』

「ああ、あの子、婚約したから変になっちゃったのかなって。婚約って……コ、ン、ヤ、ク」

婚約という手話がわからずに、真由美は少しでも出来る手話と交え、ゆっくりと“婚約”を一字ずつの指文字で表した。

『そう、婚約……』

和人は静かに微笑んで頷き、わかったという手話を見せた。

数年間、見る機会さえなかった幸は、もう和人の知っている幸ではないのだと悟った。

幸は歩きながら動揺していた。高校時代、和人に酷いことを言うてからは、会いづらくなっていた。実家に帰っても、もう和人の家に顔を出すことはない。和人もまた、未だ気を遣っていてくれるようで、幸と会おうとはしなかった。

久しぶりに出会った和人は幸の知らない少年で、もうすっかり大人びていたとを感じる。相変わらず背は低いほうだろうが、それでも前に比べれば、がっしりとした体格をしている。学生会館に違和感なく入ってきた様子は、耳が不自由ということなどわからない、普通の男子学生のようなだった。

だが幸には、和人に会わせる顔がない。

「幸？」

そこで、幸は呼び止められた。振り向くとそこには、婚約者の修吾がいる。

「どうしたの？ そんなに怖い顔して……」

「え、してた？」

修吾の顔を見た幸は、ホツとした様子で修吾に駆け寄った。修吾は頷き、口を開く。

「うん。そっちは練習終わった？ 俺、これから定期演奏会の練習があるんだ」

「ああ、もうすぐだもんね。私はまだだから気が楽。修吾、もちろん第一バイオリンでしょ？ 頑張らなきゃね」

幸が言った。

音楽学部に通う二人は、定期演奏会や各音楽サークル等の名目で、放課後もあちこち引っ張りだこであった。特に修吾は、その才能を小さい頃から認められているので期待も高く、幸より数段に忙しい日々を送っている。

「うん……でも、こう忙しくちゃ、幸と二人きりで話す時間も少なくなるから、気が重いよ」

修吾にそう言われ、幸は素直に嬉しくなる。

「でも、修行のうちでしょ。終わるまで待つてようか？ そうしたら一緒に帰れるし……」

「いいの？ でも、少し遅くなると思うよ」

そう言いかけた時、修吾は何かを見つけて手を振った。幸が振り返ると、そこには先ほどの真由美と和人がいた。幸は固まるようにして、修吾に寄り添う。

そんな幸を気に留めず、修吾は真由美に笑いかける。

「彼が、水上君？」

修吾の言葉に、幸は驚いた。

「修吾、知り合いなの？」

「弟のね。真由美が聴覚障害の人で講師を探してるって相談されたから、弟に頼んで彼を紹介してもらったんだ。うちの弟、昔からボランティア活動でいろいろやってるからさ……」

幸は少し戸惑った。互いに接点のある和人。交流しないわけにもいかなそうだ。

「来てくれて、ありがとう」

しゃべりながら、つたない手話で修吾が和人にそう言った。和人は、静かに微笑んで首を振る。

「幸ってば、急に行っちゃうからどうしたのかと思ったけど、相変わらず二人一緒でお熱いことね。ねえ、これから手話サークルなんだけど、二人も来ない？　なんたつて講師が好青年なんだから、上達も早いわよ」

「あはは。それは真由美や女性だけだろ？　行きたいのは山々なんだけど、俺は練習があるんだ。幸はお邪魔したら？」

真由美に向かって修吾が笑って答え、幸に振った。

「え、でも、私は……」

「演奏会近いから、少し遅くなると思うし。どこかで時間潰してる最中、幸に変な虫が付いたら困るしさ。終わったら食事でも行こうよ。水上君には、俺からお礼が言いたいし」

「じゃあ決まり。一緒に行こうよ、幸」

事情を知らない修吾と真由美が、幸を誘う。そんな光景を、和人も黙って見つめていた。

「じゃあ、そうする……」

少し拒否をしながらも、幸は行かないわけには行かなくなってしまった。そんなバツの悪そうな幸を見て、和人も幸と交流をしようとはしなかった。

学生会館の一室で、手話サークルが始まった。二十人以上集まって満杯となった部屋に、幸は驚く。

「結構、人いるんだね……」

幸の言葉に、真由美が頷く。

「うん。今、結構流行ってるしね。福祉活動の一環にもなるし。今日は特別講師も呼べたし、バッチリよ。さあ、幸も適当に座って」仕切りながら、真由美が言う。幸は一番後ろの席に座り、サークルの様子を見つめていた。

真由美とともにホワイトボードの前に立つ和人は、幸の知らない

少年であつた。久々に見る手話は、美しいまでに懐かしい。過去が溢れてくるように、くすぐったいような恥ずかしいような、なんともいえない感覚に、幸は陥っていた。

サークルが終わると、一同は部屋の片付けをしてロビーへと出ていった。

「じゃあ私、部屋の鍵返してくるから。このまま飲みに行く人は、ここで待っててね」

真由美はそう言つと、和人に近づく。

「これから、終電までパーツと……ええつと、終電……居酒屋……」
和人にそう話しかけた真由美だが、そこまでの手話がわからずに天井を見上げる。和人はそつと、持っていたメモ帳とペンを差し出した。

「ああ、ありがとう」

そう言つと、真由美はメモ帳に飲み会への誘いを書いて、和人に見せた。和人は首を振つて、静かに拒否をする。

「でも、修吾もお礼がしたいって言つてたし、講師をお願いするのは今日で最後じゃないんだし、毎回誘わないから、今日は来てほしいな」

真由美はそう書いて、和人に見せる。それを見て、和人も笑つて頷いた。真由美の強引なまでの願いは、とても断れる雰囲気ではない。

『ありがとう。じゃあ、少しだけ……』

「あ、オーケー？　ありがとう。じゃあ、すぐに移動するから、ここで待っててね」

優しい笑顔を向ける和人に、真由美も笑顔でそう返すと、サークルで使った部屋の鍵を返しに行った。

和人の前では、サークルの仲間たちがはしゃぐように各自で話をしている。和人の耳が聞こえれば、相当うるさい連中なのだろう。和人はその光景に静かに微笑み、輪から外れるように壁に寄りかか

ると、窓際に一人立っている幸の姿に気がついた。

幸にとってもこのサークルは初めてで、仲の良い友達もいない。幸はロビーを囲むガラス張りの窓際で、外を見つめて時間を潰していた。外はもうすっかり夜だ。幸の手には携帯電話が握られ、修吾からの連絡を待っている。

そんな幸の目に、窓ガラスに映った和人が見えた。二人の目が合う。そのまま二人は、時が止まったように、視線を逸らせずにいた。

『……大丈夫……』

やがて、和人が静かに俯いて、手話を始めた。辺りには大勢の人がいるものの、それぞれの世界に入っており、和人のその様子を見ている者も、気に留める者もいなかった。そのまま幸だけが、窓ガラス越しに和人を見つめている。

『君に話しかけたりしないから、安心してください』

俯き加減の和人は、独り言のようにそう言った。だが幸には確実に、自分に向けられたメッセージだと伝わる。

幸は苦しくなった。和人は未だ、自分との約束を実行している。

「もう話しかけないで」と言った数年前の自分の言葉が、頭の中で悲しくこだまする。目すら合わさない今の互いの関係を、和人は壊そうとはしていない。和人の存在を忘れていた自分が恥ずかしい。それでも幸は、素直にはなれなかった。

今ここで、和人に話しかければいい。傷付けたことを謝ればいい。幼馴染みだと、みんなに告白すればいい。友達も周りの環境も、高校時代と今とは違う。それでも幸は足が竦んだように、生身の和人と目を合わせることさえ出来ない。

和人もそれ以上、幸に話しかけようとはしなかった。

4、正義

そこに、真由美が修吾とともに戻ってきた。

「修吾」

幸がすかさず声をかける。修吾も笑って幸に近づく。

「お待たせ。間に合ってよかった。どうだった？ サークルは」

「お疲れ様。う、うん……よかったよ。人も大勢いたし」

「そっか。じゃあ、俺も入ろうかな。あんまり顔は出せないと思うけど」

「え……」

二人が話していると、間に真由美が割って入ってきた。

「なに言ってるの。二人はもう、うちのサークルに入ってるわよ。」

修吾が和人君を誘ってくれたんだから、当然でしょ？ さあ、行くわよ」

相変わらず強引なまでの真由美の言葉に、修吾は苦笑し、幸も静かに笑った。

いつの間に、サークル仲間だけでなく飲み会だけに誘われた人たちも混じっている。更に大人数に膨れ上がった一同は、そのまま近くの居酒屋へとなだれ込んでいった。

「カンパーイ！ 和人君、今日は初講師ありがとうございました。そしてこれからよろしく！」

真由美の音頭で、一同はグラスを持ち上げる。和人は照れ臭そうにして、小さくお辞儀をした。和人と幸は遠い席で、和人は幸と目を合わそうともしない。そんな和人に、幸も自分自身に対する苛立ちを交えた、戸惑いを感じていた。

しばらくすると、修吾の携帯電話が大音量で鳴った。

「ちよっと修吾、盛り下がるじゃん。携帯の音量は切っておきなよ」
注意をした真由美に、修吾はすまなそうな顔をする。

「ごめん、実家からだ……もしもし」

そう言いながら、修吾は席を立った。

「そういえば、幸と修吾のお祝いやってなかったね」

突然、真由美が幸に言う。

「え？　なんだよ、幸と修吾のお祝いって。恋人同士なのは、みんな知ってるじゃん」

「そうだよ。今更、付き合った祝い？　それとも、デキちゃったとか！」

事情を知らない仲間たちが、口々に言う。

「違うよ。実はね……」

「ちよつと、真由美」

婚約の真相を言おうとする真由美を、すかさず幸が止める。

「なによ。どうせバレることなんだからいいじゃない。実はね……幸と修吾ってば、婚約しちゃいましたー！　拍手！」

真由美の言葉に、幸は一番に和人を見た。和人は静かに笑いながらも、尚も幸のほうを見ない。ただ笑顔だけで雰囲気溶け込むように、まるで幸がそこにいないかのように、和人は微笑んでいる。

「嘘だろ。聞いてねえよ！」

「婚約って……マジかよー！」

そんな和人とは対照的に、一同が盛り上がる。同じクラスの仲間も参加していたので、修吾と幸を知る者も多い。その話題は、野次や祝いの言葉となって幸に返ってくる。

そこに、修吾が戻ってきた。

「お、なんだか盛り上がってるなあ」

「おまえのせいだよ、おまえの！　修吾、婚約したって本当かよ！」

「え、ああ……もうバレちゃったの？」

照れ笑いしながら、修吾が席に戻る。

「ちゃんと説明しろよな」

「ごめん！　俺がいるってわかってても、幸のこと狙ってるやつ、たくさんいたの知ってる。だけど俺、我慢出来ませんでした。幸は

俺の婚約者になったので、もう誰にも幸に触れさせません！」

ペコリとお辞儀をしながら、冗談交じりに修吾が言った。

「ったく、この野郎——！」

一同は、そんな修吾に向かって叫ぶ。

「しかも、こんな時ごめん。俺、もう帰らなきゃいけない……」

修吾がそう言ったので、幸は修吾を見つめる。

「どうしたの？」

「いや、もうすぐ定期演奏会だろう？ それなのに遅くまで遊んでるんじゃない、そんな暇があるなら練習しろってさ。親に痛いところ突かれちゃって……」

「へえ。さすが、神童バイオリニスト！」

一同が修吾に向かって言う。帰るななどと言うことが出来ないほど、一同は修吾に一目を置いていた。

「うん。だからごめん、盛り下げちゃって……幸はどうする？」

「あ、じゃあ、私も帰ろうかな……」

修吾の言葉に乗って、幸が言う。修吾は頷くと一同に会釈した。

「悪いな、みんな。また明日。水上君も、ありがとう」

修吾がそう言うと、和人も会釈をした。修吾と幸はそのまま店から去っていった。場はまたしても元の騒ぎに戻る。

『すみませんが、僕もそろそろ帰ります』

幸が去って少しして、和人が隣の席の真由美に、そう書いたメモを見せた。

「え、どうして？ まだいなよ」

真由美の言葉に、和人は苦笑して、もう一度メモに走り書きをする。

『明日も早いので……』

「そう。わかった……」

そう言って、真由美は和人のメモ帳とペンを借り、何かを書き始める。まだ手話で会話できるほど、真由美に知識はない。真由美はメモを和人に見せた。

“じゃあ、酔っぱらいばかりだし、このまま抜けちゃって。強引に誘ったりしてごめんね”

メモを見て和人は首を振ると、真由美に会釈をし、そつと店を後にした。

和人はここから数駅離れた場所にある、都立大学の文学部に通っている。進学と同時に親元を離れ、学校近くにある小さなアパートで一人暮らしを始めていた。同じ学校の学生も住んでいる上、大家さんも親身になってくれるので、初めての一人暮らしでも割と安心な部分が多い。

駅に着くと、ちょうど電車が入ってくるころだった。和人は電車に駆け込み、帰宅ラッシュで満員の車内へと入っていった。

少しして、和人は窓際に幸が立っているのに気がついた。まさか未だ電車に乗っていないかつたとは思わず、驚きを隠せない。幸は和人に背を向けており、和人の存在には気づいていない。

幸の後姿を見つめながら、和人は過去を振り返っていた。思えば、自分が生まれた時から一緒にいた幸だが、もう長いこと会っておらず、ずいぶん遠い存在になってしまったのだと気づかされる。

和人が物思いに耽っていると、異変に気がついた。幸は小刻みに震え、キョロキョロと顔を振っている。その時、駅で電車が止まり、人波に押される形で、和人はドアのほうへと引きずられた。それと同時に、幸の姿が目に入る。幸の身体には男の手が伸びていた。

痴漢だ――。思うより先に、和人は人波をかき分けて、幸のほうへと向かっていった。幸は窓際の手摺りに掴まったまま、何も出来ないでいる。

バンツ！ と、車内に大きな音が響き渡った。何人もの人が、その音の方向へと顔をやる。幸もまた振り向いた。

するとそこには和人がいる。和人は幸のそばのドアを、片手で大きく叩いていた。そのせいで、ドアは大きく揺れ、尋常ではない音が車内に響き渡った。

その音に驚き、幸の後ろにいた男が、とつさに幸から離れてゆく。和人がその男の腕を掴むと、男はそれを振り払い、逃げるように電車で駆け下りていった。

「ドアが閉まります」

構内アナウンスが車内にまで響いた。アナウンスが聞こえていない和人も、急いで男を追いかける。そんな和人の腕を、幸が掴んだ。一瞬の沈黙の中で、そのまま電車のドアが閉まる。そのまま和人が進んでいたら、ドアに挟まれていただろう。男をホームに残して、電車はそのまま次の駅へと向かっていった。

どうして追いかけてくれないんだとばかり、和人は真剣な眼差しで幸を見つめている。そんな和人に、幸は静かに微笑んで口を開いた。

「……ありがとう……」

幸の口の動きを理解すると、和人は少し俯いて首を振った。動き出した車内は、主要駅を過ぎてすっかり空いてしまった。和人はバツが悪そうに、静かに幸から離れる。幸はそんな和人に、何も声をかけられなかった。

やがて数駅が過ぎ、幸は和人に会釈をすると、一つの駅へ降りていった。和人も会釈をし、去っていく幸の後姿を見つめる。

同じ駅——に、降りることは出来なかった。和人は少し遠回りになるが、そのまま次の駅で降りた。

5、和解

数週間後。未だ素直になれない幸は、真由美に手話サークルへ出席するように何度も誘われたが、講師に和人が来ているかもしれないと、顔を出すことも出来なかった。それを知ってか知らずか、幸が和人と会う機会はなかった。

ある日の休日、幸はピアノの練習を終え、修吾と束の間のデートを楽しむと、一人暮らしのマンションへと帰っていった。そこは、同じ大学に通う女子学生専用のマンションであり、楽器も大丈夫なマンションである。

駅から十五分ほど歩くそのマンションは、近くにコンビニエンスストアなどもあるものの、住宅街の中にあり、夜は静かで暗い。幸も一人で帰る時は、心なしか早足になるくらいだ。

今日も辺りはすっかり暗い。表通りから住宅街に差しかった頃、幸の耳に後ろから足音が聞こえてきた。ちょうど、“ちかん・ひつたくりに注意”といった看板が見えたので、幸は怖くなって走るように歩き始める。

少し行くと前を歩く人が見え、幸は少しホッとした。その後姿は男性のようだが、これで一人の帰り道ではなくなった。幸はそのまま、前を歩く人と付かず離れずの距離を取りながら、早足で歩き続けた。

それから数分が経過しても、後ろにはまだ気配が近づいていた。しかし振り向く勇氣はない。遅くなった日は、いつもこの道は恐怖心を煽る。

家までもう少しのところで、幸は恐怖に耐え切れず、突然走り出した。このまま走れば、家まではあとわずか。後ろを歩く人物にも、前を歩く人物にも、自分の家を悟られることもない。そう思った矢

先、幸はつまづいて倒れてしまった。あわや、前を歩く人物を追いつ越そうとした矢先であった。

恥ずかしさで真っ赤になった幸に、ずっと手が伸びてきた。するとそこには、和人がいる。

「……和人……」

幸は驚いた。前を歩いていた人物が和人だったことに、まったく気づかなかったのだ。

和人も驚いた様子で、幸を見つめている。そんな二人を、後ろから歩いてきた人物が追い抜いていった。特に知り合いでも変質者でもなかったようだ。幸は安心しながらも、和人を見て固まった。

（……大丈夫？）

顔でそう言いながら、和人が幸を起こす。

「う、うん。平気……」

和人に支えられ、幸は立ち上がった。

暗い道路には二人だけとなっていた。派手に転んだため、ストッキングは破れ、スカートの下に見える膝からは血が出ている。どうやら転んだ原因は靴のヒールのように、右足のヒールが根元より折れていた。

「ああ……」

絶望的な靴に落胆する幸を見て、和人はしゃがみこみ、負ぶされと言わんばかりの姿勢を見せる。

「い、いいよ、そんな。恥ずかしいし……」

『……誰も見てないし、それじゃあ歩けないよ』

辺りに人が誰もいないことを確認すると、和人は静かに手話で語りかける。面と向かって、幸が和人の手話を見るのは久しぶりのことだ。

「でも……」

そうは言つものの、幸の足に激痛が走った。どうやら挫いたようである。

そんな幸を前に、和人は言葉を続ける。

『それに、裸足で帰るつもり？ そのほうがみつともないよ』

和人の言葉に、幸が吹き出した。確かに言われた通りである。和人はもう一度、背中に負ぶされとアクションを起こす。幸も静かに頷いて、和人の背中に負ぶさった。和人はそのまま幸を背負い、静かに歩き出した。

真つ暗な道は、もはや歩く人影もない。二人だけの世界がそこにあった。

幸は人差し指で家までの順路を指示すると、和人は黙ってその方向へと歩いてゆく。思えば小さい頃、和人を背負うことはあっても、年下で小さかった和人に、自分が負ぶさることはなかった。和人の背中では、もう成人男性と同じくらい、広い背中をしていた。

「ありがとう……」

部屋の玄関で、幸が手話交じりにそう言った。そんな幸に、和人は首を振ってすぐに背を向ける。

「あ、上がって行って」

帰ろうとした和人に幸が言った。和人は少し驚いた顔を見せ、断りの手と首を振る。

『いいよ』

「お願い、少しだけ……お礼も言いたいし、話したいことがあるの……」

幸が言った。その切実な目を見て、和人は少し考えた後、頷いた。
『じゃあ、少しだけ……』

和人は緊張気味に、幸の部屋の中へと入っていった。

二人は互いに緊張していた。幸は恋人の修吾以外の男性を部屋に上げたことはなかったので、少し軽率だとも思ったが、相手が和人のので心配はいらないと思った。

和人は和人で、長年避けていた幸の部屋へ招かれ、戸惑いと複雑な感情を入り乱せていた。

「どうぞ」

幸がお茶を差し出して言う。和人はペコリと頭を下げて湯飲みを手取るものの、間が持たないといった様子で、目を泳がせている。そんな和人に、幸は突然、頭を下げた。

「ごめんなさい！」

目の前の幸に、和人は首を傾げている。

「……なに？」

人差し指を振りながら、和人がそう尋ねた。

「ごめんなさいって……ずっと謝りたかった……」

手話交じりに幸がそう言ったことで、和人は心当たりを探した。そして何を謝っているのか、和人も理解する。互いに避けていた原因であろう。

「……何も気にしてないから、謝らなくていいよ」

和人が、静かに微笑みながらそう言った。幸は不安げな表情で、和人を見つめている。

「でも……」

「本当に、気にしてないから」

「和人……」

幸は言葉に詰まっていた。かつて和人に、「もう話しかけないで」と言って傷付けたことが、未だに胸につつかえている。和人にずっと謝りたかった。再会してもそれが果たせないままで、意地を張り続けている自分が嫌だった。偶然にも二人きりで出会った今、謝るチャンスは今しかないと思ったのだが、その先の言葉が見つからない。

そんな幸に、和人が手を動かす。

「……僕が君でも、きつと同じことをしたと思う……結局僕たちは、住む世界が違っただよ。それなのに、僕が出しゃばって君にばかり頼っていたこと、君が怒らないはずがない。僕が怒る権利はないんだよ……」

ゆっくりと手話でそう語る和人に、幸は首を振った。

「違う！」

幸の言葉に、和人は驚いたように幸を見つめている。

「違う……そんなだったら、私は謝ってない。私がしたことは、いけないことなの！ 和人、そんな言い方しないで……住む世界が違うなんて有り得ない。私たちは同じ人間なんだもの。和人は怒っていいんだよ。障害のある当人がそんなことを言ったら、差別なんて永久になくならないわ！」

自分のしたことを責めながら、幸は必死な瞳で和人に訴えた。和人に責めてほしかった。そうすることで、過去の過ちを悔い改められる気がした。そしてたとえ勝手でも、和人自身には臆病になっただけじゃなかった。

そんな幸を見つめながら、和人は静かに微笑んでいるだけだった。
『さっちゃん……』

やがて、和人がそう言った。

『……僕は聴覚を失って、たくさんの差別を受けてきたよ。でも僕には君みたいな友達が、ずっと隣にいてくれた。手話を覚えてくれた。いじめっ子から庇ってくれた。それだけで、僕は強くなれたんだ。だから、君が僕から離れていっても、僕は悲しくなんてなかったんだ……だってそれは、君から外の世界に向けられる、新しい一歩になったんだから……だから僕は、君にお礼こそ言っても、責めたくないかないよ』

和人の心が、ストレートに幸に伝わる。とてつもなく大きな心を持つような和人の優しさが、幸の心を溶かしていく気がした。幸の瞳から、大粒の涙が伝う。

「ごめんね、和人……今までずっと、ごめんね……」

そう言う幸に、和人は静かに首を振った。

『もう自分を責めないで……僕は大丈夫だよ。新しい友達もいるし、こうしてまた君と話すことが出来たんだから』

「うん。うん……」

尚も泣いている幸の肩を、和人がそつと叩いた。それは、和人が

子供の頃から見せていたコミュニケーションの一つだ。

『じゃあ僕、もう行くよ』

和人が、立ち上がって言った。

「あ、うん……」

幸が返事をした時には、和人はすでに玄関で靴を履いている。履き終わると、和人は思い出したように振り向いて、幸に笑いかけた。

『婚約したんだってね。おめでとう』

「う、うん。ありがとう……」

未だ涙目の幸が、素直に答える。

『じゃあ、おやすみなさい』

「うん、ありがとう。気を付けて……」

言葉少なく、和人はそのまま幸の部屋を後にした。

幸はうまく言葉を交わせなかったことに落ち込むものの、長年凍りついた二人の溝が静かに埋まっていくのを感じた。

6、距離

数日後。和人は再び、幸の学校へ手話サークルの講師として呼ばれ、出向いていった。もう何度か来て慣れた学生会館は、今日も大勢の学生たちで賑わっている。その一角に、手話サークル責任者の真由美がいる。その前には、幸と修吾もいるようだ。和人は幸がいることで少し戸惑いながらも、約束の時間が近づいているため、意を決して真由美の元へと向かっていった。

「あ、和人くん！」

真由美が和人に気づいて手を振る。和人は会釈をしながら近づいた。

「和人君、幸と幼馴染みなんだって？　今聞いてたところ」

そんな言葉に、和人は幸を見つめる。

「うん。お互い言いそびれちゃったんだよね。長いことしゃべってなかったからさ……それに、最初会った時はすっかり大人になっちゃって、本当に和人かどうかわからなかったし……」

苦笑しながら、幸が言った。先日、和解出来たことで、和人との関係もすべてみんなに言ってしまったかった。

「本当、ドン臭いところあるよな、幸は」

修吾もその話を特に気に留めず、笑いながら言う。和人も合わせるように、静かに微笑んで頷いた。

「もう、おかしいと思ったのよね。二人とも、よそよそしいからさ」

「そんなことないわよ……あ、もう行かなきゃ、修吾」

真由美の言葉に苦笑しながら、幸が修吾に言った。真由美は首を傾げる。

「あれ？　二人揃って、今日は何かあるの？」

「うん。今度は私が出る定期演奏会。修吾も出てくれることになってね……これから忙しくなるんだ」

「そっいうこと。真由美も一応、音楽学部通ってたから、真面目

に練習に出るよな」

幸と修吾が言う。真由美は口を尖らせた。

「私は実家が音楽教室だから、卒業さえ出来れば、就職先は決まってるのよ」

「ハハ。じゃあ俺が就職出来なかったら、ぜひ山ノ内音楽学院で雇ってくれよな」

「なに言ってるの。二人は将来有望でしょうが。あちこち演奏会に引っ張りだこのくせに」

「まあな。じゃあまた。水上君も、また今度」

修吾は真由美とそんな会話をすると、幸とともに去っていった。

「まったく、相変わらず仲の良いことで……じゃあ、うちらも行こっか」

立ち上がって真由美が言った。和人もそれに続き、頷く。

「ねえ、和人君。彼女って……いないよね？」

歩きながら、突然真由美がそう切り出した。何の脈絡もなく尋ねられたので、和人は驚いた顔をする。

「私たち、付き合わない？」

和人の言葉を待たずに、真由美がそう言った。学生会館の真ん中で、真由美の声が響く。数人の学生が気づいてこちらを見ている中、和人は辺りを見回した後、苦笑した。

『何を言うかと思えば……からかわないでくださいよ』

「べつに冗談なんかじゃないわ。それとも、私じゃ駄目ってこと？」
そこにいつもの明るい真由美の姿はなく、真剣な眼差しで和人を見つめている。

『駄目じゃないです……すみません、笑ったりして……』

真由美の本心はわからなかったが、和人は笑ったことを詫びた。

「じゃあ、私と付き合おう。私、真剣だからね。これからもっと手話も覚えるし、あなたのことが知りたいんだ。もう合コンとか行かないって約束したっていい。あなたも、これから私を知ってくれればいいから」

積極的な真由美に、和人は小さく俯いた。戸惑いは隠しきれない。思えば愛の告白などされたことは初めてで、素直に嬉しいと思った。「……駄目？ 幸と修吾みたいに、私たちもお似合いの二人になると思うんだけど」

その言葉に、和人は幸せそうな幸の顔を思い出す。恋愛……自分にも出来るだろうか。しかし目の前には、こうして和人を見つめる女性がいる。和人は静かに、右手を動かした。

『……いいですよ。本当に、僕でよければ……』

「いいの？ やった！ じゃあ、よろしくね」

真由美の言葉に、和人もお辞儀をした。

「ええっ！ 和人と？」

次の日。話を聞いた幸が、真由美に驚いていた。

「そう。私、カズと付き合うことにしたんだ」

「ちよつと待つてよ！ 遊びなんかで、和人を巻き込まないで。あの子は何も知らない子よ。ハンデだってあるし……真由美が相手出来るとは思えない」

真由美の言葉に、いつになく幸が取り乱して言う。特定の恋人は作らず遊び呆けていた真由美に、和人が傷付けられるのではないかと思うと、幸は気が気でなかった。

「失礼ね。私は本気で彼が好きなのよ。合コンだってもう出ないし、真剣に付き合おうと思ってるんだから。遊びじゃないわよ」

引き下がることなく、真由美がそう言った。しかし幸は心配な様子である。

押し黙った幸に、真由美が口を開く。

「……まあ幸が言うのもわからなくもないよ。私だって不安もあるし。だけど、付き合ってみてからわかることもあると思うんだ。遊びじゃないから安心してよ」

「二人が決めたなら、私が口出すことじゃないけど……」

最後にそう言った幸は、不安気な表情を浮かべていた。

その日。幸は電車の中で和人を見つけ、声をかけた。

「和人……もしかして、駅一緒？」

幸が手話交じりに尋ねる。先日、同じ道を歩いていたことで、家は近くかもしれないと思っていた。和人は、少し人の目を気にするように頷く。

「そういえば、和人のこと何も知らないね。大学、どこの学部に入っただっけ？」

苦笑しながら幸が尋ねる。確かに最近の和人のことは、何も知らない。

『文学部』

静かに、和人がそう答えた。

「文学部か。和人、作文とか上手だって、昔から褒められてたもんね」

幸の言葉に、和人は少し照れながら頷く。

「そういえば、家はどこなの？ 寮？」

『ううん。一応、一人暮らし』

「へえ。大変だね」

『少しね』

そう言った時、二人は駅に着いて、改札を出ていった。

「真っ直ぐ帰る？」

幸の質問に、和人は頷いた。

「じゃあ、一緒にご飯でも食べない？」

『ううん。遠慮しておくよ』

「どうして？ あ……真由美に悪いか。付き合い始めたんだってね……」

その言葉に、和人は静かに笑って頷く。

『修吾さんにも、悪いよ』

「そっか……そうだね。でも、べつに私たちは幼馴染なんだし、おかしく……」

幸がそう言いかけた時、和人は静かに幸の手を止めた。

「和人？」

『……みんなが見てる』

俯き加減でそう言う和人に、幸はショックを受けた。駅前のため、大勢の人が珍しそうに、こちらを見ながら歩いている。

「私は……大丈夫だよ。この間、私が間違いだったって謝ったばかりじゃない。人前で手話していいんだよ。私はもう気にしないし、和人はそれが生活手段じゃない」

『でも、君まで耳が聞こえないと思われるのは嫌だ。ある程度なら、唇読めるよ。だから人前では、手話じゃなくても……』

幸に対して、和人が言う。目に映る幸の顔は強張り、悲しそうな目で和人を見据えている。

「おかしいよ、和人……私が和人を傷付けたこと、一生許してくれないつもりなの？」

『違う。そういうことじゃなくて……』

「もういい！」

そう言うのと、幸はその場から走っていった。

和人の中で、幸の手話が思い出される。「私が和人を傷付けたこと、一生許してくれないつもりなの」そんなつもりで言ったわけじゃない。ストレートに伝えられない言葉が、もどかしかった。

家に戻った幸は、堪え切れずに涙を流していた。悔しかった――。数年前に自分が拒絶したことなのに、矛盾していたが、自分のエゴというのはわかっていても、和人には堂々としていてほしい。自分が付けた傷など跳ね返すくらいの強く心でいてほしい、そう思った。だが自分が和人を傷付けてきていたことが、今になって返ってきたように幸を苦しみ、離れなかった。

7、不満

一カ月後。和人が幸の学校の学生会館に行くと、後ろから肩を叩かれた。するとそこには、幸の恋人である修吾がいる。

「やあ。今日も講師？ それとも、真由美と待ち合わせ？」

『両方です』

修吾の問いかけに、笑顔で和人が答える。

「そっか。大変じゃない？ 真由美と付き合うのは」

その言葉に、和人は笑って首を振った。

「そっか。まあ、なんだかんだで、うまくいってるみたいだからよかった……あ、俺の手話、伝わってる？ 幸に教えてもらって、少しは慣れてきたつもりだけど……」

『上手ですよ』

「あはは。ありがとう」

照れながら修吾が言う。和人も簡単な手話を選んで、問いかける。

『今日も練習ですか？』

「練習……ああ、うん。もうすぐ定期演奏会……ええっと、定期……あ、これ」

修吾は言おうとしていることの手話がわからず、カバンから定期演奏会のチケットを和人に渡した。和人も理解して頷く。

「これがあるんだ。幸も出るから、よかったら来て……って、君にはつまらないかな……」

演奏会が和人にとって面白いはずもないと、修吾は気遣ってチケットを下ろした。そんな修吾に微笑みながら、和人は首を振った。

『いえ、ぜひ見に行かせてもらいます』

「そう？ じゃあ、こっちも頑張らなきゃな。ああ、もう時間だから、俺はこれで」

『はい。また……』

和人は会釈すると、去っていく修吾を見つめた。

「カズ！」

そんな和人の腕を、後ろから真由美が取って言う。

『遅いよ』

「ごめん、ごめん。今日、テストがあつてね。長引いちゃった」

和人は真由美に頷く。二人は笑って歩き出した。

「ねえ。今日、家に来ない？」

突然、真由美がそう言った。

真由美はいつも突然だ。前触れもなく話を切り出す。和人はまたも驚いて、真由美を見る。真由美は実家暮らしをしていて、何度か家まで送ったことはあるものの、家上がったことは一度もない。

『……どうして急に？』

怪訝な顔をして、和人が尋ねる。

「今日、両親が出かけててね。うちは兄弟みんな独立しちゃってるし、私一人つてわけ。一人で怖いなあ、なんて」

試すような意地悪な眼差しで、真由美が和人を見る。和人は少し恥ずかしくなった。

『でも、ご両親の留守中に入り込むなんて……』

和人は照れながらも、至って冷静に物事を判断している。なににより二人きりでは間が持たない気がする。

「女性から誘ってるのよ。断るなんて、男のことじゃないわよ」

真由美はいつものように、強引に和人と腕を組んでいる。こうなれば逃げられる雰囲気ではない。和人は苦笑すると、頷くしかなかった。

その夜。和人は初めて招かれた女性一人の家に、緊張と戸惑いを隠せなかった。一ヶ月ほど付き合つて、真由美のことは大分わかってきたものの、和人は真由美のように恋に積極的にはなれていない。

「カズ……私のこと、好き？」

部屋の中で向き合いながらそう言う真由美に、和人は頷いた。

「頷くんじゃなくて、ちゃんと行ってよ」

真由美にそう言われ、和人は静かに右手を上げた。

『好きです』

和人の行動に、真由美は少し空しくなった。デートに誘うのもキスをするのも、いつも真由美からだ。和人がそのうち一つでも、自分からしてくれたことは一度もない。

「……もう、いい」

突然切れたムードに、和人は真由美の肩を叩く。

『どうしたの？』

「もういいって言ったの。ムードも何もなくなっちゃった」

少し膨れっ面で、真由美が言う。しかし、どうして真由美が怒っているのか、和人には理解出来なかった。

『僕、何かした？ 何かしたなら謝るよ、ごめん』

もはや和人には、謝ることが癖のようにもなってしまうていた。健常者同士には簡単な会話でも、和人にとっては些細なことでもこじれることも多々あった。そうだった時は先に謝ってしまうことが、和人の生きる上での知恵になってしまっていたのである。

「……カズ、幸のことが好きでしょう？」

そんな和人に、少し意地悪そうに真由美が言った。和人は目を泳がせ、驚いたように真由美を見つめる。

『……どうして？』

「何となくね、わかるわよ。そんなカズに振り向いてほしかったけど……強引に誘っても駄目みたいね」

苦笑しながらそう言う真由美に、和人は俯いた。

幸への恋愛感情に、自分自身気づいていないわけではなかった。だがその感情が、いつから始まっていたことなのかはわからない。しかし気づけば幸の面影を追っている自分に、嫌気すら差す。いつしかその感情を押し込め、真由美に指摘されるまで気づかない振りをしていたことを、和人は思い知らされていた。

『……ごめん』

「いいのよ……私もフェアじゃなかったかな。カズの気持ち知って

いながら、付き合おうなんて言っただもん。私たち、これ以上は無理みたいだね」

こんな時でも、真由美の言葉はサバサバとして聞こえる。和人はそれ以上何も言わず、真由美の肩を叩いた。和人の中でも、何か吹っ切れたような清々しい気持ちがあった。

『ありがとう……君には、いろいろ教えてもらったよ』

和人の言葉に、真由美が微笑む。

「そうね。じゃあ、気をつけてね……サークルのほうの連絡は、変わらずさせてもらうから」

『わかった。おやすみ……』

そう言くと、和人は真由美の家を出て行った。

一人になった真由美は、人知れず涙を流した。和人のことは真剣だった。だが和人の気持ちが自分に向くことは、一生ないのかもしれない。声で会話が出来ないからこそ、真由美は和人の本心に触れていた。

数日後。定期演奏会の日、和人は修吾から貰ったチケットを手し、幸の通う音楽学部のホールへと向かっていった。すでに客席は満杯で、和人は後ろのほうの席に着いた。

音楽学部の演奏会は月に何度もやっていて、全生徒が各演奏会に何かしらで関わっている。修吾のようにあちこちの演奏会に呼ばれる生徒もいれば、真由美のようにあまり真面目に取り組まない生徒もいる。しかし一番多いのは、幸のように数ヶ月に一度の割合で取り組んでいる生徒がほとんどである。

しばらくして、演奏者たちがステージに上がった。和人の視線は、ピアノ奏者の幸だけに注がれる。指揮者が手を振り上げると、演奏が始まった。当然、和人には聞こえないものの、楽器の波動が胸に伝わってくる気がした。

ふと、和人の耳がまだ聞こえていた頃のことを思い出される。

「カズちゃん。今日、ピアノのお稽古なの」

小さき幸がそう言った。毎日遊んでいた二人だが、幸にピアノの稽古がある日は、いつもより早く帰らねばならない。それはとても残念だったが、和人は幸が奏でるピアノの音色を聞くのが好きだった。

ある時は幸の部屋の隅で、おとなしく練習風景を見つめる。またある時は、隣の幸の家から聞こえてくるピアノの音色を、自分の部屋で聞いていた。

そんな幸が弾くピアノの音を、和人はもう聞くことが出来ない。それはとても切なかったが、いつ見ても変わらぬ生き生きとした幸の顔が、遠くからでも見える。踊るような指先、水を得た魚のように、幸とピアノはいつまでも一緒のような気がした。

演奏会が終わると、演奏者の学生たちがロビーまで出てきていた。人の流れに任せて、和人は出入り口へと向かっていく。そんな和人の目に幸の姿が映った。

「和人」

幸は演奏会をやり遂げた澁刺とした笑顔で、和人に声をかけた。前回、喧嘩のようになっちゃったものの、普通に話しかけることが出来たのは、今のこの雰囲気のおかげだろう。

「ありがとう。見に来てくれてたなんて」

『大成功だね。やっぱり前より腕を上げたね』

和人もいつも通りに話しかける。そんな自然のことに、二人は自然と笑みが零れる。

そして幸は、和人の言葉に驚いた。

「腕を上げたって……わかるの？」

『うん。お客さんの反応も伝わってきたよ。前は右手が覚束なかったりしてたけど、今日は安心して見てられたよ。さすが音楽学部に入っただけのことはあるね』

「生意気言っちゃって」

二人は笑った。そんな二人を見つけ、修吾が近づいてきた。

「本当に見に来てくれたんだ。なんだか二人、楽しそうだね」

『お疲れ様でした。お招きありがとうございます』

「いやいや。退屈しなかった？」

修吾の言葉に、和人は静かに笑って頷く。

「そう、よかった。じゃあ、そろそろ戻らなきゃ。幸も行こう」

「うん。じゃあ、和人。来てくれてありがとう」

二人は和人に礼を言々と、ロビーから去っていった。

その夜、修吾は幸の部屋にいた。幸を家まで送ったので、少し寄ったのだ。

「はい、お茶」

「あ、うん。ありがとう……」

お茶を差し出され、修吾は湯飲みを手を取った。しかし口をつけることなく押し黙る。修吾の胸に、何かの思惑がつかえていた。

「修吾、どうしたの？」

それを察して、幸が修吾の顔を覗き込む。

「あ、いや……」

「変なの。急に黙っちゃって」

そう言って笑う幸に、修吾はそっとキスをした。

「……修吾。本当にどうしたの？」

「幸……水上君とは、本当に幼馴染みだけ？」

突然の問いかけに、幸は驚いた。

「え？」

「いや。なんか、すごく仲が良いから、ちょっと妬けるっていうか……ああ、もう俺、何言ってるんだろ。幸を信じてないわけじゃないのに。格好悪い……」

そんな修吾の言葉に、幸は赤くなって笑った。

「もう、修吾ってば」

「幸……」

「私と和人は正真正銘、幼馴染みなだけよ。物心つく前から仲は良かったし、和人は両親が共働きで、あんまり友達もいなかったから、いつしか私が母親代わりみたいになってたの。本当にそれだけだよ。愛があるとしたら、家族愛かな」

幸はそう言った。それは幸の本心である。そんな幸に、修吾も安心して笑う。

「そっか……そうだよな。ごめん、変に勘ぐったりして」

「ううん。不謹慎だけど、ちょっと嬉しい。だって修吾ってば、あんまりやきもち妬いてくれないし」

「そんなことないよ。でも信じてるんだ。俺が幸を好きなように、幸も俺が好きだってね。そうでも思っていないと、やってられないよ。どんどん忙しくなってきた、毎日一緒にいられるわけじゃないしさ……」

修吾の言葉が、幸は素直に嬉しかった。二人はもう一度キスをした。

8、目撃

数週間後。放課後の廊下を幸と修吾が歩いていると、前から真由美がやってきた。

「あらお二人さん。相変わらず、仲が良いようですね」
「からかうように、真由美が言う。」

「まあね。どうしたの？ その譜面」

幸が言う。真由美は両手一杯に、本や譜面を持っていた。

「定期演奏会用の資料。今まで逃げ回ってたけど、最低限の演奏会には出なくちゃいけないでしょ？ しばらくサボってたから、いよいよね……」

苦笑して真由美が言った。そんな真由美に、幸は微笑みながら口を開く。

「いいじゃない。真由美の家、音楽教室やってるんでしょ？ 家に先生もいるし、練習もし放題じゃない」

真由美の家は音楽教室と楽器店を営んでいるため、真由美は音楽学生には願ってもない恵まれた環境にいるが、当人は就職先が実家と決まっているためか、必要最低限以上のことをしようとしなない。

「あのねえ。私は私で苦労してんのよ。ここに入るまでだって、親と喧嘩したりしたんだから。だいたい両親ともに音楽やってんのよ？ 小さい頃から絞られてきたのよ。その上、学校でまで絞られなきゃいけないなんて、ぞつとするわ」

真由美の言葉に、幸と修吾は笑った。

「相変わらずだな。最近見かけないと思ったら、遂に真由美も演奏会か」

「先に言っとくけど、聞きに来ないですよ。同じ学部の学生だからって、二人とはレベルが違うんだから」

眉を顰めて真由美が言う。照れ隠しなのか、少し怒ったような素振りを見せている。

「またまた謙遜しなさんな。そういえば水上君とも会わないけど、手話サークルはどうなってるの？」

修吾が尋ねた。今までは、月に何度か手話サークルの講師として和人が招かれていたり、真由美と付き合っていたために頻繁に見かけていたが、ここしばらくは見かけていない。

「……彼も学校が忙しいみたい。バイトも始めたらしいから、新しい講師見つけたの。それについては修吾の弟さんとは話してあるけど、聞いてなかった？」

真由美が言った。

和人を講師として話をつけてくれたのは、ボランティア活動に詳しい修吾の弟だったため、修吾を通しての話し合いはなされていなかった。

「あ、ごめん。弟とも全然会ってないんだ。同じ家に住んでるのに、すれ違いの生活だね。そっか、まあ水上君にも彼の生活があるんだしね。じゃあ真由美、頻繁に会えなくなって寂しいんじゃない？」

「べつに。別れたから……」

そう言った真由美に、修吾と幸は驚いた。そして幸が口を開く。

「別れたって、和人と？」

「うん。あんたたちの演奏会の時には、もう別れてたわ」

「どうして……」

変わらぬ表情で淡々とそう話す真由美に、幸は不安になって真由美を見つめる。

「大丈夫よ。お互い傷ついてないと思う……まあ、性格の不一致ってやつかな。心配しないで」

不安気な表情を見せる幸に、真由美が言った。

「それならいいけど……」

「じゃあ練習行かなくちゃ。またね」

真由美はそう言っと、そこから去っていった。

「別れてたんだ……いいコンビだと思ってたけど」
ぼそっとそう言った修吾に、幸は静かに頷いた。

「うん……」

それからというもの、幸は和人の顔を見る機会はなくなっていた。思えば家が近いというもの、和人の住所もメールアドレスも知らない。接点がなくなった二人は、またどんと離れていった。

数カ月後、正月――。

幸は修吾とともに、幸の実家へと戻っていた。一つは新年の挨拶も兼ねてだが、昨年、幸は名誉あるピアノコンクールで入賞を果たしていたため、実家ではささやかながらも派手なパーティーが行われていた。

「おめでとう、幸。あんな賞を頂けるなんて、思ってもみなかったわよ」

いつもは物静かな母親も、嬉しさに取り乱して涙ぐんでいる。

「お母さんってば。でも、私も本当に嬉しいんだ。一歩前進だもんね」

「本当。あれからマスコミにも注目されるようになったし、あといくつか賞でも取ったら有名人だね」

幸の言葉に、今度は修吾が言った。

「あといくつかって……修吾じゃないんだから、そんなポンポン取れないよ」

「そんなことないって」

二人のやり取りを、微笑ましそうに幸の両親が見つめている。

「あとは二人が無事に結婚してくれば、我々も安心だな」

幸の父親がそう言った。幸はそれを聞いて、少し赤くなった。

「やだなあ、お父さんってば。結婚は卒業してからなんだからね」

「でも、あと一年で卒業だろう。今年は結納も済ませる予定だし、ますます忙しくなるな。修吾君、不束な娘ですが、これからどうぞよろしく願います」

父親の言葉に、母親も続いてお辞儀をする。修吾も突然改まって、両親にお辞儀をした。

「こ、こちらこそ。大事な一人娘の幸さんを頂いちゃって……でも、絶対幸せにしますから」

修吾がそう言った。幸は嬉しそうに笑う。

正月早々、目出度い気分だった。

「わざわざ送ってくれなくてもよかったのに」

駅まで一緒に来た幸に向かって、修吾が言う。修吾は挨拶に来ただけのため、幸だけが実家に残ることになる。

「いいじゃない。帰りに本屋さんとかも寄りたいし。それより、今度は学校で会えるのかな？」

幸が尋ねる。

「そうだな。まあ、たまの休みだから、正月くらいはゆっくりして親孝行してあげなよ」

「うん。修吾もね」

「俺はもともと実家暮らしだけどね。ゆっくりするよ。そういえば、水上君も帰ってるのかな。お隣さんなんだろう？」

修吾が和人について尋ねた。幸も修吾も、和人とはすっかりご無沙汰だ。

「さあ……帰ってるかもね。全然会ってないから、わかんないけど」
「今度、一緒に食事にも誘えるといいな。そういえば、真由美と付き合うだの別れただのがあったから、結局講師のお礼も言えてないもんな……もし会ったら、誘っておいてくれよ」

二人が和人と最後に会ったのは、和人が手話サークルの講師をしていた頃のため、あれからずいぶん経っている。弟経由で手話の講師を頼んだ修吾は、礼も言えないまま会えなくなったのが、ずっと気かりだったようだ。

幸はそんなところまで気遣っている修吾を、素敵だと思った。

「うん、わかった」

「じゃあまた。連絡するから」

修吾はそう言っと、駅の中へと消えていった。幸は正月の街を、一人歩き出した。

正月休みの街は少し寂しそうに見える。そんな中で大型の量販店だけは開店しており、人波が見える。

幸は量販店内にある本屋へと向かっていった。買い忘れていた雑誌を手にとろうとすると、ふと見覚えのある後姿が奥の棚に見えた。和人である。

「和人……」

思わず幸が呼びかける。しかし、声だけでは振り向くはずがない。幸が駆け寄ろうとすると、歩き出した和人の横顔が見えた。そんな和人に、一人の女性が駆け寄った。

一般男性の中では低めの背丈である和人を、優に越すくらいの背の高い女性は、大人の雰囲気を出し、低めのヒールのパンプスから仕事をしている女性と見受けられる。

幸は思わず、棚の陰に隠れた。

『探してる本はあった？』

女性が、手話だけでそう尋ねた。

『ううん。やっぱり取り寄せないと駄目みたいだな。今日はいいや。行くっ』

和人はそう言っと、女性とともに去っていった。幸は去っていく和人の後姿を、ただ見つめていた。

「彼女……かな」

そこにいた和人は、もはや幸が知り得ない男性であった。幸は少し複雑な心境でいた。

9、会話

「学校はどう？ バイトと両立じゃ、キツインじゃない？」

街を歩きながら、本屋で一緒にいた女性が、和人に尋ねる。

『もう慣れたよ』

「そう？ あの編集長、人使い荒いつて有名だから」

その言葉に、和人が笑う。

女性の名は、森下祥子。年齢は二十七歳で、仕事はイラストレーターをしている。

半年ほど前から、和人は親戚筋の出版社で校正のアルバイトをしており、祥子とはそこで知り合った。そこでよく会う祥子は、いつしか手話を覚え、和人によく話しかけてくれた。そんな祥子に、和人も心を開いているが、一般的な恋人といえるような関係ではまだない。だが、互いの心が通じ合っていることは、当事人が一番よくわかっていた。

「今日はごめんね。用もないのに、突然呼び出しちゃって」

祥子が言った。

『うっん、いいよ。年末はバタバタして会えなかったし』

「……今度はいつ会えるかな」

『また、すぐ会えるよ』

和人はそう言っつて、祥子の腕を軽く叩いた。小さい頃から心を許した人に見せる、和人の親しげなコミュニケーションの一つである。和人の言葉に、祥子は嬉しそうに微笑んだ。

「うん、そうだね」

『また連絡するよ。今度一緒に、どこか行こう』

駅で和人に見送られ、祥子は去っていった。

もう女性をデートに誘えるほど、和人は大人にもなっていたし、幸以外に心が通い合える存在が出来ていた。

実家に戻った幸は、台所へと向かっていった。台所では、溜まった食器を母親が片付けている。

「お母さん。私、やるよ」

幸が言う。実家にいた頃は家事など進んでやるほうではなかったが、今は小さな親孝行もしたいと思う。

「いいわよ。たまに帰ってきたんだもの。ゆっくりしてなさい」

幸の思いに反して、母親がそう答えた。

「でも、こういう時じゃないとやらないし……ああ、結構おせち余ってるね」

テーブルに置かれたおせち料理を見ながら、幸が言う。

「修吾さんが来るっていうし、多めに作っちゃったのよね。カズちゃんの家にあげても、まだ残ってるものね」

「え、和人の家にもおせち分けたの？」

「うん。大晦日の夜に持って行つてね。カズちゃんの家も、お母さんが大変だしね」

「……和人のお母さん、どうかしたの？」

聞き捨てならない台詞に、幸がそう言った。

「ああ、幸は知らないのか……去年、カズちゃんのお母さんが倒れてね。病名ははっきりしないみたいだけど、今までずっと働き詰めだったから、一度倒れて病弱になっちゃったみたいでね……」

「へえ。知らなかった……」

「それつきりカズちゃんも実家に帰ってきて、お母さんの面倒見ているみたいよ。まあ面倒っていうよりは、お母さんもカズちゃんがいたほうが安心だろうしね」

母親の言葉に、幸は目を丸くした。

「じゃあ和人、ここから学校へ通ってるの？」

幸が驚いたのは、実家のあるこの街から学校までは、片道一時間以上あるからである。通えない距離というほどではないものの、学生でアルバイトもしている和人にとっては、辛いものだということ は容易に想像出来た。

「そうみたいよ。あの子、家族想いの優しい子だからね。遠くても通ってるみたい」

「知らなかった……」

「さあ、わかつたら、おせちたくさん食べてよね」

母親の言葉に苦笑しながら、幸は久々の家族の団欒を楽しんでいた。

しばらくすると、幸の家の呼び鈴が鳴った。幸の母親がすぐに玄関へと向かっていく。

「はい。あ、カズちゃん」

居間にいた幸は、母親のその声を聞いて玄関へと向かっていった。しばらく会っていない和人に、会いたいと思った。

「美味しかった？ おせち」

幸の母親も少しの手話は出来るが、大きな口でハキハキと話すため、和人は口の動きで大体の言葉は理解出来た。

『美味しかったです。いつもありがとうございます』

微笑みながら、和人が答える。

「そう、よかったわ。よかったらもつと食べない？ 作りすぎちゃってね……」

「お母さんってば。もう結構食べたから、うちだけでも食べれるわよ」

様子を伺っていた幸が、やっと話に入って言った。

「あけましておめでとう、和人」

幸の言葉に微笑んで、和人も頷く。

『あけましておめでとうございます。帰ってたんだね、久しぶり』
「うん。いつの間にか、久しぶりになっちゃったね」

二人は笑った。

「カズちゃん。立ち話もなんだから、上がっていったら？」

和人と幸の間に入って、母親がそう言う。和人は首を振った。
『いいえ。おせちの入れ物、返しに來ただけですから。母もよろし

くお伝えくださいと言っていました」

「そう？ ゆっくりしていけばいいのに」

「和人、ちよつと話したいことがあるの。私、送るよ」

母親の長話になる危険を断ち切つて、幸は和人とともに家を出て行った。

『どうしたの？ 送るって……』

和人は苦笑して、幸を見つめている。五歩も歩けば和人の家だ。

「あのね、修吾から言付かって……ほら、講師のお礼も言えてなかったから、気にしてるみたいなの。だから今度、一緒に食事でもしませんかって」

修吾からの言付けを、そのまま幸が伝えた。

目の前にいる和人は、幼馴染みであると同時に、もはや知らない男性という感覚も入り混じっている。久しぶりに会ったということもあり、幸は少し緊張してそう言った。

そんな幸とは裏腹に、和人だけは今までと変わらず、優しい眼差しを幸に注いでいる。

『ああ、べつにそんなのいいよ。講師といっても大したことはしてないし、バイトが忙しくて途中で辞めさせてもらったんだし……』

「でも、それじゃあ修吾の気持ちが収まらないのよ。彼、そういうところは律儀だから……」

幸の言葉に、和人は微笑んだ。

『わかったよ。そういうことなら……』

「よかった。今度、修吾と話して連絡するね。あ……メールアドレスとか、持つてる？」

和人は頷きながら、Gパンの後部ポケットから携帯電話を取り出した。

「そつか。和人も携帯くらい持つてるよね」

『そういえば、教えてなかったね』

「あ、うん……よかったら教えて」

『いいよ』

二人は、互いのメールアドレスを交換した。

『寒いから、早く中に入ったほうがいいよ』

携帯電話をしまいながら、和人がそう言った。

『そうだね。風邪引いたら大変だもんね』

『そうだ。ピアノコンクール、入賞おめでとう』

和人が言った。幸は驚いて目を見開く。

「……知っててくれてたの？」

『当然だよ。新聞でも取り上げられてたじゃない。凄いね』

『そんなことないよ。でも、少し忙しくなっちゃって……』

『いいことだよ。さっちゃんの夢じゃない。ピアノは身体の一部でしよう？』

和人の言葉に、幸は微笑む。

「うん。ありがとう」

『これからも、頑張ってね』

「うん。和人も……」

幸はそう言いかけて、和人の母親が倒れたことを思い出した。

『あの、お母さんが大変だって聞いたけど……大丈夫？』

その問いかけに、和人は優しく微笑んだ。

『大丈夫だよ。今まで僕のために、必死に働いてきたのが祟ったんだ、きつと……』

『そんな言い方、よくないよ』

『うん……だから、これからは僕が頑張らないとね』

しっかりとした和人の言葉に、幸は頷いた。

「うん。頑張ってね……」

『さっちゃんも。じゃあ、また』

そう言うと、和人は家へと入っていった。幸は寒さに小さくくしやみをする、家の中へと入っていった。

10、会食

数週間後のある日。和人の元に幸からメールが届いた。修吾と三人での食事会の日取りが決められていた。和人はあまり気乗りしなかったが、二人の顔を立てるためにも受けようと思った。

メールから数日後、和人はとあるダイニングバーへと向かっていた。すると、店の前にはすでに幸がいる。

『ごめん、遅くなった？』

走り寄って、和人が言った。

「うっん、今来たの。入ろう」

幸に連れられ、和人は店の中へと入っていった。落ち着いた雰囲気、店の店内の一角に、二人は通された。しかし、そこには誰もいない。

『修吾さんは？』

「修吾は、車置きに行ってるの。すぐ来るから」

和人が尋ねると同時に、幸が答えた。和人は頷くと、席に着く。

「今日は修吾の奢りだから、じゃんじゃん食べちゃってね」

そんな幸の言葉に、和人は笑った。すると修吾がやってきたので、和人は立ち上がる。

「やあ、わざわざ呼び立ててごめんな。しかも遅くなっちゃって…」

…」

すまなそうにする修吾に、和人は首を振る。

『いいえ、お久しぶりです。お招きありがとうございます』

「いやいや。本当、久しぶりだね。なかなかお礼が言えなくてごめんな。会う機会もなくなっちゃったから、どうしてるのかと思ってたんだ。ああどうぞ、座って」

一同は席に着いた。

「今日は俺の奢りだから、好きなの食べてくれよ」

修吾はそう言いながら、自らもメニューを見つめる。そして注文を済ませると、三人は乾杯をした。

「乾杯」

グラスを交わすと、その場はやつと落ち着いたように、和やかな雰囲気となった。

「美味しい。ここ、お料理も美味しいんだよね」

ジュースを飲みながら、幸が言う。

「ああ。きつと水上君も、気に入ってくれると思うよ」

修吾の言葉に、和人が頷いて手話をする。

『お洒落なお店ですね』

「そうよね。結構人気の店なんだよ。美味しいのに値段も手頃だしね」

そう答えた幸に、和人は相変わらず、静かに笑みを浮かべて頷いている。

幸はふと思った。和人はいつも笑っている。心配そうな顔や困った顔なら見かけるが、思えば和人が心から笑った顔や、怒った顔が思い出せない。

「幸？」

修吾にそう呼ばれ、幸は我に返った。

「え？ あ、ごめん。なんかいろいろ思い出しちゃって……」

「心配事でもあるの？ ピアノのこととか」

「うん、まあいろいろ……本当ごめんね、なんでもないから」

そう言う幸に、和人も修吾も特に気に留めた様子はない。そんな一同の元に、続々と料理が運ばれてきた。

「わあ、美味しそう」

「ああ。さあ、じゃんじゃん食べて」

「いただきます」

一同は食事を始めた。

「水上君は、何のアルバイトしてるんだっけ？」

食事をしながら、修吾が場を盛り上げようと、和人に近況を尋ねた。和人は素直に答える。

『出版社で、校正の仕事をしています』

「え？」

初歩的な手話しか知らない修吾が聞き返すと、幸が口を開いた。

「出版社で校正の仕事をしてるって。親戚の伝手だったよね？」

そう言う幸も、母親から聞いただけの話であり、和人の近況は何も知らない。

「そう、出版社……水上君、大学も文学部だったものな。将来はそちのほうに進むの？ 作家とか」

『そうですね。作家になりたいという夢はありますが、どうなるか……一応、いくつか書くことはありますが、とりあえず卒業したら、今の出版社に勤めようと思っています。早いうちから誘ってもらっているし、とても勉強になるので』

和人がそう言った。それを幸が修吾に訳してやる。訳しながら、幸は和人もきちんと将来のことを考えていることに感心した。幸の中では、今でも和人の小さい頃の思い出が根強く残っている。改めて大人なのだと気づかされ、苦笑した。

『修吾さんは、バイオリニストになるんですよね？』

今度は逆に、和人が尋ねた。

「うん。今の大学を卒業したら、外国に渡って勉強を続けるつもりだよ」

『……じゃあ、さっちゃんも？』

修吾の言葉に、和人が幸に尋ねる。

「う、うん。まだハッキリとは決まってるじゃないけど……」

「卒業したら結婚して、二人で海外に行くつもりだよ。俺はバイオリニスト。幸はピアニストとしてね」

幸に続いて修吾が答えた。

卒業後のことは、まだ二人で話し合っている最中だった。それをハッキリと修吾が答えたことで、幸は少し驚いた表情を見せる。

「なに、その顔……もしかして、海外に行くの嫌？」

きょとんしている幸に、修吾が怪訝な顔をして口を開く。幸は首を振った。

「い、嫌じゃないよ。でも、そこまで二人で話したことなかったじゃない。あんまりハッキリ言うもんだから、びっくりしちゃって…」

「そっかそっか。そういえば忙しさにかまけて、あんまり話してなかったもんな。でも、俺はずっと前からそう決めてたけど？」

「あ、そう。いいわよ、私は修吾が決めたなら」

微笑み合う二人を見て、和人も微笑ましく思えた。

『おめでとう。先が楽しみだね』

照れ合う二人に向かって、和人がそう言った。幸と修吾はまた笑う。

「そういう和人も、恋人がいるんじゃないの？」

突然、幸がからかうように和人に言った。そんな幸に和人が首を傾げて尋ねる。

『……どうして？』

「正月に見たのよ。和人が実家近くの本屋さんで、女性と一緒にいるところ」

正月に和人を見たことを言うのは、これが初めてだ。からかうようにしながらも、幸はあの女性のことが知りたかった。和人の恋にも興味がある。

『ああ……』

和人は、思い当たる節を探して苦笑した。

『なんだ。いたなら声をかけてくれればいいのに……』

「二人が良い雰囲気だったから、かけそびれちゃったのよ」

『またまた……あの人は、職場で知り合った人だよ。イラストレーターをしてるんだ。いろいろお世話になってる』

和人がそう答えた。

「その人と、付き合ってるの？」

楽しそうに話す和人と幸に、やっと修吾がそう言って話に入ってきた。

『いや、まだそこまでは……』

「そこまではつてことは、脈ありなんだ？」

修吾の言葉に、和人は苦笑する。

『まあお互い、大事には思っていると思いますよ……』

少し照れながらそう言う和人を、幸は眺めるように聞いていた。

正月に見かけた二人は、明らかに恋人同士に見えた。幸の知らない和人が、そこにいた。

『ご馳走様でした。今日はありがとうございました』

しばらくして食事を終えた三人は、店の外へと出ていった。そこで和人が、修吾にそう礼を言った。

「いやいや、お礼を言うのはこっちだよ。わざわざ来てもらったんだしね」

修吾の言葉に首を振って、和人はもう一度礼を言った。

『ありがとうございます』

「いいって。じゃあ俺たち車だから……また一緒に食事しような」

『ええ、ぜひ』

話している和人と修吾を見て、幸は見守るような笑顔でいた。恋人と幼馴染み……どちらも大切な存在が互いに笑い合える光景は、幸にとっては嬉しいことだ。

「よし、じゃあ幸。行こうか」

「うん。和人、また連絡するね。おばさん、お大事にね」

幸がそう言うのと、和人は大きく頷いた。

『ありがとう。気を付けてね。おやすみなさい』

「うん。和人も遠いんだから、気を付けて帰ってね。今日はありがとう。おやすみなさい」

車に乗り込むため、夜の街へと消えていく幸と修吾を、和人は静かに見つめていた。見ているだけで胸が熱くなるほど、幸と修吾は似合いのカップルだった。微笑ましいと思いつつも、和人の中で幼馴染みが離れていく悲しさは、いつの頃から芽生えたまま、ずっと心に圧しかかっているようである。

和人は小さく笑って溜息をつく、駅のほうへと歩き出した。すると、ふと何か気に止まって、幸のほうを振り返った。しかし、すでに二人の姿は見えなくなっている。急に和人は寒気に身を震わせた。妙な悪寒に首を傾げながらも、和人は駅へと向かっていくのだった。

「窓、開けていい?」

運転をしながら、修吾がそう尋ねた。幸が頷くと、修吾は運転席の窓を開ける。

「ああ、風が気持ちいいな」

「修吾……顔、赤くない?」

「本当? ちょっとしか飲んでないんだけど……」

修吾のその言葉に、幸は目を丸くした。

「ちよ、ちよっと、修吾! 運転するのに、お酒飲んだの?」

「二、三杯だけだよ。ほら、トイレに立った時、カウンターにあったワインが美味しそうだったから、ちよっとテイスティングをね……幸にも見えてたから、気づいてるんだと思ってたけど……」

苦笑してそう言った修吾に、幸は苛立った。

「知らないわよ。しばらくトイレから帰ってこないと思ったら、そんなことしてたの? 修吾、車止めて。酔い覚ましたほうがいいよ……」

……」

いつになく怒った口調で幸が言う。そんな幸に、修吾は変わらず苦笑している。

「大丈夫だよ。そんな長い距離じゃないんだから」

「もう!」

その時、二人の視界が突然阻まれ真っ暗になり、車のブレーキ音が辺りに響き渡った――。

11、事故

和人は電車からの流れる街並みを見つめていた。ふと、また悪寒が背中を走る。風邪かもしれないと、和人は身を震わせた。

長い家路はいつも気が重い。街を過ぎた景色は、もはや真つ暗だ。耳が聞こえない和人にとって視覚まで闇となれば、一人きりの時間の中では、本当に自分は孤独なのだと思い知らされる。

その時、和人のポケットが震えた。見ると、携帯電話に新着メールがある。様子からである。

「お友達との飲み会は終わった？ 帰ったらすぐにパソコンのメールを開いてください。ビックニュースがあるから！」

メールの内容はこうだった。和人は軽く顔を掻きながら、天井を見上げた。“ビックニュース”の見当もつかない。混雑した電車の中を、和人は立ちっ放しで家路を急いだ。

和人が改札を出ると、目の前に止まったタクシーから見覚えのある人物が走ってきた。幸の両親である。ただならぬ雰囲気、和人は思わず二人を止めた。

「あ、ああ、カズちゃん。さ、幸が……」

涙を流しながら、幸の母親が言った。和人は「幸」という言葉に目を丸くした。

「さっちゃん、どうしたの！」

和人が尋ねる。さっきまで一緒にいた幸に、何かあったのか、気が気でない。逸る気持ちを、幸の母親にぶつける。

「和人君、急いでるんだ。なんなら君も来るかい？」

冷静さを装いながらも、蒼褪め、苛立ちに似た複雑な表情をして、幸の父親が言う。和人は居ても立ってもいられず、二つ返事で頷いた。

和人はそのまま、幸の両親とともに駅へと逆戻りした。

『何があつたの……？』

夜の上り電車でガラガラの車内に乗り込んだ和人は、ボックス席の目の前に座る幸の両親に問いかけた。未だ事情を知らない和人の顔は、胸が張り裂けそうになるほどの切なげな表情をしている。

「病院から、連絡が入って……事故に遭って、重体だって……」

ぽつりぽつりと、目の前に座る幸の母親が言う。和人は信じられないといった表情で目を丸くした。

『そんな！ さっきまで、一緒にいたのに……』

一同は、それぞれに押し黙った。

病院に着くと、和人と幸の両親は、走って手術室へと向かった。すると手術室の前には、腕と頭に包帯を巻いた、修吾とその母親がいた。

「修吾さん！」

幸の母親が、すがりつくように修吾のシャツを掴む。

「申し訳ありません！」

それと同時に、修吾は深々と頭を下げた。修吾は頭を下げたまま震えている。

「申し訳ありません。この子も動転していて、まだ何がなんだか……」

修吾の身体を抱いて、修吾の母親も頭を下げた。

「何が……あつたんですか？」

幸の父親が尋ねる。それに答えたのは修吾ではなく、修吾の母親だった。

「修吾が幸さんを車で送る途中、交差点で接触したようなんです……相手は大型のトラックで、気づいた時には突っ込まれていたと。それが……ちょうどぶつかったのが助手席側で……うちの子は腕の骨を折り、頭を打って脳震盪を起こしていました。でも、幸さんのほうは……」

そう言う修吾の母親の口元を、和人は注意深く見つめていた。完全に理解は出来ないものの、大体はわかった。

一同は落胆し、それ以上、誰も何も話そうとはしなかった。ただ長椅子に座って、幸の無事だけを祈っている。そばにいる修吾は表情を失くし、未だ動転しているようである。

和人も長椅子の端に座り、目を閉じた。「助かってほしい」、ただそれだけだった。

しばらくして、手術室のドアが開き、一同は一斉に立ち上がった。和人の目には、医師に駆け寄る幸の両親、やがて泣き崩れる幸の母親が映っていた。幸はどうなったのか、食い入るようにその光景を見つめている。

すると手術室から、横たわった幸が運ばれてきた。一同の目に、ほぼ全身を包帯でぐるぐる巻きにされた幸が映る。頭から顔、肩や腕まで包帯を巻かれているが、唯一剥き出しの口元だけが、幸ということを証明している。

生きている――。全身で息するように呼吸をしている幸に、和人はそう認識した。

一同はそのまま幸の後について、病室へと向かっていった。その途中、和人は思いきって修吾の背中を叩いた。修吾は肩を震わせ、和人を睨むように見つめる。

『説明してくれませんか？ さっちゃんは……』

静かに、和人がそう尋ねた。誰に聞ける状況でもなかったが、一刻も早く症状が知りたかった。しかし、和人がそう言ったところで、修吾は現実から逃げ出すように、その場を走り去ってしまった。

その時、和人の携帯電話が震えた。病院だというのに電源を切り忘れていたことを思い出し、慌てて切る。和人は幸の病室を確認すると、誰もいない夜の廊下で携帯電話を開いた。またも祥子からである。

<まだ帰ってない？ 早く帰って。私のほうが待ち切れないよ>

そんな内容だが、和人は祥子の弾んだ雰囲気とは正反対に、肩を落としてボタンを押した。返信する気力もなかったが、祥子を心配させたくもなかった。また実家にも連絡をしていないことに気づき、双方にメールを送る。

<連絡が遅くなってごめんなさい。幼馴染みが事故に遭って重体です……今日は帰れないかもしれませんが……>

和人が祥子にそんなメールを送ると、すぐに返信でどこにいるかと尋ねられた。思えばこの病院は、祥子の家から歩ける距離だ。和人は幸の容態を知るためにも、祥子の力が必要だと思い、祥子を病院に呼ぶことにした。

十数分後――。

ドアが開けっ放しにしてある個室の病室から、廊下に少しはみ出す形で、和人が立っている。未だ忙しく、幸に治療を施す医師とともに、ただ呆然としている幸の両親がいる。修吾とその母親は、すでに先に帰っていた。

廊下から見える和人を見つけて、祥子が駆け寄る。

「和人……」

『ごめん。遅くに呼び出して……』

「うっん。いいの……」

祥子はそう言うと、病室を覗いた。

さつきから同じ光景の室内では、特に目立った動きもない。幸の両親は、もはや和人がそばにいるということも、祥子が来たことさえも気づかないようだ。

『出よう……』

和人は祥子の肩を抱くと、廊下へと出て行った。すっかり肩を落として空ろな表情の和人の手を、そっと祥子が握る。そんな祥子を、和人は見つめた。祥子は心配そうに和人を見つめている。

「……大丈夫？」

祥子が尋ねた。野暮とは思ったが、今まで見たこともない和人の

暗い顔に、そう聞かずにはいられない。

『うん。ただ、まだ症状がよくわからないんだ……ご両親にも正式に話はされていなくて、まだ落ち着かないみたいだ……』

静かに和人の手がそう話す。和人の脳裏には、包帯で顔さえ確認出来ない幸の姿が焼きついていて。さっきまで幸と話していたこともあり、シヨックは相当なものだった。

「和人……」

そう言って、祥子が和人の腕に手をかけた時、幸の病室から医師と幸の両親が出てくるのが見え、和人は駆け寄った。

「カズちゃん……」

今日出会ってからずっと泣きつ放しの幸の母が、すぐるように和人の腕を掴む。

『……さっちゃんは？』

ようやく、和人がそう尋ねた。幸の症状は、和人にはまだわからない。

「これからお話があるのよ……」

やっとのことで幸の母親が言った。薄暗い廊下の明かりだったため、和人は探るように目を凝らして、幸の母親の口元に集中した。

そんな和人の横に、そばにいた祥子が出てきた。幸の母親は祥子を見つめる。

『彼女は僕の友人です』

和人が、すかさず祥子を紹介した。祥子は静かにお辞儀をする。

「森下祥子といます。彼と同じ職場関係で、家が近くなものでしたから……彼への通訳は、私がします」

控えめながらも力強い口調で、祥子が言った。幸の母親は静かに微笑んで頷いた。

「それはそれは……これから家族だけに話があるの。申し訳ないけど、カズちゃんには後で伝えるから、今は話を聞いてくるわ。今日は目を覚まさないみたいだし、カズちゃんは……」

幸の母親の言葉を、祥子が手話で和人に訳す。和人は同時に二人

を見つめながら、頷いていた。

『おばさん。僕は待つてるよ』

切実な目で和人が訴える。幸の安否がわからない以上、ここで帰る気にもなれなかった。幸の両親も祥子もそれを察し、それ以上は何も言わない。

幸の両親は和人と祥子に会釈をすると、医師とともに別室へと向かっていった。それに続いて、和人と祥子も歩き出す。ふと横切る幸の病室のドアは閉められ、面会謝絶の札が下げられていた。

幸の病室から少し行ったところにナースステーションがあり、幸の両親はその隣にある別室へと通された。そこから先は、親族でない和人たちは入れない。和人はナースステーションのすぐそばの長椅子に座った。それに続いて、祥子も腰を下ろす。

祥子の目に映る和人の横顔は、思い詰めた表情で蒼褪めている。

「あの……」

するとそこに、ナースステーションから出てきた女性看護師が、声をかけてきた。和人はハッと顔を上げる。

「よかつたら、そこにお湯がありますので、お茶などご自由にどうぞ……身体を冷やすとよくないですよ」

看護師が、丁寧な手話でそう言った。

『ありがとうございます……手話が出来るんですね？』
「やつといつもの笑みに戻って、和人が言う。」

「ええ、少しですが……学生時代に、少しやっていたんですよ」

その言葉に、和人は静かに微笑んで頷いた。しかし、その目は空るなままだ。和人は少し考えた後、看護師に問いかけた。

『……中では、どんなことが話されているのですか？』

「ああ、医師がご両親に……」

わからない手話を思い出すように、目の前の看護師が手をまごつかせる。和人は祥子を見た。

「あの、私が訳します。私もまだ、完璧に手話が出来るわけじゃな

いんですが……」

祥子の言葉に、看護師は頷いた。
「ありがとうございます。ええと……医師がご両親に、患者さんの現状と今後の医療方針をお話しているところです」

看護師がそう言い、横にいる祥子は手話で和人に訳す。和人はそれを理解し頷くと、もう一度看護師を見た。

『彼女は、どんな様子ですか？ わかっていることだけでいいので教えてください』

和人が尋ねる。看護師は少し困った様子だ。

『……手術室から出てきた時、少し説明があつたようですが、僕には理解出来ませんでした』

和人はそう続けた。看護師は、和人がここへずいぶん前に駆けつけていながらも、未だに何も知らされていないのだということを理解し、和人を見つめ、口を開く。

「大丈夫です……意識が戻るまでは油断出来ませんが、命に別状はありません」

看護師の一言目に、和人は初めて安堵の笑みを見せた。

「でも外傷が酷くて、目立つ傷跡がいくつか残ると思います……」
『……外傷？』

同席していた修吾は、軽い怪我で済んでいたように見えた。なぜ幸だけが重症なのか、和人にはわからなかった。

看護師も和人の疑問を察して、眉を顰める。

「ぶつかったのは助手席側だったので、原田さんのほうが衝撃が強かったみたいですね……運転席のほうは窓も開いてたそうで、それほど外傷はなかったって聞きました……多分、これから医師とご家族で話し合つて、治療方針も決まりましたら、いろいろわかると思うので……」

それを聞いて、和人は頷いた。

『ありがとうございます』

「いいえ。では……」

看護師が去っていくと、和人は小さく溜息をついた。隣に祥子がいるということも忘れ、ただ幸の安否だけを気遣っていた。

しばらくすると、和人の目の前のドアが開き、中から幸の両親が出てきた。幸の母親は、未だ止まることを知らない涙を流している。和人と祥子は静かに立ち上がった。和人はすぐにでも幸のことが知りたかったが、あまりにも泣きじゃくっている幸の母親を見て、問いたたすことなど出来ずにいる。

そんな時、一人しっかりしようとしている幸の父親が、母親の肩を抱いて和人を見つめた。

「遅くまで付き合わせてすまないね……」

幸の父親が言った。和人は大きく首を振る。

「談話室に行こう。君にも話しておくよ」

和人が何かを発する前に、幸の父親がそう言っただけで背を向けた。和人は少し緊張しながら、その後をついていく。

一同は、そこからすぐそばにある談話室へと向かっていった。消灯時間は過ぎているので、その部屋には誰もいない。

「ねえ、ハッキリ言っただの？」

ナースステーションでは、和人に声をかけた看護師に、数人の看護師たちがそう尋ねた。

「まさか。言えないわよ……」

一人の看護師が、俯いて言う。

「そうよね。あの患者さん、もう目が見えないだなんて……」

その場にいる看護師たちが、一斉に暗い顔になった。

「幼馴染みなんですってね、あの男の子と患者さん……あの男の子、耳が不自由なんでしょう？ 可哀想ね。目が見えないんじゃ、手話で会話することも出来ないじゃない……」

看護師たちの溜息は、病院中に響き渡るかと思うほど、長く切なくこたえました。

12、悲劇

『もう一度……もう一度、ちゃんと訳して！』

談話室では、和人と祥子、そして幸の両親が向かい合わせになっている。重苦しい空気の中、和人が立ち上がりながら、大きく手を振ってそう言った。

しかし、通訳を買って出た祥子は、幸の父親の言葉に固まった。

「……ハッキリ言おう。幸の目は、もう見えないんだよ……」

父親の言葉に、幸の母親が大きな声を上げて泣き崩れた。そんな母親を、父親が抱き止める。

『……目が見えない？』

あまりに残酷な宣告に、訳すことが出来ない祥子に向かって、和人が聞き返した。そんな和人に祥子が頷く。和人はショックを露わにししながら、静かに椅子に座り直した。

祥子は幸とはまだ会ったことはないが、幸は少なからず幼馴染みの話として、和人と会話に何度も登場した人物だ。幸が和人の理解者だともわかつている。そんな幸の目が見えないとなれば、今後どうして和人と話すことが出来るのだろう。祥子の目からも、思わず涙が零れた。

「目だけじゃない……ガラスの破片で、至るところを深く切っているから、ずいぶん痕が残ってしまうそうだ。でも今は美容整形技術も発達しているし、治せないことはないそうだよ。目も……手術をすれば、少しばかりは治る見込みもあるそうだ……まあ、また幸の身体を切り刻まなければならぬが……」

幸の父親がそう言った。祥子は涙を堪え、必死に通訳をする。

手術をすれば治る見込みがあると言った父親の言葉は、和人とって最後の支えとなるような、かすかな希望の光に見えた。だが和人のショックは隠し切れない。

一同はそのまま時が止まったかのように何もしゃべらず、少しも

動けずにいた。ただ幸の母親のすすり泣く声だけが、部屋に響き渡る。

「まあ、生きていてくれただけで……」

沈黙を破って父親がそう言いかけた時、父親の目から涙が溢れた。父親にとつても、もう限界だったのだろう。

「……おじさん、おばさん、元気出してください。少し休んだほうがいいよ。僕も、今日はもう帰ります……」

和人が手話で静かに語りかける。そんな和人の言葉を、祥子が訳して言う。

「カズちゃん。ありがとうね……」

幸の母親が、和人の手を取ってそう言った。和人は首を振ると、母親の肩を抱いた。

「おばさん、無理しないでね……僕はさっちゃんが生きていてくれただけで、今はホッとしてるよ……」

和人の言葉に救われるように、幸の母親が初めてホッとした顔を見せた。表情は暗いままだが、何度も頷く。

「そうね、本当にそう……幸が生きていてくれただけで……」

そう言うものの、幸の母親は未だ現実を受け止められずに涙を流す。そんな母親を抱き止めながら、幸の父親は和人と祥子にお辞儀をし、もう行くように促した。

和人と祥子もそれに応じてお辞儀をすると、談話室を出ていった。

長い病院の廊下を、無言のまま和人と祥子が歩いている。和人は表情を失くしたまま、未だ青褪めた顔色をしていた。

「……和人」

そんな和人に、静かに祥子が話しかけた。

「もう終電ないでしょ。うちにおいでよ」

祥子が言った。すでに、和人が家に帰る電車はない。

「でも……」

和人が少し渋る。一人暮らしの祥子の部屋に、和人が上がったこ

とは一度もない。二人の心が通じ合っていることは互いにわかっているものの、ハッキリとした関係ではないので、女性の部屋に泊まるというのは気が引けた。

「遠慮しなくていいわよ。狭いけど、別々に寝られるスペースも一応あるし、なんならしばらくうちから学校や病院へ通えばいいじゃない。和人のお母さんのこともあるけど、こっちも落ち着くまでは心配でしょう？」

祥子の言葉に、和人は優しく微笑んだ。祥子は自分のことをよくわかってくれている、気遣ってくれている。目の前の祥子が頼もしく思え、いつもより愛おしく感じた。

『じゃあ悪いけど、今日はお世話になるよ……』

そんな和人に、祥子は微笑んで頷いた。

初めて上がる祥子の部屋は、1DKのマンションだった。綺麗好きの祥子だけあり、部屋は綺麗に片付いている。それでも、テーブルの上だけは雑誌や原稿が雑然としており、祥子は恥ずかしそうにそれを素早く片付けていた。

「テーブルだけは出しっ放しで……そこら辺、適当に座って。今、コーヒー入れるね」

そう言って、祥子はキッチンへと向かっていく。

和人は少し興味深げに、初めて入った祥子の部屋を見回し、ソファに座った。一人暮らしの女性の家へ入ったのは、前に一度、幸の部屋に入ったきりである。そう考えると、和人は少し緊張もした。しかし幸のことが頭から離れず、途端に暗い表情になる。

そんな時、和人の顔を覗き込むように、祥子が入れ立てのコーヒーを差し出した。

「はい」

『ありがとう……』

和人は無理に微笑んでそう言うと、コーヒーに口をつける。祥子も和人の隣に座り、コーヒーを飲んだ。二人掛けのラブソファには、

密着するほどのスペースしかない。こんなムードのあるシチュエーションも、今の和人は何も気づかない。ただ脳裏に幸の痛々しい姿だけが浮かび、手術をしなければ目が見えないという事実が、和人の心を深く突き刺す。一体この先、どうして幸と話せばいいのか。しかし和人は、あまりに突然に起きた衝撃に、事実を受け入れられずにいた。

「……和人」

思い詰めた表情で固まる和人に、祥子が語りかける。和人はハッと瞬きをすると、隣に座る祥子を見つめた。

『ごめん、何？』

いつもの優しい表情に戻って、和人が人差し指を振る。

「これ……」

言葉少なめに祥子が差し出したのは、明日発売の文芸雑誌だった。この雑誌は、和人が毎月講読している本で、今月号は待ちわびていた雑誌である。

「ここ、見て」

祥子が、付箋をしていたページを開いて見せる。祥子の指が指す場所には、和人の名前が見えた。和人は目を細めて、素早く記事に目をやる。

“ 文芸賞、佳作……題名、静寂の音。作者、水上和人…… ”

実は和人は、数ヶ月前にこの文芸雑誌で、季節毎に募集される文芸賞に応募していた。大学の文学部学生である和人は、小さい頃から文章を書くのが好きで、将来も小説家などの道に進みたいと思っていた。学校の先生や祥子の勧めもあり、一度作品を送ってみることにしたのだが、まさかいきなり入賞するとは思ってもみなかった。雑誌で発表され、受賞者本人にも前もって知らされないこの雑誌の賞は、特異な形式ながらも知名度は高く、学生でまだ無名の和人の大きな飛躍になることは必至であり、新たな一歩になることは確

実だ。

和人は雑誌を食い入るように見つめると、嬉しさに顔を綻ばせた。

『これ、本当？』

「もちろん、本当よ。おめでとう！」

思わず祥子が、和人の手を取って言う。和人よりも喜んでいる様子だ。

『この雑誌、どうしたの？ 明日発売でしょう？』

そんな祥子に、嬉しそうに和人が尋ねた。

「さつき打ち合わせで、ここの出版社に行ったのよ。そしたらそれがたくさん積み上げられて、無理言って一冊譲ってもらったの。見たら和人の名前があるじゃない！ もう私、居ても立ってもいられなくて……」

『ありがとう、嘘みたいだ。信じられない……』

和人はさつきとは違う信じ難さで、笑みを浮かべている。

「馬鹿ね。これがあなたの実力よ。和人はこれからじゃない」

『……ありがとう』

少し照れながらそう言う和人を、祥子は熱い目で見つめている。

和人は静かに、祥子を抱きしめた。素直に嬉しい一歩前進だが、こんな時にもふと思いつく、幸のこと。誰かに触れていたい。人肌が恋しくて、和人は祥子をきつく抱きしめる。そんな和人の思いを諭すように、祥子は和人の唇にキスを重ねた。

「和人……あなたが好きよ」

祥子が言った。思えばお互い、そんなことを言ったことがない。

しかし和人は驚くことなく、祥子に静かに微笑みかける。

『僕も好きだよ』

初めてきちんと確かめ合った一言だった。二人はもう一度抱きしめ合った。和人は祥子を抱きしめながら、静かに目を閉じる。胸の高鳴りを覚えていたが、フラッシュバックするように、幸の変わり果てた姿が浮かんだ。

13、宣告

和人はゆつくりと目を開けると、未だ熱い視線を送る祥子から、軽く目を逸らした。

『ごめん……今日はいろいろあつて、まだ気が動転しているみたいだ……』

正直に和人が言った。その言葉に、祥子は静かに俯いて頷く。

「そうだよ……まだ少し、顔色が悪いみたいだし。今日はもう休もうか。家にはちゃんと連絡したの？」

突然いつもの様子に戻って、母親のようにテキパキと祥子が言う。そんな祥子の問いかけに、和人はただ頷いた。

「そう。じゃあ、すぐ布団敷くから……」

『僕もやるよ……』

二人はダイニングスペースに、客用の布団を敷いた。奥の部屋は祥子の寝室兼書斎になっているようだが、奥手な和人を前に、同じ部屋で寝る関係ではまだない。

「じゃあ、私も寝るね。明日は学校？」

『うん。授業はないけど、顔を出してくる。雑誌への応募を勧めてくれた先生にも、報告しておきたいから。あとは、また病院に様子を見に行ってくるよ……』

祥子の問いかけに、和人が返す。祥子は微笑んで頷いた。

「そう。じゃあとりあえず、明日のことは明日考えるとして、今日はもう寝ましようか」

『そうだね……』

「じゃあ、おやすみ。部屋の物は勝手に使つて。寒かったら布団もまだあるし、遠慮なく起こしてね。あと、シャワーも勝手に使つて。冷蔵庫の物も勝手に食べていいから」

そんな祥子に、今度は和人が笑った。まるで世話焼きのおばさんである。

『わかった。ありがとう』

「うん。じゃあ、おやすみ」

祥子はそう言っと、奥の部屋へと入っていった。

『おやすみなさい……』

和人はそう呟くと、布団に入った。祥子の気遣いが心地良い。だが一人になれば、やはり消えない幸の姿。和人は一気に起こった信じ難い現実、眠れぬ時を過ごした。

次の日の朝。いつの間に眠っていた和人を、静かに祥子が揺り起こした。

「おはよう」

手話と声で、祥子が言う。起きたての和人には、祥子のその笑顔がなにより幸せに感じられた。

『おはよう……』

「寝かせてあげたいけど、出かけるんでしょ？ 軽くだけど、朝ごはん作ったの」

そう言って祥子はテーブルを指差す。和人は起き上がると、すぐにテーブルの前に座った。

『美味しそうだね』

「ありがとう。起きたばかりだけど、もう食べられる？」

『うん。いただきます』

和人は祥子の作った朝ごはんを手をつける。

朝食を食べ終わった二人は、二人同時に出かける支度を始めた。

二人一緒に歯を磨き、顔を洗う。なんだかそんな状態が、くすぐったいが心地良い。二人は互いに安らぎを感じていた。

『じゃあ、行くね』

支度を終えた和人がそう声をかけた。祥子はバックに書類等を詰めている。

「うん、先に行って。私、まだ時間あるから」

『待っていようか？』

「うっん、いいよ。和人のほうが遅くなっちゃう。行ってらっしゃい」

祥子の言葉に、和人は頷いた。

『じゃあ……昨日はありがとう』

「私は全然構わないわよ。あ、ちよつと待って」

玄関まで和人を送り出そうとした祥子は、思い出したように部屋の中へと駆けていった。そしてすぐに戻ってくると、和人に鍵を渡した。和人は意味がわからずに、表情で疑問符を投げかける。

「この鍵よ。いつでも好きな時に使って」

その言葉に和人は驚き、俯いた。

『でも……』

和人は少し目を泳がせている。初めての出来事に、どうしたらいいのかわからないようだ。

「あんまり深く考えないで。でも、私たちは想いが通じ合ってるって思ってるし……それにこれから、幸さんのことで病院に行く機会も増えるでしょう？ 学校に通ってたなら、ただでさえ遅くなるんだもの。しばらくここへ泊まっていけばいいわよ」

『……ありがとう』

それ以上、和人は何も言わなかった。ただ、祥子の優しさを噛み締めているように見えた。祥子も笑って首を振る。

「いいんだってば。私たち、気兼ねしない仲になろうよ。さあ早く行って。今日はどうする？」

『……学校に行って、病院に行って、一度家へ帰るよ。急に外泊したし、さっちゃんのこともあるから心配しているだろうから』

「そうね、今日は戻ったほうがいいよね。わかったわ。じゃあ、またメールちょうだいね」

和人は頷くと、そのまま祥子の家を去っていった。和人は初めて手に入れた恋人の家の鍵に、なんだか悪いことをしているような、同時に嬉しくてたまらない気持ちになりながら、学校へと向かっていった。

学校へ向かった和人は、慕っている教師の元へ受賞の報告をしに行った。そして軽く挨拶回りを済ませると、その足で幸の入院している病院へと向かっていく。すぐにでも会いたいという気持ちと、変わり果てた姿の幸を見たくないという気持ちが入り混じり、和人の足は鉛のように重い。しかし和人は、真っ直ぐに病院へと向かっていった。

和人が幸の病室に向かうと、未だ面会謝絶の札が下げられていた。和人は不安になりながら、何度も部屋の横に付けられた患者の名前を確認した。しかし何度見ても、幸の名前である。

そこに通りかかった女性看護師を呼び止めると、和人は持ち歩いているメモ帳にすらすると文字を書いて見せ、返事をくれと言わんばかりに、メモ帳とペンを差し出す。

『この患者さんの具合はどうですか？ まだ面会出来ないのですか？』

和人のメッセージを見て、看護師は少し悲しそうな顔を見せ、メモ帳を受け取って返事を書いた。

「意識は戻りましたが、興奮状態でしたので、今は薬で眠っています。しばらくはそういう状態が続くと思われるので、ご家族以外の方は会えません。ご家族の方は今、医師と話しています」

看護師の文字を見て和人は頷くと、頭を下げて礼を言った。去っていく看護師を尻目に、和人は目の前にあつた長椅子に座り、幸の病室のドアを見つめていた。

「カズちゃん」

しばらくして、目の前に立った人物に、和人は顔を上げた。そこには幸の母親が立っている。また泣いていたようで、目は腫れぼたない。

『おばさん……大丈夫？』

「ありがとう。大丈夫よ……」

和人の問いかけにそう答える幸の母親は、すぐにでもまた泣き出しそうだ。しかし昨日とは違い、もう大分落ち着いたように見える。頷きながら、和人は幸の病室を指差した。

『さっちゃんは……どうですか？』

あまり手話のわからない幸の母親に、和人は最小限の手話で語りかける。幸の母親も慣れたもので、唇を読んでくれる和人に、ゆっくりと口を開く。

「さっき意識が戻ったんだけど……痛みも恐怖もまだあるし、目が見えなくなっただけを知って、ずいぶん泣き叫んでね。今は鎮静剤を打ってもらったから、落ち着いて眠ってるけど……」

幸の母親は、痛々しい娘の姿に、今や放心状態でいるように見えた。

『そう……おじさんは？』

「今日は仕事に行っただけで、早目に切り上げてくるわ」

『そう……』

「カズちゃん……心配して来てくれるのはありがたいけれど、しばらくは来ても会えないと思うわ。意識も戻ったし、もう命に別状はないみたいだから、しばらくは来ないほうがいいわ……幸も、今はあなたと会話することも出来ないでしょう？ どちらも辛いと思うし……」

その言葉に、和人は心が重くなりながらも、頷くほかなかった。

確かに、耳の聞こえない和人にとって、普段のコミュニケーションは手話が筆談が主だ。けれど、相手が目の見えない人物ならば、手話も筆談もすることが出来ない。相手にとっても、無理に和人がしゃべろうとしない限り、会話すら交わすことが出来ないのだ。

そのため、互いに悲しむのは目に見えている。ましてや未だ現実を受け入れられない幸にとって、和人の存在は今では考えられないものだと思った。

『そうだね……僕がいたら、さっちゃんももっと辛くなるかもしれないね……』

「カズちゃん。ごめんね……」

和人は首を振った。

『それじゃあ、さっちゃんが少し落ち着いた頃に、また伺います…』

…おばさん、気を確かに。頑張つて……」

そう言つと、和人は静かに病院を後にし、そのまま実家へと戻つていった。実家にいた和人の母親も、幸のことを知って深く心配し、涙を流していた。

また、すでに受賞した作品と受賞賞金も家に届いていた。母親もとても喜んでくれたが、幸のことを思い出すと、二人とも気が落ち込むばかりであった。

14、離別

数週間後。幸がどうなったのか、頼りは流れてくる噂だけだった。和人は躊躇いつつも、幸のことが気かりでならず、様子を見に幸が入院する病院へと向かっていった。

「帰って！」

和人が病棟を歩いていると、そんな大きな声が響いている。和人には聞こえないものの、その声に驚いた人たちが、廊下からその声がかかる病室のほうを見つめているのが見える。それと同時に、数人の看護師が慌てて病室へと入っていった。その病室は幸の病室だと思ひ、和人は小走りに病室を覗き込んだ。

一人部屋の病室では、数人の看護師がベッドの上の患者を押さえつけているようだった。だが、仕切りのカーテンが邪魔で幸の姿は見えない。看護師はカーテンの向こうで何かの処置をしているようで、それからすぐに病室を出て行った。

そんな中で、窓際には幸の母親が泣いており、ドアの近くには修吾の姿がある。

「カズちゃん……」

和人の姿を見つけ、幸の母親がそう言った。

「和人……？」

中から幸の声が聞こえる。だが、和人にそれは聞こえない。和人には、この病室にいる顔触れで、幸の病室に間違いないとわかっただけだった。

「失礼します。お大事に……」

すると、そう言って修吾が和人に向かってきた。だが何も言わず、和人の横をすり抜ける。

状況が飲み込めず、少し呆気にとられた和人は、静かに病室へと入っていった。幸の母親は、とても悲しそうな顔をして涙を流している。そしてそこで初めて和人は、ベッドの上の幸を目にすること

が出来た。

未だ顔や頭を包帯で巻かれ、痛々しい姿ではあるが、意識はあるようで口の辺りが息づいている。だが身体を震わせ、口を結んだりし、唯一動かせる右手で顔を押さえている。泣いているのだ。

和人は幸の母親を見た。だが首を振るだけで、何があつたのかは教えてくれない。和人はもう一度幸を見つめると、勢いよく病室を飛び出した。

和人がそのまま病院を飛び出すと、病院の駐車場に向かう修吾の姿が見えた。とぼとぼと歩く修吾に、和人が追いついて肩を叩く。

「水上君……」

「彼女に、何をしたんですか！」

いつになく険しい表情で、和人が言う。手話をするその手さえ、興奮して荒々しい。

「……婚約を、解消させてもらつたんだ……」

やがて言つた修吾の言葉に、和人が信じられないといった様子で、修吾の顔を覗き込む。

『さっちゃん……結婚しないということですか？』

修吾は静かに頷いた。

「無責任だけど……幸のことは可哀想だと思うし、助けたい。けど、どうしようもないじゃないか……もう前とは違う。身体のこと、将来のこと……俺には幸の人生は背負えない。親も反対しているし、こう言つてはなんだけど、結婚する前でよかったと思つて……」

ぼそぼそと修吾がそう話した。和人は修吾の口元をじつと見つめながら、身体を強ばらせ、怒りに震えている。こんな震えがきたのは生まれて初めてだった。

和人は修吾を睨みつけ、突然殴りかかった。

修吾の言葉が、百パーセント和人に伝わったわけではない。だが和人には、修吾が幸との婚約を一方的に解消して逃げ出し、幸を傷

付けたことだけはわかった。

『どうして！ どうしてそんなことを……どうして！』

修吾に詰め寄り、手話で怒鳴るようにそう言う和人の目からは、今にも涙が溢れ出しそうだった。「どうして」と、何度も何度も問い質す。

『彼女の気持ちはどうなるんだ。 どうしてそんなことが出来る！ あなたの恋人だろう！』

早口で手話を続ける和人に、修吾はもう手話についていけなかった。ただ、自分を責めていることだけはわかる。

和人は修吾の襟元を掴み、顔で訴えかけながら、その手を離そうとしない。

「離してくれ！」

そう言つて、修吾は和人を力一杯振り払った。

駐車をぐるりと囲む木製のガードレールに、和人はもたれるように倒れかかった。顔を打って、擦り切れた頬から血が滲む。だがそんなことをもるともせず、和人はもう一度修吾に掴みかかり、もう一度、修吾を殴った。

今度は修吾が地面に倒れ、和人は修吾に馬乗りになって掴みかかる。

「俺だって、酷いとわかってる！」

そんな和人に、修吾が叫んだ。

「だけど……もう無理なんだ……」

地面に横たわりながら、修吾が涙を流してそう言った。

何もかも変わり果てた姿の幸を、修吾はもう正視することすら出来なかった。自分の責任に向き合う勇氣もなく、親からも幸との関わりを反対されている。そんな中で、修吾自身も重圧に押し潰されていた。

『……お願いします。彼女を……さっちゃんを、どうか苦しめないでください』

俯き加減にそう言った和人の目から、一筋の涙が零れ落ちる。

やがて近くで見ていた人たちから、二人は引き離された。修吾は衣服についた砂を払い落とすと、未だ真つ直ぐで悲しげな目で見る和人を、静かに見つめた。

「ごめんな。もう、幸のことを前のようには見れないんだ……でも出来る限りのことはするつもりだから……」

修吾はそう言うと、車に乗り込んで去っていった。残された和人は、しばらくその場に立ちつくしていた。

病棟へ戻った和人は、幸の病室を訪れた。もはや幸も落ち着いたようで、廊下から覗く限り、部屋に看護師の姿はない。

「カズちゃん……？」

気配に気づいて、ベッドを囲むカーテンの向こうから、幸の母親が顔を覗かせた。和人はぺこりとお辞儀をする。

「カズちゃん、その傷どうしたの？」

さつき修吾とやり合った時に出来た、和人の頬の擦り傷は、すでにみみず腫れとなって血を吹き出していた。

「なんでもないよ……」

悲しく微笑みながら、和人が答える。

「和人がいるの……？」

ベッドからそんな声が聞こえ、幸の母親が和人から視線を逸らす。

「うん……いるわよ」

「近くへ呼んで……」

幸の言葉に、母親は和人を手招きした。和人は静かに中へ入り、ベッドを見つめる。幸は少しベッドを起こし、俯いている。

「ごめんね。もう、和人と話することが出来ないの……」

唯一動く右手だけで、幸は手話でそう言った。和人は目を丸くして、素早く幸の右手を取った。そして幸の手を取ったまま、自分の顔に持っていく。幸には、和人が首を振って否定しているのがわかった。

『でも……私は手話が見えないし、和人はしゃべれない……』

手を離してそう言う幸に、和人は尚も首を振る。だが実際に、そのジェスチャーすらも通訳が必要だ。和人はどうしたらいいのかわからなくなってしまう、もう一度幸の手を取った。これほど自分の障害を呪ったことはなかった。

和人が何をしているのか、何を言いたいのかわからない幸は、もう一度右手を上げて話を続ける。

『だから……もう、ここへは来ないで。私も、和人としゃべれないのは辛い……』

その言葉に和人は俯いた。今の和人には、幸に否定も肯定も伝えられない。

『だから、和人……』

幸は俯いたまま、和人に語りかける。

「う……あ……」

その時、和人の口から声が発せられた。

和人は首を振りながら、懸命に喉に力を入れた。もうしゃべる術さえ忘れてしまいうさだ。それでも、何か訴えかけたかった。

幸と幸の母親は、和人の声に驚いていた。和人が聴覚を失ってから、和人の声を一度だって聞いたことがない。

「和人……」

幸は和人の頬に触れ、悲しみに暮れていた。どうしてこんなことになってしまったのだろう……身体中が痛い。婚約者の修吾も離れていた。夢であったピアノを弾くことも、これからは難しいだろう。

これからの人生、どうなってしまうのか。そう考えると苦しくて頭が重くなる。なにより和人というだけで、自分が無力に感じられてしまう。それは幸の心を支えられないほど重く圧しかかり、生きる希望さえ失われるようだった。

「さよなら……ごめんね、和人……」

俯きながら幸がそう言った。和人はそれ以上、もう何も言えなかった。

何も出来ない。だが和人の心は、幸を抱きしめたい思いで一杯だった。傷付いた幸を支えたい。一人にしたくない。いつものように、肩を叩いて合図を送りたい。そう思っても、幸の痛々しい姿では、どこに触れれば痛まないのかすらわからない。

和人は肩を落とし、唯一触れられる幸の右手を取った。そして幸の胸の前に拳を作り、上下に振る。片手ながらも、『頑張る』という手話が幸に伝わる。それは和人からの『頑張れ』のメッセージとともに、幸自身が『頑張る』という願いが込められていた。和人の精一杯の、励ましの言葉だった。

やがて幸を見つめると、和人は静かに立ち上がった。そして一部始終を見て辛そうな顔をしている幸の母親の肩を叩いて微笑み、病院を去っていった。

15、恋人

和人は喪失感で、何も考えられなかった。ただふらふらと駅へと歩いていく。自分の存在が幸を苦しめるなら、もう会わないほうがいい。

“ さよなら ” と言った幸の姿が、頭から離れない。婚約者の修吾も、もはや幸を支えてくれる存在ではなくなってしまった。和人には、幸のことが気かかりでならない。

ふと気づくと、駅を通り過ぎようとしていた。和人は溜息をついて駅へと戻っていく。すると、ポケットに入れている携帯電話が震えた。祥子からのメールである。

< 今、家に帰りました。今度はいつ会える？ >

和人は顔を上げると、元来た道に戻っていった。

和人にメールを送ったものの返事がない祥子は、気を取り直して部屋で一人、仕事をしていた。イラストレーターの祥子は、今は絵本の仕事が多く、多忙な日々を送っている。

メールを待ちながらも、祥子が仕事に熱中しかかったその時、部屋の呼び鈴が鳴った。

「はい」

祥子はインターフォンの受話器を取った。画像を送れるほどのものではないが、声でのやり取りは出来る。しかし、一向に相手からの言葉がない。祥子はハツとした。

「和人……？」

祥子は受話器を置くと、玄関へと走っていった。ドアを開けると、案の定、和人の姿があった。

「和人。急にどうしたの？」

そう言う祥子の顔を見て、和人は気が緩んだように息を吐いた。そして、唐突に祥子を抱きしめる。

「……和人？」

強く抱きしめられながら、祥子が尋ねる。だが和人はそのまま、抱きしめることを止めない。祥子もまた和人に抱きつき、二人はしばらくそのままだった。

しばらくすると、やっと和人が祥子を離れた。その顔は疲れきったような顔で、静かに祥子を見据えている。

『ごめん。突然……』

やがて和人がそう言った。そんな和人に、祥子は笑って首を振る。「いいわよ、全然。むしろ嬉しい」

笑顔で祥子が言った。

奥手な和人は、今まで一度だって自分から行動を起こしたことがない。メールをするのも、キスをするのも、いつも祥子からだった。そんな和人に、少し不満を持っていたのも事実だ。だが和人が会いに来てくれた。祥子は素直に嬉しかった。

そんな祥子の気持ちを知ってか、和人からもやっと笑みが零れる。「どうぞ、入って」

そう言って、祥子は和人を部屋の中へと招き入れる。部屋に通された和人は、ソファにただじっと座っていた。

「お茶どうぞ」

『ありがとう……』

出されたお茶に、和人は口をつける。だが視線はじっと一点を見つめたまま、動こうともしやべろうともしない。

「……その傷、どうしたの？」

祥子が和人の頬を指差して言う。和人の右頬は、もはや切り傷のように痛々しく残っている。

『ちよつと……ぶつけたんだ』

嘘ではなかったが、それ以上詳しいことを和人は言おうとしなかった。祥子も慣れた様子で苦笑し、救急箱を取り出して、素早く和人の頬に消毒液を塗り始めた。

「幼馴染みの……さっちゃんに、何かあったの？」

仕上げの絆創膏を貼りながら、祥子が察して言う。和人との会話に出てくる人物は、職場や学校の誰よりも、幸のことが多かった。それは祥子が嫉妬するほどだが、和人にとって幸は唯一の心から信頼しあえる友人なのだを知っていたので、祥子は何も言えない。

その問いかけに、和人は静かに微笑んだ。目を閉じて、幸の痛々しい姿が浮かぶ。幼い頃味わった、世界でたった一人になったかのような孤独。きっと幸も、その孤独を今味わっているに違いない。自分はまだ、幼かった分よかったのかもしれない。だが幸は違う。そう思うと、胸が張り裂けそうだった。

和人は突然、祥子に抱きついた。人肌が恋しい。幸の苦痛が、いつの間に自分の苦痛に変わっていた。今でも不安で仕方がない毎日。また幸から別れを告げられた今、和人は孤独になった気がしていた。

「和人……」

祥子はもう何も聞かず、和人を抱きしめた。もう何も言わなくていい。和人が自分を必要としてくれることが、これほどまでに嬉しいとは……和人の不安は、拭い去ってあげたいと思った。

和人が祥子を見つめる。二人は吸い寄せられるように、静かにキスをする。そのまま和人は、祥子をソファに押し倒した。

「和人……」

抱き合った祥子から出た言葉が、和人に響く。それが妙に心地良

い。

「もつと言って……」

和人が言った。

「和人……和人……」

素直にそう言う祥子に、和人は目を瞑って、もう一度祥子を抱きしめた。

「カズト……」突然、和人の脳裏に、和人の名を呼ぶ幸の姿が浮かび、和人はハッと目を見開いた。そんな和人に驚き、祥子も不安気な表情を浮かべている。和人は意気消沈して、起き上がった。

「和人……？」

意味もわからず、祥子が和人の顔を覗き込む。和人は祥子を見つめた。なんだかいけないことをしているように思えた。自身の孤独を祥子で埋めようとしている自分が、汚く思える。

『ごめん。突然来て、こんなこと……』

そう言った和人の手を、祥子が包む。

「……私は大丈夫だよ、和人。あなたが好きだもの」

祥子の言葉に、和人が頷く。何かの自信が芽生える気がする。

『……僕も、君が好きだよ』

和人の言葉に、祥子も微笑む。互いの気持ちを確認し合うように、二人はそのままもう一度倒れ込んだ。

夜中。隣で眠る祥子の横で、和人は天井を見つめながら溜息をついた。

（……僕は何者なのだろう。自分の気持ちがわからないなんて……だけど、僕は祥子が好きだ。さっちゃんを好きな気持ちとはまた違う……でも、このもやもやした気持ちはなんだろう。幼馴染みが離れていくのは、こんなに辛いことなのだろうか）

和人は起き上がって祥子を見つめた。祥子は未だ、和人の横で眠っている。

（祥子……この人もそうなのだろうか。一時だけの感情……僕のこととは、ただ珍しく映っているのかもしれない。この人も、いつか僕から離れていくのだろうか。あれだけ愛し合っていた、さっちゃんと修吾さん……それがこんなことになるなんて、信じられない。さっちゃんはどうしているだろう。これからどう生きていくのだろうか……）

和人はそう思った。

修吾と幸が別れた。あの二人がどれだけ真剣に愛し合っていたかを知っている。それをいつも羨ましく思っていたが、二人はもう会うこともないのかもしれない。

和人も空しくなった。今まで誰とも積極的な付き合いをしてこな

かったのは、別れが怖いという自分の臆病さというのを知っている。だが今、幸から別れを告げられ、和人は自分の先の人生が見えなくなるまで心を沈ませていた。もう幸とは、幼馴染みでも友達でもいられないというのか。そう思うと、悲しくてたまらない。

「和人……？」

そんな和人に気づいて、目を覚ました祥子が和人の腕に触れながら呼んだ。和人はハツとして、祥子に微笑みかける。そんな和人に、祥子も小さく微笑んだ。

「いいんだよ、和人。いつも笑っていなくても……」

祥子が言った。

「自分に障害があるせいで、今まで自分の感情を殺してきたのかもしれないけど、私はあなたの恋人になれて嬉しいし、これからずっと付き合いたいと思ってる。だから、せめて私の前では泣いたり怒ったりしてほしいって、ずっと言いたかった……ただ微笑みかけるだけが、優しさじゃないよ」

その言葉に、和人はぐつときた。今の自分の不安を、祥子はすべてわかってくれているのだと感じる。そしてその言葉は、今の和人にとって一番ホツと出来る、ずっと欲しかった言葉だったのかもしれない。

和人は俯いた。今にも泣き出しそうだった。そして静かに語りかける。

「ごめん……僕はずっと臆病だった。君に対して、自分から何の努力も出来なかった。それが君の不安や不満材料になっていることは知っていても、自分が傷付くのが嫌だった……僕はずるい。君が好きだと言ってくれても、流れに任せるだけで何もしてこなかった。自分から行動して傷付くのが嫌だった……」

和人の本心に、祥子は何度も頷いて聞いている。

「いいのよ。それはみんなそうよ……でも私は、自分から行動しないと、和人と付き合うのは無理だってわかってたから……だから、傷付いても和人が好き。これから正直になってくれればいい。あな

たの帰る場所が、私のところになればそれでいいの」

『……僕の帰る場所は、もうとつくに君のところだよ……』

「和人……」

互いが互いに告白するように、これだけ本音をさらけ出したのは初めてだった。

俯いたままの和人の頬に、祥子が触れる。

『さっちゃんが……』

その時、和人がそう言ったので、祥子は手を下ろして和人を見上げた。

「……さっちゃんが？」

『婚約者の修吾さんと、別れたんだ……』

「え……？」

祥子は和人を見つめる。和人はとても辛そうな顔をしている。幸に嫉妬さえ覚えるほどの、苦しい表情だ。

だが祥子は和人の続きの言葉に耳を傾けた。幸のこと修吾のことも、和人から聞いて少なからずは知っている。

『婚約解消されたんだ……彼女を捨てたんだ！』

和人の目から、堪らず涙が溢れ出した。人前で泣くなど、一緒に住んでいた祖母が亡くなった時以来である。

「そんな……ひどい……」

口を結んで涙を拭い、和人は言葉を続ける。

『だけど……一番無力なのは僕だ。僕はさっちゃんの何の助けにもならない。修吾さんを殴ったって、修吾さんが帰ってくるわけじゃなかった……せめて彼がいてくれたら、さっちゃんの心の支えになつてくれたらうに、今のさっちゃんには両親しかいない。それが僕には、悔しくてたまらないんだ……』

涙を堪える和人に、祥子は静かにキスをした。そして優しく微笑みかける。

「でも彼女には、あなたがいるじゃない。両親だけじゃないわ。友達だっているはずよ」

祥子の言葉に、和人は首を何度も振った。

「僕じゃ駄目なんだ……僕はさっちゃんに、励ましの声をかけることも出来ない。さっちゃんは僕に、泣き腫らすことも出来ない。僕がいることで、さっちゃんを苦しめたくない……もう、会っちゃいけないんだ……」

その言葉に、祥子は目を見開き、驚いた表情を見せる。

「どうして、そんなこと……そんなふうに思うことないわ。幼馴染みじゃない。彼女だって、そんなふうに和人が思ったら悲しむわ」

祥子がそう言っても、和人は首を振るだけだ。

「彼女に言われたの？ もう会いたくないって……」

和人の表情に、祥子が気づいてそう尋ねる。祥子の問いかけに、和人は静かに頷いた。

「そんな！　いくら大変な時だからって、和人を傷付けることないじゃない！」

突然、祥子が興奮してそう言った。和人がここまで落ち込んでいる原因を知り、幸を腹立たしくも思う。

「違うよ。僕は傷なんて付かない。だけど、さっちゃんの気持ちはわかるんだ……」

「どうして平気でいられるの？　彼女の婚約者が彼女を捨てたように、彼女は和人を捨てたのよ？」

祥子の言っていることはもっともだった。だが和人には、幸の気持ちのほうがよくわかる。

「平気なんかじゃない……だけど僕がさっちゃんの立場でも、僕がいるだけで辛くなるのは当然だと思う」

「和人……」

「僕は……もしもさっちゃんに何かあった時は助けたい、なんでもしてあげたいってずっと思ってた。僕が小さい頃、友達が離れていても苛められても、さっちゃんだけは僕に手を差し伸べて、友達でいてくれたから……だけど実際、僕にさっちゃんを助けることなんて出来なかった。僕はこれほどまでに自分を無力だと思ったこと

はないよ。だけど、どうしようもないんだ……彼女が唯一望むことは、僕と会わないことなのだから……」

和人の言葉を聞いて、祥子は和人を抱きしめた。

「じゃあ、忘れなよ。これからは、私が彼女の代わりになるから……」

…私もう、和人の悲しそうな顔も苦しそうな顔も、見たくないの。

もう傷付かないで……」

返事の代わりに、和人は祥子を抱きしめた。もうお互い、何も言わなかった。

16、挑戦

数カ月後。和人は祥子の部屋で、先日出版されたばかりの祥子がかけた絵本を読んでいた。祥子の絵はほのぼのとしていて、いつもホッとさせられる。

祥子は絵本の下から、和人の顔を覗き込んだ。

「……どう？」

その質問に、和人は微笑んで頷く。

『うん。良い作品だと思う。また腕上げたね』

和人が言った。祥子は素直に喜ぶ。

「本当にそう思う？」

『うん。暖かくて、優しい絵だと思う。大人が見ても楽しめるよ』

「よかった。和人にそう言われるのが、一番嬉しい」

二人は笑った。

「それで……本当に引き受けてくれるの？」

突然、祥子が聞きづらそうに尋ねた。

数日前、祥子がよく世話になっている出版社の社長との飲み会が行われた。和人は関係ないのでその場にいなかったが、祥子の恋人の話が出たのだ。祥子は、恋人は耳が不自由だが才能ある文学青年で、将来は小説家を目指していると言った。

もちろん、その社長が興味を持って、和人のコネの一つになってくれればとの思惑もあったが、その後本当に社長が和人と会いたいと言うとは思ってもみなかった。

そこで昨日、祥子が間に入る中、和人と出版社社長との面接が行われた。そこで社長は、和人に絵本を書いてみないかと勧めたのだ。文は和人で、絵が祥子。善意的で実験的な試みのようだが、二人にとっては願ってもない話である。しかし別れ際に言った社長の言葉が、二人の顔を引きつらせた。

「障害のある君の作品なら、泣かせ話で大々的に売り込める。君が

取った賞の雑誌も、売れ続けているそうじゃないか。今回も我々の宣伝効果に負けないように、頑張ってくれよ」

和人のことを侮辱され、祥子は震える思いでその場にいた。社長を殴ってでも撤回させたかった。まるで実力ではなく、和人に障害があるから賞を取ったのだと言っているようなものだ。そんなことは断じてない、それは和人の作品を読めばわかる。そう言っただけで済んだ。

だが、そんな祥子の肩を抱くことで止めたのは、和人であった。和人はただじっと、祥子を見つめている。去っていく社長を呼び止めもしない。祥子は苛立った。

「どうして黙ってたの？ 賞を取った雑誌が売れてるからって、和人の障害とは関係ないじゃない。そのことは公開してないんだもの。それをあの社長はわかってないし、ただの嫌味よ。嫌なら断つていい、怒っていいのよ？ あの社長に撤回させてもよかったのに」

昨日の続きで祥子が言う。そんな祥子に、和人は苦笑する。

『慣れてるよ』

和人のその言葉に、祥子は聞き返す。

「え？」

『慣れてるって言ったんだ。小さい頃から、その類の嫌味は言われ続けている。僕が気にしなければいい話だよ』

「慣れてるって……」

祥子は和人のように割り切れないと思った。自分が和人の立場なら、和人のようにはいかないだろう。しかしそんな祥子をよそに、和人は祥子の絵本をパラパラとめくっている。

『……妬みや羨み、哀れみ、蔑み……そんな人はたくさん会ってきた。今更どうってことないよ』

未だ納得いかない様子の祥子に、やがて和人がそう言った。

「和人……」

『小学校や中学校の時、学校内の作文コンクールで何度か入賞した

ことがあるんだ。その時も、同級生に散々嫌味言われたし……でも、そのうち大人に認められるようになったら、そういうこともなくなっていくた。そういう人には、頑張って実力で認めさせればいいんだ。それが一番難しいけど……祥子もいるし、大丈夫だよ」

そう言った和人に、祥子はやっと笑みを零す。

「私もいるし、大丈夫、か……」

祥子が俯いて言った。

『なに？』

「ううん。じゃあ、二人で二人三脚、頑張ろうね！」

抱きついてきた祥子に、和人も笑って頷く。だが、和人自身も気乗りしない仕事となったことには違いなかった。

数日後。和人は朝から図書館にいた。ここはよく来るところだが、今回は児童書コーナーを何度も行き来する。小説やエッセイなら書いたことがあるが、絵本を書いたことは一度もない。和人はその日、たくさん絵本を読み漁っていた。

果たして自分に絵本が書けるのかは疑問だった。絵本を書いたことも、書こうと思ったこともない。だが、少なくとも絵は祥子と決まっている。何度か絵本の仕事をしている祥子ならば、的確なアドバイスももらえることだろう。

「やっぱり、まだいた」

絵本を読んでいた和人は、突然肩を叩かれた。見上げると、祥子が立っている。

『あれ、どうしたの？』

「仕事終わったから来たのよ。まだいると思って。もうすぐ閉館よ」
祥子の言葉に、和人は驚いた。

『……もうそんな時間？』

「そう。一日中いたの？」

『そっかしいね……』

二人は苦笑した。開館と同時にやってきた和人は、どうやら昼食

を忘れてまでそこにいたようだ。

「まったく……集中すると、ご飯も忘れちゃうのね」

「どうりでお腹が空いたと思った。この本、ちよっと借りてくるよ。入口で待ってて」

和人はそう言つと、数冊の本を持って貸出カウンターへと向かつていった。

「なに食べようか」

図書館を出て、歩きながら祥子が尋ねる。

「いいよ。カレーで」

和人が言う。

「ええ？ 一昨日のでしょ。ごめん、私が作りすぎちゃったから……」

「いや、いいよ。美味しいし」

「じゃあ、せめておかずは違うの作る。スーパー寄つて、買い物しようよ」

二人は笑つて、近くのスーパーへと向かつていった。

途中、病院の横を横切る。幸が入院しているはずの病院だ。図書館の近くでもあり、祥子の家からは生活圏内である。病院の横を通るたび、和人が病室のほうを見上げるのを、祥子も気づいていた。

「あれから会つてないの？ 幸さん……」

祥子が尋ねる。今まで聞かないようにしていたが、今日は勢いで口にしてみた。

「うん……」

和人はそう返事をするだけで、多くを語ろうとしない。そうこうしているうちに、スーパーへと着いた。二人はそこで買い物をする。と、祥子の家へと向かつていった。

ここしばらく、和人は祥子の家で寝泊りすることが増えていた。学校が忙しくなってきたこともあるが、伏せていた和人の母親が回復し、また働き出したことにもあった。なにより、すでに祥子を

両親に会わせただので、両親も安心してくれているようである。

祥子を紹介した帰り際、何度も祥子に和人を頼むと言った両親の姿が目につく。もはや両親が絶大な信頼を寄せている祥子に、祥子自身も和人と恋人になったことに自信を持っていた。

「かーずと」

夜のまったりした時間、ソファで絵本を読んでいる和人に、祥子が後ろから抱きついた。祥子は酔ったように陽気を装っている。和人に自然と抱きついたものの、その顔は真剣だった。

『なに？』

和人が優しく尋ねる。

「うつん。頑張ろうね、仕事……」

抱きつきながらの祥子の手話に、和人は頷く。だが祥子は、未だ言えない唯一の不満を渦巻かせていた。

「和人、幸さんのことなんか早く忘れて。私、そのことだけが不安なのよ……」

祥子が静かに言った。祥子は不安だった。和人を幸に取られるのではないかと思うと、気が気でない。今まで何度も話題に上った幸の話題を、和人が避けるようになったこと。病院を通るたびに見せる、切なげな顔。そして、幸ともう会えないと言った時の、和人の涙。

愛しているからこそ、和人の気持ちに整理がつくまで、祥子は待とうと思っていた。だが、和人の両親にも紹介され、幸せな時だからこそ感じる不安と不満。それらが祥子に重く圧しかかっていた。

『なんて言ったの？』

和人が尋ねる。祥子の独り言は声の振動で和人に伝わっていたが、後ろから抱きつかれていたため、何と言ったのかはわからない。

「うつん。なんでもない」

急に笑顔を取り戻し、祥子は和人の隣に座った。和人は雰囲気です祥子の不安は感じていたものの、その原因が何なのかはわからず、

それ以上聞くことも出来なかった。

数カ月後。和人はいくつかの作品を書き上げて、祥子とともに担当者に見せに行った。男性のその担当者は、新人ながらもやり手である。すべての作品を読んでも、担当者の顔は渋い。

「うーん、いいんですよ。絵本を初めて書いたにしては、よく出来ていると思います。だけど、なんていうのかな。スパイスがないんだよね……」

担当者にそう言われ、和人は頷く。祥子は通訳代わりについて来たのだが、その批評に気がでない。

『仰ることはなんとなくわかります。僕も何かわからないけど、足りないと思っています。ただそれ以上のことは僕にはわからなかったので、感想をいただきに来たのですが……』

和人の手話を、祥子が訳して担当者に伝える。

「そうですね……君が受賞した作品、僕も読ませてもらいました。うん、あれは素晴らしい作品だと思います。きっと君は、子供の頃から文才があるんだな。だから、文を書くのには慣れてるんだ」

担当者の言葉を、隣で祥子が通訳している。和人はその二人を交互に見ながら、頷いて聞く。

「この絵本も同じです。これは、少しいじれば大作の小説になる……つまりね、君は文学に慣れ親しみ過ぎているんだ。絵本は奥が深いこと、君も知っているだろう？ 君の文章は、まだ大人向けに過ぎない。絵本は子供から大人まで親しめる本だよ。もっと子供の視線で書かないとね。子供が夢中になるような、大きくなってでも忘れないような絵本にしてみたいんですよ」

担当者の言葉はわかりやすく、和人にすんなり伝わった。なるほど、今まで大人向けの文芸作品しか書いてこなかった和人にとって、絵本がどれほど純粋で難しいものなのか、和人は思い知らされていた。

『難しいね、絵本って……』

帰り道、和人が祥子にそう言った。祥子も優しく笑う。

「そうね……そんなに字数が多くてもいけないし、無駄なことは省かなきゃいけない……」なにより、言葉を習う前の子供もわからなきゃいけないじゃない？ お母さんが読み聞かせたりして。想像力が広がるような絵本がいいわよね。その面では、私の絵も重要になってくるわけだけど……」

『そうだね……もう一度、書いてみるよ』

気を取り直して、前向きに和人が微笑む。

「うん。和人なら出来るわよ。さあ、今日はどうする？」

『最近帰ってないから、今日は実家に帰るよ』

「そう。じゃあ、ここで。またね……」

祥子は分かれ道の別の方向へと去っていった。和人はその後姿を見送ると、駅へと歩いていった。

17、作品

帰り際、和人は実家の近くにある本屋へ寄った。この店には小さい頃からよく来ているため、今でも居心地が良い。暇さえあれば何時間でも、和人はこの本屋でいろいろな本を手にとっていた。今日も何冊かの本を買うつと、和人は実家へと歩いていった。

あと少しで実家が見えるというところで、和人はタクシーに追い抜かされた。すると、タクシーは和人の家の隣へと停まる。幸の家だ。

和人はハツとして、思わず電信柱の陰に隠れた。隠れる必要はないと思ったのは束の間だったが、もはや動くことが出来ずに、タクシーを見つめる。

すると、タクシーから幸の母親が出てきた。それに続き、幸の姿が目映った。

（さっちゃん――）

思わず声に出して、駆け寄りたかった。だが、和人はその光景を食い入るように見つめるだけで精一杯である。

幸はそのまま母親に手を引かれ、家の中へと入っていった。もはや顔中を覆っていた包帯はなかったが、遠目にも顔に残った傷跡が生々しく見えた。目は瞑られたままで、足はまだ完治していないのだろうが……片足をひきずるように、歩いていた。

タクシーが去っていくと同時に、和人は歩いていった。そして幸の家を見上げる。

（おかえり……家へ帰ったんだね。さっちゃん……）

和人は心の中でそう呟くと、自分の家へと入っていった。

「おかえり、和人」

和人が実家へ帰ると、母親が笑って出迎えた。病気を伏せていた時よりは顔色も良く、元気に見える。

『ただいま。元気そうだね、安心したよ』

「まあね。やっぱり仕事始めたからかしら。家でじっとしているのは、私には性に合わないのよ」

『うん、わかる。お母さんは、外に出ていたほうがいいみたいだ』

笑いながらそう言っ、和人は椅子に座った。母親はすぐにお茶を差し出す。

『ありがとう……今、さっちゃんが家に入っていくところを見たよ。帰ったみたいだね』

和人が尋ねる。

「ええ、先月の終わりくらいかしら。これからは、盲学校の施設で少し訓練するみたい。まだ足が治ってないみたいで、リハビリも続けなくちゃいけないって言ってたわよ。本当、さっちゃんも大変ね……まだ慣れないから、ずいぶん荒れてしまっているみたいだし……」

……

母親の言葉に、和人は頷いた。

『そう……』

「あんたはどうなの？ 祥子さんとはうまくいってる？」

少し照れながら、和人は大丈夫だと頷く。

「そう。あんな良い子いないわよ。ちゃんとするのよ」

『わかってるよ。でも、あっちのほうが大人だし、まだ僕のほうが助けてもらってばかりだけど……』

「そう。うまくいってるならいいわ。あんたはちゃんと一人立ち出来てるんだから、ちゃんと自分で幸せ掴まなきゃ駄目よ」

母親が言っ。その言葉は、和人が以前から、母親に口癖のように聞かされている言葉である。

子供の頃、和人が障害を負ってから、和人自身も人に甘えることが多かったが、両親もそれを持て余していた。

そんな和人を支えてくれたのは、幸の存在だった。家族でも親戚でもない幸は、出来ることは自分でやれと教えてくれた。幼い頃、何も出来ない泣く和人に、今まで出来ていたことが出来ないはず

がないと本気で叱ってくれたのは、両親でもなく幸である。そんな幸に、和人は応えたかった。出来るだけのことは自分でやることを決意した。

そんな和人に倣って、和人の両親も甘やかすのを止めるようになる。大学進学と同時に、和人に一人暮らしをさせるのは気が気でなかったが、和人を応援したいと思った。結果、和人はずいぶん大人になっているのだと、両親も感じていた。

『うん、わかってるよ……』

和人は微笑むと、しばらく母親と話を続けていた。

次の日。和人は実家近くの図書館にいた。今日も児童書の絵本を中心に読み漁る。今日は学校もないので、また一日中ここにいないとなりそうだ。

読み終わった本を返しに立ち上がると、ふと点字コーナーが目に見え飛び込んできた。無意識に一つの本を手取る。分厚い本は、すべて点字で綴られている。点字を勉強したことがないので、意味がわからないものの、和人は点字に触れてみた。

盲学校で訓練しているという幸。おそらく点字も勉強しているだろう。未だ現実を受け入れられないであろう幸を思うと、和人はいつも胸が張り裂ける思いになった。

（これじゃあ祥子が不安がるのも、当たり前だな……）

和人は一人、苦笑した。祥子の不安を感じていないわけではない。いつも幸のことを思い出すと、その度にどういうわけか祥子は感じて、悲しそうな顔をする。だが、祥子は自分を責めることも何もしない。そんな祥子を見ると、和人も苦しくなるのだった。

だがどう考えても、自分が幸へ向ける思いは恋ではないと思い直してしまう。幸はいつだって、自分のことを弟のように可愛がってくれた。和人も同じで、幸は姉か母のような存在の家族愛であると感じる。だが祥子の不安を考えると、家族愛もいけないのかもしれないと思った。

和人は席に戻って、ノートを広げた。幸のことは考えないようにしようとしても、そう思えば思うほど、思いが溢れ出してくる。思えば長い付き合いの彼女は、何度か拒絶されて会わない時期もあった。だが、今回ばかりは違うだろう。きっともう会えないだろう。和人はそう思った。

（さっちゃん。僕は君を元気づけることも出来ないけど……どうか負けないで……）

ペンを動かし、和人はハツとした。アイデアが沸々と沸き上がる。和人は思いのままに、ペンを走らせた。

次の日。和人は祥子の家で、仕事の打ち合わせをしていた。

『一から書き直そうと思ってるんだ』

和人が言った。今まで何作か絵本の文を書いてみたものの、担当者も良い顔をしていない。唯一手直しの可能性があるという作品があったため、それに手を加えてみようと思ったが、和人はすべて最初から書こうと言う。正式な仕事のタイムリミットはないものの、そろそろ担当者から承認を得ない限り、道は閉ざされてしまう。

そんな和人の申し出に、祥子は二つ返事で頷いた。すでに手直している作品用にイラストも描き始めたので、ここで一から書き直すということは、祥子にとっても一からの出直しとなってしまうが、祥子の顔は笑顔に輝く。全面的に和人の意思通りにしてやりたいと思った。

『いいわよ。和人が決めたなら』

『本当にごめん。もう描き始めてくれていたのに……』

「大丈夫よ。締め切り間際で変更なんてよくあるし。和人には、納得して書き上げてもらいたいのよ」

ありがたい祥子の言葉に、和人も微笑んだ。

『ありがとう。頑張るよ』

「ええ。それで、どんなお話になるの？」

祥子が尋ねる。和人は思い浮かんだ話を、静かに語り始める。

『……女の子が一人いるんだ』

「主人公ね？」

祥子が相槌を入れる。そんな祥子に、和人も笑った。

『そう。どんな逆境にも立ち向かう、冒険者』

「わあ、カッコイイ」

『女の子には、さまざまな危険が立ちはだかるけど、絶対に負けないんだ』

まるで和人の、幸への願いみたい——と、祥子は思った。和人の胸の内がわかるのは、一種の女の勘だけではない。和人の無防備なまでの純粋な心が、表れているように思えた。

「……女の子の名前は？」

祥子の質問に、和人は考えた。主人公の名前はまだ考えていなかった。だが、すぐに浮かぶ。祥子には酷でも、それだけは決まっている。

『さっちゃん……』

正直なまでの和人の言葉に、祥子も嫉妬心が芽生えることもなかった。ただ笑って、和人の頬を撫でる。和人が自分を信じてくれているのだと思った。幸を助きたい……包み隠さず態度で示す和人にとって、幸は本当に計り知れないほどの大切な人なのだと、改めて感じさせられた。

「いいと思う……」

嬉しさと悔しさが混じっているながらも、祥子が笑ってそう言った。そんな祥子を、和人は抱きしめる。

『そう言ってくれると思った……』

「……ずるい。本当は、ちょっと妬いてるのよ」

初めて、祥子がそう不満を漏らす。だがお互い、吸い寄せられるように抱きしめ合う。和人は祥子の不安を抱き上げるように、しっかりと抱きしめていた。

18、不安

「いいね」

和人の新しい作品を、担当者は何度も頷いて賛同した。

「直すべきところもほとんどない。君、絵本作家としての才能もあるよ」

最高の褒め言葉を貰ったと、和人も嬉しさに身を投じていた。

『ありがとうございます』

「いやいや。じゃあ、今度の会議にかけるから。それまで発売時期もわからないけど、とにかく森下さんもイラスト書き始めてよ。これなら多分、スムーズに売り出せるよ」

同時に渡した祥子の下絵も二つ返事でOKをもらい、和人と祥子は意気揚々と帰っていった。

「やったね、和人！ あそここの会社、毒舌な担当者ばかりだから、胸張っていいわよ。私もすぐにイラストかかり始めるね。あ、その前に、夕飯どうしようか。たまには外食にしようよ。前祝いに奮発してさ」

嬉しそうな祥子に倣って和人も頷くと、二人は歩き始めた。

「あそこにしない？」

少し先に見えるレストランを指差して、祥子が言った。和人はハツとした。そこは以前、幸と修吾とで食事をしたレストランだ。幸が事故に遭った、あの日のことである。

「……行ったことあるの？ あそこは嫌？」

察して、祥子が言う。

『ああ……うん』

目を泳がせて和人が頷く。そんな和人に、祥子が苦笑する。

「和人って、バツが悪い時はすぐ目が泳ぐし、顔に出るのね。結構お洒落な店で有名なんだけど、さては前の彼女と来たとか？ もしかして、和人って結構遊んでる？」

すでに気分が高ぶっているせいか、からかうように祥子が尋ねる。そんな祥子に、和人は小さく苦笑した。

『そんなんじゃないよ。ただ……あの店、さっちゃんが事故に遭った日に一緒に食事した店なんだ……』

和人が正直に答えた。一気に二人は、お祝いムードから意気消沈した。

「あ、そうなんだ……じゃあ、止めたほうがいいね。あっち行ってみようか。この辺、結構お洒落な店あるから……」

突然、気を遣うように祥子が言い直した。和人はごめん、という仕草を見せると、二人で別の店へと向かっていった。

その夜。和人は祥子のベッドで眠っていた。夜中にふと目を覚ますと、隣に祥子の姿はない。ダイニングの明かりがついているようで、ドアの隙間から明かりが漏れているのに気がついた。

和人が起き上がってダイニングへ行くと、祥子がイラストを描いている。下絵も承認をもらっているもので、あとはペン入れである。

「和人……ごめん、起こしちゃった？」

祥子が言った。和人は首を振る。

『こつちこそごめん、仕事中に……』

「ううん、大丈夫……あ、コーヒー飲む？」

『僕が入れるよ。少し休んだほうがいいよ』

そう言つと、和人はキッチンへと向かっていった。祥子は、そんな暖かな時間が嬉しくてたまらない。

『どう、順調？』

コーヒーを差し出しながら、和人が尋ねる。

「ううん。いつもより難しい……だって、いくら和人の文が良くても、私の絵が駄目じゃないいけないでしょ？　これが和人の今後に影響するのは間違いないんだから。いつもより手は抜けないもん」

そう言つた祥子に、和人は笑って祥子の肩もみを始めた。

「うふふ。ワイロ？」

『そうだね。祥子にも頑張ってもらわないと』

「プレッシャーかけないの」

二人は笑った。

しばらくして、何度か出版社側とのやり取りが続き、ようやくイラストの入稿も終わった。あとは発売日を待つのみとなる。

最後の入稿を終えた祥子は、家へと戻っていった。和人は学校なので、今日は夕方を過ぎないと帰ってこないのは知っている。和人が帰ってくるまでに、部屋の片付けや夕飯の支度をしなければと思った。

耳の不自由な和人との生活は、祥子にとって思ったよりも違和感なく生活出来ていた。それは、和人の優しさにずいぶん助けられているのだと感じる。半同棲生活となっている和人との生活で、部屋の一角は完全に和人の私物で一杯だ。その大半は本なのでかさばるばかりだが、それを取り上げる気には到底なれない。

ふと、和人の私物である積み上げられた本が気になった。数十冊にも上る本は、床の上に器用に積み重ねられている。

「危ないなあ、こんなに積んじゃって……それにしても、難しい本ばかりで読む気にもならない」

祥子は苦笑しながら、その本のタイトルを上から順番に読んでいく。その時、一冊の本が目に残った。

「はじめての点字……？」

もつとタイトルを追っていくと、いくつか同じ類の本が見える。

「“点字の基礎”、“視覚障害者とのコミュニケーション”、“視覚障害者の対話・触手話”……」

見えるところに置いてあったのに、和人がそんな本を読み漁っていたとは知らなかった。まるで幸とのコミュニケーションを図ろうという和人の意思が丸見えだ。

祥子の手の届くところに置いてあったという、和人のあまりにも無防備な行為は、逆に残酷だと思った。

一気に祥子の不安が爆発する。何度も幸の存在は忘れようと思つた。だが、それは振りに過ぎなかったことを、祥子自身が思い知らされている。祥子は怒りに任せて、積み上げられた本を崩した。途端に、辺りの床が本で埋まる。

「和人……本当に、幸さんはただの幼馴染みだけなの？ 私にはどうしても、そんなふうには見えないよ、和人……」

祥子の目から、涙が溢れた。

数時間後。祥子の家に帰った和人は、真つ暗な部屋に首を傾げた。玄関の明かりを付けると、祥子がいつも履いている靴はある。不思議に思いながらも、和人は部屋の中へと入っていった。

リビングの電気を付けると、部屋の隅にある和人のプライベートゾーンと化した一角に、本が散乱していることに気がついた。そのうち一つの本だけ、テーブルの上に置いてある。“はじめての点字”。和人はそれを見つけると、寝室へと入っていった。

寝室も真つ暗だが、ベッドに祥子が横たわっているのがわかる。

和人はベッドに腰かけると、寝ているともわからない祥子の頬に手を触れた。祥子はその手を拒むように払い除けたので、起きていたのだとわかる。

祥子は和人を見ようとしないので、和人はコミュニケーションの手段を奪われていた。責めるにも謝るにも、自分を見てくれなければ始まらない。和人は祥子の頬にキスをした。

「嫌！」

今回は今までと違う……雰囲気ごと祥子が和人を拒むことは今までなかった。和人は溜息をつくと、祥子に布団をかけ直してやり、静かに寝室を出て行った。

「……馬鹿！」

叫ぶように、祥子が言った。だが、和人に聞こえるはずもない。再び閉ざされた寝室の扉を見つめながら、祥子は涙を流した。

「……馬鹿……」

19、完成

次の日。祥子が起きてリビングへ出ると、すでに和人の姿はなく、テーブルの上にメモが置かれていた。昨日、祥子が散らかした本は元のように積み重ねられ、数冊の本が束ねられていた。その中には、点字の本もある。

“今日も学校なので出かけます。昨日は話が出来なくて残念でした。今日も昨日と同じくらいの時間に帰ります。今日は話が出来ると嬉しいです。和人”

更に下には、まだ文章が書かれている。

“追伸。長い間、部屋の一角を本で占領してしまっていてすみません。束ねてある本はいらない本です。今度売りに行くつもりですけど、すぐに片付けたいなら君が処分してください”

それを見て、祥子は俯いた。

「気を使っちゃって……そういうところ、ずるいのよね。私より年下のくせに……」

祥子は束ねられた本を見て、小さく微笑んだ。

その夜。部屋に戻ってきた和人を、いつものように祥子が笑って出迎えた。その様子に、和人はホッとする。

「おかえり」

玄関まで出迎えた祥子を、和人は思わず抱きしめた。和人の中で、祥子の存在が膨れ上がっていく。いくら優しい家族がいても、今まで和人は心の隙間を感じていた。ふとした時に感じさせられる、孤独。幸にもう会えないと言われた日、和人は祥子の存在がどれだけ

ありがたかったか計り知れない。

「昨日はごめんね。大人げなかったね……」

祥子が静かに口を開いた。和人はしきりに首を振る。

「こつちこそ、ごめん……でもこれから、なんでも言つて。話さなくてもわかり合いたいけど、僕は人よりそういうところは欠けると思う。だから君には不満に思わせる部分が多いと思うけど、僕はちゃんと、君のことが好きだから……」

和人の言葉に、祥子は笑つて和人を抱きしめた。祥子が一番欲しかった言葉のような気がした。

「ありがとう、和人……」

二人は微笑み合うと、中へと入っていった。テーブルの上には、束ねておいたはずの本が解かれていた。和人が祥子を見ると、祥子は小さく微笑んでいる。

「無理して捨てなくていいよ。その一角は和人のスペースだつて、私が容認しているんだし……」

祥子の言葉に、和人はもう一度、積み上げられた本を分け始めた。

「和人？」

「……本当にいらない本なんだ。明日にでも売りに行くよ」

「和人……」

和人は祥子を見つめた。

「祥子。君が気にしてるのは、この点字の本でしょう？」

昨日不機嫌だった祥子の原因を、和人が尋ねた。昨日は本を崩すことで露骨な伝え方をしたが、祥子は何も言わずに目を伏せる。

「べつに怒ってないよ。僕が無神経だった。ごめんね……」

祥子は首を振る。

「ごめんね……いつも謝らせてばかりだね、私……」

今にも泣き出しそうな祥子に、和人は祥子の手を取った。そして二人、ソファに座る。

「どうしたら、君の不安が拭い去れるのかな……僕は、やましいことは一つもしてないよ。ちゃんと君が好きだし、さっちゃんのこと

は今でも気ばかりだけど、恋とかそういうんじゃない。信じてほしい」

その言葉に、遂に祥子は泣き出してしまった。わかっていても、割り切れない思いで一杯だった。かといって、和人の心から幸を追いつ出すなど無理だと思つたし、してはいけないことだと思う。矛盾した複雑な気持ちで、祥子を締めつける。

「私がいけないの……でも私、和人を信じてるから。だから……」

二人は静かにキスをした。互いに優しい温もりが包む。だがお互いの心に影を落としているのは、幸のことであつた。いつの間にか祥子の中で、幸の存在は大きく膨れ上がっていたのだ。だが、それを追い払うように、和人は強く祥子を抱きしめる。それ以外の方法は、今の二人には見つからなかった。

それからしばらく経つたある日。和人は夏休みを利用して、実家へと帰つていた。このところ、仕事関係で祥子の家に泊まるが多かつたので、実家に顔すら出していない。

「おかえり」

いつものように、母親の優しい顔が飛び込んできた。いつもは仕事で忙しい父親も、夏休みで家にいる。両親は和人のことが心配でならないものの、賞を取つたり絵本を出したりと輝きに満ちた我が子を、誇らしく思つていた。

『うん。今日、到着する予定だよ』

和人が言つた。和人の書いた絵本は、発売日を来週に控えている。だが、すでに出来上がった物が一足先に実家に届くようになっていた。

「それを聞いてから、朝からそわそわしちゃつてるのよ。和人と祥子さんの合作でしょう？　どんなのかしら」

すでに母親は、待ちきれない様子ではしゃいでいる。父親も終始にこやかで、やれやれといった様子で母親を見つめているものの、いつもと違って落ち着かないようだった。そんな両親を前に、和人

自身も少しは親孝行出来たのだと思うと、嬉しくてたまらない。

その時、呼び鈴が鳴った。和人の母親は、いつもより増して猛スピードで玄関へと向かっていった。父親は、苦笑して和人を見つめる。

「朝からあんな調子なんだ。父さんもね……学生の身でよく頑張ったな、和人」

ストレートな父親の言葉に、和人も嬉しさを噛み締めていた。両親がこんなに喜ぶとは思ってもみなかったのだ。

やがて母親が、父親経由で和人を呼んだ。玄関には大きな段ボール箱があり、和人はそれを抱えて、リビングへと運ぶ。箱を開けると、間違いなく和人の名前が印字された絵本があった。

「まあ素敵。作・水上和人だって。祥子さんの絵も素敵ね」

「ああ、嘘のようだな。こんなに立派な本になるなんて……」

「ありがとう。喜んでくれて、僕も嬉しいよ」

両親の言葉に、和人は素直にそう言った。

久しぶりの家族の団欒に、和人は日々の緊張から解されている気がした。他愛もない話を家族でしている時だけは、和人も心身ともにリラックス出来るのだった。

夕食を終えて、洗い物をしている母親に、和人は静かに近づいていった。

「なに、和人。まだおなか空いてるの？」

「違うよ。母さんに、頼みたいことがあるんだけど……」

そう言っ、和人は自分の絵本と、その上に置かれたCDを見せた。

「なあに？」

『これを、さっちゃんの家にとっていてくれないかな？』

「さっちゃんに？ いいけど、さっちゃんは……」

幸は目が見えないので、和人の絵本は見れないと、母親は言いたげだった。だが和人は静かに微笑みながら、絵本の上に乗ったCD

を指差す。

『これ、テープ図書の試作品なんだ』

「テープ図書？」

『うん、無理言っ作ってもらったんだ。絵本の朗読のCDがついてる』

和人がそう言った。

絵本を作るという段階で、和人はテープ図書も同時に作ってほしいと提案していた。テープ図書とは、視覚障害のある人や小さい子供への読み聞かせとして、本の内容を朗読した音声の図書である。普通の本より手間もかかるため、担当者も渋っていたものの、和人に障害があることも考慮して、テープ図書の販売もなされることになった。

その試作品を、絵本とともに幸に渡そうというのだ。母親も優しく微笑む。

「さっちゃん、聞いてくれるといいわね……」

母親はそう言ってその絵本とCDを受け取ると、そのまま家を出ていった。

20、母校

「幸……」

幸の家では、幸の母親が和人の母から受け取ったばかりの絵本を持って、幸に声をかけた。幸は自分の部屋で、ベッドに入って眠ろうとしているところだった。今までよりも出来ることが限られているため、最近はベッドに入るのが早い。それも不眠症になっていたため、薬で誤魔化した睡眠だ。

事故に遭って家へ戻ってきた幸の部屋は、二階から一階の和室に移されていた。階段は危険だし、居間もトイレも一階にあるからだ。幸は一日のほとんどを居間で過ごし、大学も休学している。技術が問われる音楽学部では、このままでは卒業など出来ないだろう。しかし、今はそんなことを考えている余裕はない。日々の生活だけで精一杯で、今後のことを考える余裕など、幸にもその両親にもまだなかった。

「なに？」

「今、カズちゃんのお母さんが来てね。カズちゃんが、あなたについて……」

「和人が……？」

ベッドに座って、幸は母親の声が聞こえるほうを向いている。

「絵本よ。カズちゃんね、今度絵本出すんだって。ちゃんと本屋さんにも並ぶらしくて、一足先にくださったのよ」

母親の言葉に、幸は皮肉に笑った。

「絵本なんて……見られるわけじゃない……」

「あ、でもね。これ、テープ図書っていうんですって。CDらしくて、内容が声で吹き込まれてるから幸にもわかるようになってるって。聞いてみましょうよ」

すっかり元気を失くして荒んでいく幸を、母親が元気づけるようにそう言った。

「そう。すっかり有名になったみたいね、和人……」

嫌味を言うように、幸が言葉を放つ。出てくる言葉はどれも恨み言ばかりだ。

「……あの子はよく頑張ってるわよ。文学の賞も取ったそうだし、良い子だしね。小さい頃から障害を負ってるのに、前向きで明るくて。でももう、カズちゃんも大人だね。ご両親に紹介したっていう恋人もいるみたいだし……当たり前か。あの子ももう、二十歳過ぎてるんだものね」

「……そんなに良い子なら、私の代わりに和人がお母さんの子なら良かったのにね」

本心ではないものの、今の幸にはそんなことしか言えなかった。だが幸の母親も、そんな言葉でさえもはや慣れてしまっている。それでも、どうしていいのかわからなかった。しかし、ここではつきりと否定しなければ、幸も救われない。母親は口を開いた。

「そんなこと言うてるんじゃないわ、幸。あなたの目は、手術すれば治る見込みがあるって言われたのよ。あんたもカズちゃんを見習って、前向きに……」

「嫌よ！ もう目を開けるのも怖いのに……また手術でズタズタに切り裂かれるっていうの？ そんな恐怖、私には耐えられない……それに治るっていったって、気休め程度って言われたじゃない。光があればそれでいいの？ ほとんど見えないなら、見えないの緒よ！」

母親の言葉に、勢いに任せて幸が言う。幸が言う通り、医者には手術すれば目に光を取り戻せると言われつつ、眼鏡などで矯正してもほとんど見えない状態になるだけだと言われていた。

かすかな光でも取り戻せることは希望だという両親と、もはや手術などで怖い思いをしたくないという幸とでは、真っ向から意見が対立していた。

「幸……」

もう何も言えず、母親は無言のまま、棚の上のオーディオデッキ

に和人の絵本のCDを入れ、再生ボタンを押した。途端に、いかにも物語が始まるという感じの音楽が流れる。

「やめてよ！」

幸は突然立ち上がると、音楽が聞こえるオーディオデッキのほうへと歩き出し、構わずボタンを一遍に押した。何度か叩くようにボタンを押すと、音楽が止む。

「幸……」

「聞きたくない！」

幸が言った。なぜ聞きたくないのかは、幸自身にも説明がし難かった。ただ、今は何も考えなくなかった。和人のことも誰のことも、思い出したくはない。

「そう。ごめんね……もう寝るところだったものね。おやすみ……」
母親は静かにそう言つと、幸の部屋を出ていった。

残された幸は、涙に濡れていた。こんなことを言いたくはない。母を傷付けたくはないのに、どうしても苛立ちをぶつけてしまう。幸は今まで以上に、自暴自棄になっていた。

一方の和人は、早くもちよつとした有名人になっていた。発売と同時に売り出された和人自身の宣伝によって、絵本の売れ行きは予想を上回る売れ行きである。宣伝には、聴覚障害者が書いたという売り文句があつたことで、和人自身も傷付いていたが、予想の範囲内ではあつたので多くは語らずにいた。いつかハンデがなくても実力で認められるように、和人は前を向くしかなかった。

「すごいお花でしょ」

家で過ごした夏休みを終え、久々に祥子の家に行った和人は、溢れ返る花の数に苦笑した。

『実家もこんな感じだよ。花瓶が足りないくらいだ』

「そうよね。私もこんなにもらつたの初めて。やっぱりマスコミがこぞって和人の記事書いたから……」

祥子はそう言ったところでハツとした。ほとんどの記事は、和人

のハンデを煽り立てられたもので、内容に関してはほとんど触れられていない。読者からは哀れみの声ばかりが聞こえるほどだ。和人は苦笑した。

「僕、頑張るよ。哀れみでも蔑みでも、僕のことを知ってくれた読者がいる。その人たちを逃さないために、これからだと思うんだ」あまりに前向きな和人に、祥子は清々しさを覚えていた。また和人の、別の一面を見られた気がする。

「うん、そうだね。私も負けてられない」

二人は笑顔で頷いた。

しばらくの間、世間の関心が和人に向けられていた。小さい頃から文学で賞を取り、現役大学生ながらも絵本を出版。それがベストセラーとなれば、マスコミも放っておかない。テレビ番組へゲストで招かれることもしょっちゅうあったが、学生の身なので辞退していた。それでもマスコミは実家にまで来るようになり、近所の人にサインを強請られるようになった。

一番嬉しかったのは、和人のファンだと言って訪ねてくる人たちが、手話を勉強してくることだった。自分の障害が、少しでも理解させて受け入れられていることに、和人は嬉しさを隠せなかった。

数週間後。和人は、高校時代を過ごした聾学校へと出向いた。在学中の同じ障害を持つ生徒たちに、講義をしてくれと頼まれたのだ。母校で未だ知っている恩師も多い中、和人はその申し出を受けることにした。先輩として仲間として、今ある和人の現状から苦しさまで、包み隠さず話した。

講演を終えても、和人はしばらく学校に残っていた。先生や生徒と交流をして、一人で校舎を歩く。思い出が詰まる学校だ。聾学校の向こうの校舎には、盲学校もある。総合福祉施設のため、校門は一緒だが校舎は別々なのだ。病院も隣接しリハビリセンターもあるため、ここには多くの人が訪れている。

和人はしばらく思い出に浸っていると、校舎を出ていった。ちょうど盲学校の生徒たちが帰る時間のようで、バスで帰る生徒たちが健常者とともに、列を作ってバス停へと歩いていく。また大きな駐車場には、生徒たちを迎えにくる人たちの車で溢れ返っていた。

その時だった。和人の目に一人の女性が映り、釘付けになった。

幼い生徒たちとは飛び抜けて背丈も違う、大人の女性だ。幸である――。和人は目を疑った。しかし思い起こせば、幸もリハビリや訓練のために施設に通っていると聞いていた。同じ学校だったのかと、和人は認識した。

迎えを待っているのだろう。幸は駐車場にある、待合場のベンチの一つに座っている。すると徐に、幸が顔を背けた。そばに喫煙所があるため、煙草の煙が風によって幸を直撃しているのだ。

少しして、幸は耐え切れなくなったのかベンチから立ち上がった。その拍子に、膝に乗せていたバッグが落ち、中身が散乱する。

思うより先に、体が動いていた。和人はその場から幸のそばに駆け寄ると、近くにいた誰よりも素早く物を拾い上げた。そして幸のバッグに戻すと、幸の手に戻してやった。

「……カズト？」

不安気に半信半疑な顔をしながらも、確かに幸の口がそう動いた。何度も見慣れた幸の唇が、自分の名を発している。和人は躊躇いながらも、肯定の意味を含めて幸の腕を叩いた。自分と幸の、唯一のコミュニケーションだ。

「和人なのね……？」

そう言った幸に、和人は嬉しくなりながらも、いたたまれない気持ちに駆られた。もう幸は、自分に会い、名前を呼んでくれないと思っていたからである。

その時、門を入ってくる見覚えのある車が、和人の目を奪った。幸の家の車である。和人は幸の手を取ると、その手を丁寧に下ろし、逃げるように去っていった。

「幸」

立ちつくす幸に、母親が声をかけた。幸は自分が和人を傷付けていることを再認識していた。幸自身も、まだ和人と向き合う勇気が持てない。

「幸、どうしたの？」

車へ誘導しながら、母親が尋ねる。幸は少し俯いた。

「ううん。ただ……懐かしい匂いがして……」

ぼそつと、幸がそう言った。

和人の匂いがした――。汗の匂いでも香水の匂いでもない。古くから知っている、和人の匂いがした気がした。直感だったのかもしれない。ただ、和人だと思った。

幸はそのまま母親とともに車へと乗り込み、家へと戻っていった。

21、勇気

数日後。まだ薄暗い早朝、幸の家のリビングには明かりがついていた。今日から父親が出張へ行くというので、幸の母親が早くから食事を作っている。幸はまだ寝ているはずだ。

「帰るのは来週だったわよね？」

母親が、食事中の父親に尋ねる。

「ああ。早ければ週末には帰るよ」

「わかったわ。でも、急な出張なんて困るわ。私もパートの仕事、急には休めないのよ。なんとか同僚に代わってもらうことは出来たけど、今日は誰かに頼まないと、幸のお迎えが出来ないわ……」

母親が心配そうに言う。幸が事故に遭ってからというもの、母親は幸につきつきでいる反面、幸が施設へ通い始めてからは、その時間だけは近所でパートの仕事を始めていた。未だ休学中の幸の学費と、現在の治療費を合わせれば、父親の給料だけでは厳しいのだ。幸の迎えは両親が交代で行っている。

「わかってる。こつちだつて急で迷惑してるんだ。今日の迎えは、なんとか誰かに頼んでくれよ。仕方ないだろう」

ため息混じりに、父親がそう言った。

「あなた。音楽学校、退学の手続きしましょうか……幸も手術はしないって言ってるし、このまま休学してたつて、学費はいくらか払わなきゃならないのよ？ 通つてもいないのに。その上、治療費やリハビリだなんだつて、私がパートに出たつて、すぐに追いつかなくなるわよ……」

そう言う母親を、父親が困ったように見つめる。

「だけど、あの学校に入れたのは幸の才能だよ。目が見えなくなつて、頑張ればピアノも弾けるはずだし、今後手術して見えるようになる可能性も残っているんだ。お金の心配はあるけれど、あの子の唯一の居場所を取り上げることはないじゃないか……」

そう言っている父親も、家計が厳しいことはわかっていた。だが小さい頃からの幸の夢を摘み取ることなど、今は出来なかった。それこそ、幸の新しい人生までもを見失う気がした。

「無理しなくていいわよ、お父さん」

その時、そんな声が聞こえた。両親が振り向くと、リビングのドアのところに幸が立っている。

「幸……」

「私、ちゃんとわかってるから……目が治ろうと治らなかつと、もうピアノはやらない。学校へも行かない。だから早く、退学の手続きを済ませて！」

強い口調で、幸がそう言った。両親は立ち上がって幸を見つめる。「お金のことは、子供のおまえが気にすることじゃない。ピアノは続けなさい。今はまだ弾きたくないかもしれないけれど、ピアノはおまえの一番好きなことじゃないか。苦勞して入った学校なんだし、今の状態に慣れたら、また学校へ行けばいいじゃないか」

父親がそう言った。しかし間髪入れずに、幸が叫ぶ。

「綺麗事言わないでよ！ 私は子供じゃないわ。お金のことだってわかってるし、ピアノだってこれから弾けるわけじゃないじゃない。学校へだって行けないわよ。夢なんて、もうない！ だから、退学の手続きをして。私がそう言ってるんだから、さっさとそうしてよ！」
幸は逆上していた。寂しさ、孤独、絶望、それらが入り混じって、何度も幸を襲う。そしてやり場のない幸の心は、一番身近な両親を襲う。かつて同じように、和人を傷付けたように……。

叫びながら、幸も自分と戦っていた。こんなことを言いたくはない。こんなことには意味がない。抵抗して涙が出ながらも、幸の叫びは止まらない。押さえつけようとする両親を振り払いながら、幸は大声で泣き叫んだ。

ドン、ドン……。その時、ガラスを叩くような音が聞こえた。一同は、音がする庭のほうを振り返った。するとそこには、和人が立っている。何度もリビングの窓を叩いている。

「カズちゃん……」

母親の言葉に、幸がビクツと身体を振るわせた。

「すまないね、こんな朝に大騒ぎしてしまつて……」

父親が冷静になりながら、リビングの窓を開けて和人に言った。

そんな幸の父親に、和人は首を振る。ただならぬ雰囲気を感じながら、和人は幸の父親を見つめた。

『僕の母が、さっちゃんの家から声がするつて……様子を来ただけです。大丈夫ですか？』

ゆつくりと和人が手話でそう言った。幸の父親はほとんど手話がわからないので、少しはわかる母親が頷く。

「大丈夫よ、カズちゃん。ちょっと興奮してただけだから……ごめんねつて、お母さんに伝えてね」

そう言う幸の母親に、和人は頷きながら幸を見つめた。幸は俯き加減で涙を流し、口を結んでいる。

「……とにかく、私はもう学校に行かないから。早く退学の手続き取つてね」

幸はそう言うつと、手探りでふらふらと歩きながらリビングを出ていった。

「……私ももう出かけないと。出来るだけ早く帰るから、あとは頼んだよ」

父親もそう言うつと、足早に家を出て行つた。残された幸の母親と和人は、互いに顔を見合わせる。

『……さっちゃん、本当に大丈夫なんですか？』

やがて、和人が心配そうにそう言った。

「ええ。身体のこととは、相変わらず……でも、あの子、もう、ピアノはやらないつて……」

ゆつくりとそう話す幸の母親の口元を、和人はじつと見つめていた。まるで幸がしゃべっているかのように、母娘の口は似ているものがあつた。

あれだけ好きだつたピアノをやらないと、幸から聞かされている

かのように、和人は愕然とした。そして大きな溜め息をつく、静かにリビングへと足を踏み入れた。

『お邪魔します……さっちゃんに会わせてください。話がしたいんです』

和人がそう言った。

「でも、話といつても、あの子は……」

『もうお互い、これ以上傷付くことはありません。さっちゃんと話をさせてください』

切実なまでの和人の顔は、幸の母親が頷かざるを得ないほどの気迫を感じさせた。

幸の現在の部屋を聞くなり、和人はその部屋へと向かっていった。一階に移された幸の部屋を開けると、幸はベッドに寝そべり、頭から布団を覆っている。

勢いよく開いたドアに、幸はいつもと違う気配を感じていた。両親のどちらでもない。でなければ、和人しかあり得ない。

「和人……？」

幸は起き上がって、和人のほうを見る。和人は幸を見つめていた。その視線を、幸も感じている。

そのまま和人は部屋を見回した。生活の必需品はあるものの、幸らしさを感じられない無機質な部屋だと思った。だが部屋にある本やCDのほとんどが、ピアノに関する本である。

幸がピアノを止められるはずがない。止めてほしくない。和人はそう思うと、幸の手を取った。そして、幸の手を使って手話をする。『ピアノを止めるなんて言わないで』

まるで自分が手話をしているかのように、幸の手が和人によって動かされる。幸の目から、また涙が零れた。

幸は和人の手を振り払ってベッドから立ち上がると、振り向いて手話を始める。

「……あ、あんたまでそんな酷なこと言うのね。わかってる？ 私 はもう、目が見えないのよ。ピアノだって弾けない。弾く気にもな

らない……私はもうピアノが嫌いな。それでいいじゃない！」

乱暴なまでのその手は、手話自体も怒鳴っているようだ。和人は顔をしかめて幸を見つめると、急に立ち上がり、幸を抱き上げた。

「嫌だ！ 下ろしてよ！」

和人の腕の中で、幸が暴れる。だが和人はお構いなしに、そのまま幸の部屋を出て行った。ドアの近くで様子を見ていた幸の母親も、和人のその行動に驚き、心配そうに見つめている。

そんな幸の母親を横切って、和人は幸を抱えたまま二階へと上がっていった。和人が生まれた時から変わらない幸の家。しばらく入ったことはなくても、自分の家のように覚えている。和人はそのまま、元の幸の部屋へと入っていった。

ベッドや棚などは一階の新しい幸の部屋に移されたため、唯一大きな家具であるピアノだけがぼつんと、しかし象徴的に置かれている。和人はそのピアノの前に置かれたピアノ椅子に、優しく幸を座らせた。座り慣れたピアノ椅子ということが、一瞬にして幸に伝わる。

「嫌だ！ もう弾かないって言うてるじゃない！」

立ち上がるうとする幸の肩を押さえつけるように、和人がもう一度座らせる。だがそれに抵抗して、幸も負けじと和人の手を振り払おうとした。

しばらく格闘の末、和人の手から力が抜けた。幸は和人の手を振り払い、手探りで出入り口へと向かっていく。

「幸……」

ドアのそばで様子を見ていた幸の母親が、気の毒そうに幸をそう呼んだ。

その時、ピアノの音色が聞こえた。ままならないリズムながらも、その音色はメロディになっている。

「……キラキラ星……」

思わず幸がそう言った。ピアノを弾いている主は和人しかない。だが、和人は耳が聞こえないのだ。頻繁にピアノに触ったことがあ

ると思えない。しかしそのメロディは紛れもなく、和人が奏でるメロディだった。

立ち止まった幸に、和人はピアノを弾くのを止めると、静かに近づいた。

『合ってた？』

そばに立っている幸の母に向かって、和人が尋ねる。母親は頷きながら、幸に声をかける。

「幸。カズちゃんが、合ってたかって……」

それを聞いて、幸は静かに頷いた。それを見た和人は微笑む。そして幸の手を取り、さっきと同じように、幸の手で手話をした。

『覚えてるものだね。小さい頃に、よく弾いたよね。キラキラ星……』

手話を理解し、幸は頷く。あとからあとから、涙が溢れ出す。

『僕は、さっちゃんのピアノが好きなんだ。耳が聞こえなくなっても、さっちゃんが楽しそうにピアノを弾く姿を見るだけで、勇気が湧いてきた……』

和人の幸の手を握る手が、一層強くなった。

『小さい頃から今まで、毎日欠かすことなく続けてきたピアノを止めるなんてもつたいたないよ。世界には、目の見えないピアニストだつてたくさんいるじゃないか。さっちゃんは、ただ趣味でやってるピアニストじゃない。賞だつて取ったんだ。才能だつてあるんだ。こんなことで……障害なんかに負けないで……』

和人の気持ち、自分の手を通して幸にストレートに伝わってくる。

「和人……」

もう十分だった。和人の気持ちは、百パーセント以上に伝わった気がした。和人の強い心が、自分の弱い心を満たすような感覚さえ覚える。

幸の涙は、静かに流れ続けていた。

『さっちゃんの夢は、僕の夢だ。だから、僕の夢を壊さないで……』

幸はそれを理解すると同時に、和人の手を振り払った。そして、目の前の和人に抱きつく。いつの間に大きくなった身体だろう。視覚を奪われた幸にとって、和人の身体は大きく温かく感じる。そして、安心出来る匂いがした。いつか感じた和人の匂いだ。

和人もまた、大人になって初めて幸を抱きしめて、これ以上ないというまでの安らぎを感じていた。偽ることの出来ない感情が溢れ出す恐怖さえ感じる。

祥子を愛することですでに封じ込めていた、幸への恋心。自分で不純に思いながらも、心が幸で満たされていくのを、和人自身認めざるを得なかった。

22、裏腹

その日、幸が穏やかな表情を見せたことを見届けると、和人は学校へと向かっていった。だが通学中も授業中も、幸の顔が頭から離れることはなかった。

いつの間にか封印してきた幸への想い。恋ではないと自分に言い聞かせた想い。今、授業も何もなく、たった一人でいたならば、心を制御できないほどの想いが溢れ出してくるだろう。和人は身構えるように身体を強ばらせると、幸のことを出来るだけ考えないようにしようとしていた。だが、そう思えば思うほど、思い出されるのは幸の姿だけだった。

和人が去った後、幸はその場から動かず、久しぶりの自分の部屋の匂いを嗅いでいた。家具の配置はそのままなので、目が見えなくてもある程度わかる。幸は目が見えなくなってから今まで避けていたピアノに向かうと、右手を鍵盤の上に置いた。

躊躇いながらも、単音を奏でる。聞き慣れたピアノの音だった。もはや吸い込まれるように、幸は目を瞑ったまま、両手で鍵盤を押さえた。何度も音を外しながらも、次第に曲になってゆく。身体に染みついたように奏でる音楽、動く指先。幸は嬉しさに、涙を流していた。

その頃、祥子は和人がアルバイトをしている出版社に顔を出していた。そこは祥子も世話になっている出版社で、気さくな社員が大勢いる。

「あれ、祥子ちゃん。どうしたの？」

オフィスに入るなり祥子に声をかけたのは、社員の橋野順次郎だ。彼は祥子が駆け出しの頃から世話になっている人で、祥子の担当もしてくれている古い付き合いの男性である。また和人のよき先輩で

もあるようだ。

「あ、橋野さん。いえ、最近顔出してなかったんで、挨拶周りを…」

「ふうん。それにしては、ずいぶん嬉しそうじゃない？」

隠そうとしながらも自然と笑みが零れる祥子を見て、橋野が言う。

「あはは。さすが橋野さん」

「なに、水上と結婚でもすんの？」

橋野の言葉に、祥子は驚いた顔をする。

「な、なに言ってるんですか！ 彼はまだ学生で……」

「婚姻ならいいじゃん。早いとこそういうのやっておかないと、あいつはどこ行かかわかんないんじゃないの？」

「……どういう意味ですか？」

意地悪気にそう言う橋野に、身構えて祥子が尋ねる。

「ほら、君だって心配してるんだろ？ “幼馴染みのさっちゃん”」

その言葉に、祥子は口を結ぶ。幸の存在は社内でも有名だ。というより、和人を知る人物は皆知っているも過言ではないかもしれない。それほどまでに、和人の出す話題は幸のことが多かった。

「い、意地が悪いですよ、橋野さん。気にしないようにしてるのに……」

「あはは、冗談だよ。まあ、あいつは押しが弱いから、さっちゃんとうなることもないだろうよ。それより、水上のことじゃないとなると、なんだい？」

自分から振っておいて、橋野が話題を変えて言った。祥子もそれに頷く。

「ああ……あの、違う出版社で申し訳ないんですけど、NAK出版からオファーがかかりまして……」

「ほう。社内で他の出版社の依頼を自慢するとは、いい度胸じゃないの」

「いやあ、ごめんなさい！」

失礼とわかりながらも祥子が言ったのは、嬉しさに他ならないが、

相手が橋野だからというものもある。

「まあいいよ、相手は大手だ。君も憧れの出版社なんでしょ？」

橋野の言葉に、祥子は思わず微笑む。新しく仕事の依頼がきたというその出版社は、祥子がいつか世話になりたいと思っていた、今までとは違う大手の出版社である。

「ごめんなさい！」

「いいって、いいって。君とは駆け出しの頃からの付き合いじゃない。じゃあ、これから一杯飲みに行こうか。奢るからさ」

「あ、ごめんなさい。今日は彼のところに行こうと思って……」

「あつそう。いいよ、いいよ」

申し訳なさそうな祥子に、いじけたように橋野が言う。しかし、すぐに笑って互いに見合った。

「ごめんなさい。また今度、飲みに連れて行ってください。失礼します」

祥子は時計を見ると、逃げるように出版社を出て行った。残された橋野は、苦笑して仕事に戻った。

授業を終えた和人は、夢遊病者のようにふらふらと校舎を出て行った。まるで機械のように、真っ直ぐに家路へと向かう。そんな和人は、門のところで声をかけられてハッとした。目の前には祥子がいる。

「大丈夫？」

驚いている和人に、祥子が言った。祥子の顔を見て、和人は途端にいつもの笑顔に戻った。

『びつくりした……どうしたの？　ずっと待ってたの？』

「ううん、さっき来たところ。そろそろ終わるかと思って。今、メールしようと思ってたところなの」

『そう。すれ違いにならなくてよかった』

二人は自然に歩き出す。

「そうね。それより、本当に大丈夫？　なんかさっき、暗い顔して

歩いてたわよ。具合でも悪い？」

『そんなことはないよ……大丈夫。それより、そっちはどうしたの？』

急に訪ねてきた祥子に、今度は和人が尋ねた。

「ああ、私？ 打ち合わせの帰りなの。和人との絵本のおかげもあって、新しい仕事が舞い込んできたんだ。ずっと仕事したいと思ってた出版社だから嬉しくて」

『そう、おめでとう。よかったね』

和人の言葉に、祥子は嬉しそうに笑う。

「ありがとう。じゃあ前祝いに、夕飯一緒に食べない？ 奢るわ」

『いいけど、前祝いなら僕が奢らなきゃ』

「いいわよ。学生さんに奢らせられますか。焼肉でも行かない？ お互い、スタミナつけなくちゃ」

祥子の誘いに和人は頷いて、二人はそのまま歩いていった。

店内で食事をしながら、祥子はそわそわと和人を見つめた。和人は首を傾げて、祥子の顔を覗き込む。

『……なに？』

和人が尋ねた。

「ううん。最近、ちょっと有名になってきちゃったから、二人でゆっくり食事も出来なかったじゃない？ だから嬉しくて……しみじみしちゃった」

二人は笑った。祥子はその途端、真剣な表情に戻った。和人は真顔になった祥子に、また首を傾げる。

『どうしたの？ 何か悩みことでも？』

「う、ううん。そんなんじゃないけど。ちょっと、実家のほうでいろいろあつて……」

『……どんなこと？』

「あ、うん。結婚はまだかって……」
思わぬ話題に、和人は少し驚いた。

『……結婚？』

「うん。まあ、今に始まったことじゃないの。前々からしつこく言われてて……それで、とうとうお見合いの話まで持ち上がったちゃってね」

『……するの？ お見合い』

驚きながら、和人が尋ねる。

「まさか。私には和人もいるし。恋人がいるからって言ったんだけど、じゃあその人との結婚はまだかなんて言われちゃって……」

話の途切れた祥子に、和人も目を泳がせていた。結婚を意識してこなかったわけではない。だが和人は事実上まだ学生であり、早い話とも思った。

「でも、和人はまだ学生じゃない？ だからね、その……婚約じゃないけど、してくれたら……うるさい両親も黙るっていうか……」

しどろもどろながらも、明らかに祥子からのプロポーズであった。いつもはキャリアウーマンのように隙のない身のこなしをする祥子が、今は真つ赤な顔をして不安と照れで複雑な表情をしている。

和人は女性からプロポーズをさせたことに申し訳なく思いながらも、幸のことを思い出していた。そしてゆつくりと、手を動かす。

『だけど……僕に障害があることを、祥子のご両親は理解してくれるだろうか……』

やがて、押し黙っていた和人がそう言った。祥子の表情は、みるみる悲しそうになる。

「だ、大丈夫よ。和人に障害があることは母親しか知らないけど、心配はしても反対はしなかった……父は厳しい人だけど、和人なら大丈夫。こんなに誠実な人はほかにいないもの」

その言葉を聞いて、和人は照れながらも少し困ったように俯いた。「ごめん。やっぱりこんな話……急だったよね」

和人の真意を知るかのように、祥子が申し訳なさそうに言った。和人は祥子を見つめる。

付き合った当初は、どの程度の付き合いになるかわからなかった。

ただ姉のように慕う和人に、弟のように面倒を見てくれた祥子。いつしか互いに意識し合い、自分の夢と一緒に見させてくれた祥子。和人にとって祥子は、愛しい人に違いはない。

だが、何度目を閉じて、浮かんでくるのは幸の姿だった。拭い去れない幸の顔が今も尚、和人を支配している。

『そんなことないよ……』

心と裏腹に、和人の返事はこうだった。祥子と幸は比べようがないのだ。事実、自分が幸と一緒にになれるはずがない。和人はそう考えていた。

「和人が……自分の障害を楯にするなんて思わなかった……」

やがて口にした祥子の言葉に、和人は衝撃を受けた。

以前、同じように幸に怒られたことがあった。障害を負っている自分が卑下してはいけないのだと。だから差別はなくならないのだと。

そんな気はなかったものの、和人は自らを差別していたことに気づき、今回は無意識ながらも、祥子に「NO」と言ってしまったのだと思い知らされていた。

『違う、そういう意味じゃない。無意識に……』

「もう今日は帰ろう。この話は、また今度ね……」

すっかり意気消沈した様子の祥子に、和人はもう何も言えなくなっていた。

「しばらく時間を置こう……」

店を出るなり祥子はそう言うのと、その場を去っていった。和人は固まったように、しばらくその場に立ちつくしていた。祥子に酷いことを言ったのだと反省しながらも、未だ消えない幸への想いに苛立ちと不安を覚える。

その時、和人の肩が叩かれた。突然、現実の世界へ引き戻されたように、和人は驚いて振り返ると、そこには見覚えのある女性の姿があった。幸と同じ音楽学校へ通い、以前和人と少しだけ付き合っていたことのある女性、山之内真由美である。優柔不断な和人と真

逆で、押しが強くサバサバした女性だ。別れてからは一度も会っていない。

「やっぱり、カズ。久しぶり！」

以前と変わらぬ態度で、真由美が言った。和人も笑顔に戻って会釈する。相変わらずの和人の作り笑顔に、真由美は苦笑した。

「そっちも相変わらずみたいね。こんなところでどうしたの？」

変わらず手話で話しかけてくれる真由美に、和人も少し苦笑して答える。

『ちよっと……食事です』

「そう。もし暇なら、ちよっとお茶でもしない？」

和人は真由美に申し出に乗ると、近くの喫茶店へと入っていった。

23、苦悩

「本当に久しぶりだね」

真由美の言葉に、和人は頷く。

「あ、絵本出したよね？ おめでとう。読んだわよ」

「ありがとう」

「幸とは会ってる？」

突然変わった話題に、和人は一瞬止まった。しかし、やがて頷く。

「……うん」

「そう。お見舞いに行こうと思ったんだけど、こっちも忙しくて、遠いしなかなか……修吾から聞いた時は、嘘じゃないかと思ってたけど……」

「……修吾さんは？」

「修吾？ あいつ、学校辞めたわ」

それを聞いて、和人は驚いた。

「どうして……」

「あの事故があつてから、人が変わったみたいになっちゃってね……学校もサボるし、家ともうまくいってなかったみたい。学校でもずいぶん揉めたいらしいけど、本人がもう行く気がないって……」

「それで修吾さん、今は？」

「さあ……両親もショックだったみたい。そりゃあそうよね、神童って言われてたバイオリニストが突然意欲失くしちゃったんだもん。でも噂によれば、どこか外国の音楽学校へ留学させられてるみたい。一からやり直すならいいだろうって」

真由美の話聞いて、和人は頷いた。

「そう。知らなかった……」

和人は手話で呟いた。幸から去っていった修吾も、傷付いていないわけがなかったのだ。以前、修吾を責め立てた自分があった。和人は少し、罪悪感にかられていた。

「それはそうと、カズは幸とはどうなの。進展は？」

突然、真由美がまた話題を変えて尋ねる。真由美は和人の幸への恋心を知る人物で、それが二人の別れた原因であった。和人はその質問に苦笑する。

「なんだ、まだ告白してないの？」

少しからかうように真由美が言う。和人は尚も苦笑すると、首を振った。

『出来ないよ……僕と彼女は、互いに会話もままならないし……』

「それが何よ。好きなら突っ走ればいいじゃない」

真由美らしい答えに、和人は小さな溜息をついた。

『僕が彼女を幸せにしてあげられることは出来ないよ……そんな簡単なことじゃない。まだ学生だし、将来だって仕事が安定するとは思えないから。それに……怖いんだ。幼馴染みの関係が崩れるのは……』

和人の言葉に、真由美は急に怒ったような顔をした。

「逃げよ、それは。障害があるから臆病なのはわかるけど、それじゃあちつとも前へ進まないわよ。好きなら当たって碎ければいいじゃない。誰だって、自信も将来もわかり切ってないわ。何度振られたっていいじゃない。それとも何？ 告白したら、今までの思い出さえも消えちゃうってことなの？」

真由美の言葉の一つ一つが、和人の胸に突き刺さる。和人自身も頭ではわかってのことだった。真由美の言葉に、反論の言葉一つも浮かばない。

「ああ、もう！ 少しは大人になってるのかと思ったけど、相変わらずね。ウジウジしてたら、いつか後悔するわよ。先のことなんてね、きつと神様にだってわからないわよ」

和人は内心落ち込んでいた。一日で二人の女性を怒らせた自分に腹が立つ。そしてもっともな真由美の言葉が、和人の心を沈ませた。「言い過ぎたかな。でも、私がずっと思ってきたことよ。言葉では伝わりにくいんだから、態度で示さなきゃなんにも伝わらないわ。」

一方的にしゃべって悪かったわね……って、前からか。それは私も反省してる」

苦笑しながらも、和人は首を振る。二人は喫茶店を出ていった。

「じゃあ、また。頑張つてね。仕事も恋も」

「そっちも……」

「うん。今度、私も幸の家へ行つてみる。ずっと気になってたから」
和人が頷くと、真由美は手を振り去つていった。

きついことを言われた感覚もあるが、不思議と心が軽くなったような、後押しをされたような気持ちになる。和人は気を取り直して、家へと帰っていった。

数日後。和人は学校から家に帰るなり、ベッドに寝そべった。ふとズボンの後部ポケットに違和感を覚え、それを取り出す。数本の鍵の束がある。中には、祥子から預かっている祥子の部屋の鍵もある。和人はじつとそれを見つめた。

祥子にしばらく時間を置きたいと切り出されてからいろいろ考えてみたが、未だ自分がどうしたいのか答えが見つからない。ただ、祥子の言葉だけが突き刺さっている。

「和人が自分の障害を楯にするなんて思わなかった」

そう言った祥子の言葉を思い出し、和人はハッと起き上がった。

（そうだ……僕は今まで何をしてきたのだろう。僕には両親がいて、幼馴染みがいて、恋人もいて、友達もいて、勉強出来る環境にも、仕事が出来る環境にもある。みんなが僕を守ってくれていたのに、どうして卑屈になることがあるんだろう……祥子が言う通り、僕は自分の障害に甘えていた部分があるんじゃないだろうか）

和人はふと起き上がると、隣の家の一室に電気が灯っているのに気がついた。以前の幸の部屋である。何をしているのか……そんなことも考えられず、和人は頭を抱えた。

幸への想いを恋だと認めても、幸の人生を背負えるほどの度量があるとは自分でも思えない。そしてなにより自分が恋心を抱くこと

で、唯一繋がれた幼馴染みの絆さえも崩れ去るかもしれないことは、和人自身耐えられないと思った。

だが、もはや祥子のことを考えると、もやがかかったように自分の気持ちが変わらない。幸への想いが恋ならば、それとは少し違うと感じる祥子への想いは、一体何だというのだろう。愛していないわけではないのに、和人は説明のつけられない想いに縛られていた。唯一わかつていることは、見合いをするという祥子を残念に思いながらも、自分と祥子の結婚については、今はまだ考えられないことである。

（祥子に会おう……）

やがて出た答えに、和人は支度を始めた。自分の心すらわからない。だが今、祥子に会って確かめたいことがあった。すでに日が落ちた街を、和人はもう一度出ていった。

祥子は自分の部屋で、孤独を感じていた。目の前には見合い相手の写真が置かれている。顔も悪くない。職業も安定している。見合いをすれば知らない相手でも、そのうち愛するようになるのだろうか。そんな疑問が渦巻いている。

その時、祥子の携帯電話が鳴った。メールではなく着信だ。古くから世話になっっている出版社の橋野の名前が、液晶画面に浮かぶ。

「はい、森下です」

仕事の口調で、祥子は電話に出た。

『あ、祥子ちゃん？ 遅くにごめんね、橋野ですけど』

「はい。どうしたんですか？」

『いや、この間ちょっと顔出して以来、ちっとも来ないからさ。僕と飲む約束、忘れられちゃ困るからね。催促の電話だよ。今度飲みに行こうよ』

橋野が、冗談口調で軽く言う。

「あれからそんなに経ってないじゃないですか。忘れませんよ。じゃあ……今日じゃ駄目ですか？」

祥子が言った。さすがに橋野も、一瞬言葉を失ったようだ。今日といつても、日付が変わるまであと数時間しかない。

『今から?』

「あ、ごめんなさい。無茶言つて」

『いや、なに? 水上と喧嘩でもした?』

そんな橋野の言葉に、祥子は一気にぐつときてしまった。涙が出そうになる。

思えば橋野は、祥子の駆け出しの頃から面倒を見てくれているよき理解者であり、和人のバイトの先輩でもあるため、人より多く自分を知られている。

『あはは。黙つてゐるってことは凶星か。いいよ、軽く飲みに行こうか』

軽いノリで続けた橋野に、祥子は頷いた。孤独に吞み込まれそうで、誰かと一緒にいたかった。

祥子は急いで支度をする、夜の街へと消えていった。

祥子は、何度か橋野に連れて来られた行きつけの居酒屋へと足を運んだ。すでに店の中では、橋野がビールを飲んでいる。そして祥子を見つけると、グラスを持ち上げて招いた。

「いらつしゃい。ビールでいい?」

橋野の問いかけに祥子が頷くと、素早くビールが運ばれる。

「じゃあとりあえず、祥子ちゃんの昇進に乾杯」

「あはは。昇進ですかね……」

「そりゃあそうさ。君も憧れてた出版社だろ。それに採用されたんだ。もっと喜びなよ」

橋野の言葉に、祥子は頷く。

「なんだよ、ちつとも嬉しそうじゃないな。じゃあ本題に入るか。水上とどうなったつて?」

サバサバと尋ねる橋野に、祥子は苦笑して口を開いた。

「しばらく、冷却期間を置こうと思って……」

それを聞いて、橋野は少し驚いた。和人と祥子の関係はよく知っているつもりだ。いつ見ても仲が良く、喧嘩をするようには見えな

い。
「へえ。マジ喧嘩なんて、初めてじゃないの？ 何があつたの？」

「何ってほどじゃないですけど……」

「嘘つけ。いつも喧嘩のケの字もないくせに」

祥子は微笑むと、静かに口を開いた。

「橋野さん……和人は本当に私のこと、好きでいてくれているかわかりますか？」

「……え？」

「和人はいつも一步引いていて、付き合うきっかけになつたのも、遠回しに私から告白したからなんです……それだけじゃない。手を繋ぐのもキスするのも、いつも私からだつた。小さな喧嘩をしても和人ばかりに謝らせて……それが本当に、恋人って言えるのかな……」

祥子の言葉に、橋野は思ったよりも祥子が落ち込んでいることに気がついた。

橋野は優しく微笑むと、祥子を見つめる。

「でも、あいつが一步引いてるのは、障害があるからだろ。あいつ自体の性格なんだろうし、ずいぶん傷付いてきたみたいだし、そんなことは今更だろ。そんなに落ち込むことはないんじゃないのかな……」

「……」

押し黙って、祥子は和人の言葉を思い出した。祥子が一番悲しかったのは、和人が自分との婚約を否定も肯定もしなかったことではない。自分の障害を楯に逃げたからだ。

（考えてみれば小さなことかもしれない。だけど、どうしてこんなに悲しいんだろう。どうしてこんなに腹立たしいんだろう。和人が障害を抱えているのは事実。だから仕方のないこと？ 私は和人の障害を忘れられるほど、身近にいたつもりだつた。だけど和人は違

う。きっと一生、私と交わることはないんだ……)

祥子は何かの終わりを悟っていた。すうつと熱が引くように、祥子の中で何かが冷めていくのを感じた。

24、激励

和人は夜の街を、祥子の部屋目がけてまっしぐらに歩いていた。やがて着いた祥子の部屋は真つ暗で、いくら呼び鈴を鳴らしても応答がない。和人はいつものように、持っていた祥子の部屋の鍵をおうと、ポケットから鍵を取り出した。しかし、何かの感情が和人を止めた。

中へ入らずに、和人はそのまま部屋の前へ落ち着くと、その場から見える近所の景色をただ呆然と眺めていた。

その頃幸は、未だ自分の部屋でピアノに向かっていた。ピアノに触れてから、食事もなくにせずにピアノを弾き続けている。目は見えなくとも、それは水を得た魚のように、心の底から喜びが溢れ出す。

その時、幸の部屋のドアが開いた。幸はピアノの手を止め、振り向く。

「お母さん？」

幸が呼びかける。

「ええ、お客様よ。真由美ちゃんよ」

幸の母がそう言っ、部屋を去っていく。入れ替わりに、幸に心配が近づいてきた。

「幸！ 久しぶりね」

そう言っ幸の手を取ったのは、同級生の真由美であつた。懐かしい声が幸に届く。

「……真由美？」

「そうよ。ごめんね、なかなかお見舞いに来れなくて……でもよかった。ちゃんとピアノやってるんだね。腕は衰えてないじゃない」
真由美の言葉に、幸は顔を曇らせる。

「ありがと……でもやっぱり、前とは違うから……」

幸が言った。ピアノを弾く楽しさは思い出しても、やはり前のようにはいかない。何度も間違え、何度も失敗しているのだ。しかも譜面が見えないとあっては、新しい曲を覚えるのもままならない。そんな暗い顔をしている幸に、真由美は変わらぬ笑顔に向けている。

「この間、カズに会ったのよ」

突然の真由美の言葉に、幸は驚いた。

「……和人と？」

「うん。街角で偶然。ちょっとお茶したけど、あんまり変わってないみたいね」

「さあ……」

幸は静かに笑った。思えば和人と真由美は、短いながらも恋人同士だった時代がある。互いの変化を感じるほど、二人は密接な関係にあったはずだ。そう考えると、幸にとって和人は遠い存在だと思いが知らされる。

「さあって、幼馴染みでしょ？」

「だからって、和人のことなんでも知ってるわけないでしょ。避けてた時期もあったし……真由美のほうが、知ってる部分も多いんじゃないの？」

少し苛立って幸が言った。なぜ苛立っているのかはわからない。ただ胸がムカムカする。

「さあね。でも私は、一度もカズのことを振り向かせることは出来なかったな……」

「なに言ってるのよ。付き合ってたくせに」

苦笑した幸に、真由美は真面目な顔で幸を見つめる。

「……まだわからないの？ 気づいてあげなよ、カズの気持ち」

突然そう言った真由美に、幸は首を傾げた。

「え……？」

「見ててイライラするのよね。カズは押しが弱いし、幸は鈍感だし……この際だからハッキリ言っけど、カズは幸に特別な感情を持つ

てるのよ？」

真由美が言った。幸は一瞬止まる。

「特別な……感情って……」

さすがの幸も、それが何なのかは気づいた。だが和人のことを思い出せば、そんなことは有り得ないと思った。なぜなら和人は、真由美や祥子と付き合ったりしている。そんな和人が、自分へ特別な想いがあるなどは、夢にも思っていなかった。

「なに言ってるのよ。特別な感情だなんて……」

苦笑している幸に、真由美は小さく溜息をついて口を開く。

「本当に気づいてなかったんだ……それとも気づかないようにしてたの？ どっちにしても、カズの幸に対する執着心は並みじゃないわよ。それが恋愛感情じゃなくて、幼馴染みという枠に捉われていてもね」

「真由美。言ってる意味がわからないよ……」

「私がカズと別れたのは、カズの気持ちに気づいたからよ。どうやっても、カズの中で幸より一番にはなれないって思ったの。だから別れたの」

幸は押し黙った。やがて静かに口を開く。

「仮に、和人の気持ちに私に向いていたとしても、だから何よ……」

「幸……」

「大切に思ってるのは当たり前じゃない。私だって、和人のことは弟みたいに大切に思ってる。だから何度も傷付けてきたけど……だけど、今更そんなこと言って、意地悪のつもり？ それとも親切のつもり？ 私はこの通り、目が見えないんだよ。和人は耳が聞こえない。そんな私たちが、どうすればいいのよ……」

幸の言葉に、真由美は複雑な表情をした。確かに幸が言っていることも、先日和人が言っていたことももっともだった。自分が言うような勢いではなく、二人が慎重になるのは当たり前だと、真由美にもわかっていた。だが二人の言い分は、真由美にとってまどろっこしく思える。

「どっちでもあるし、どっちでもないかな……幸、手術しなよ。手術すれば、また見えるようになるんでしょ？」

今、幸の目が見えたならば、心から心配そうに自分を見つめている真由美を見ることが出来ただろう。だが今の幸には、苛立ちと悲しみしかない。幸は首を振った。

「みんなそう言うけど、怖い。手術とか、血を見るのとか、痛いとか辛いのか……それに、見えてもほとんど見えないみたいだから……」

「だけど、今はまったく見えないんでしょ？ 手術すれば、光を取り戻せるんだよ。見えないって言ったって、私がここにいることとか、鍵盤の黒とか白とか、漠然と見えるだけで違うんじゃないの？」
「怖いんだってば！ 僅かに見えるのがなんだって言うのよ。漠然と見えたって、譜面は見えない。細かい作業は出来ない。人の判別だって出来るかわからないのよ！ 怖い思いをしてまで、する価値があるの？」

そう言った幸に、真由美は言葉を失った。これがあの幸なのだろうか。将来を嘱望され、恋人の修吾と幸せの絶頂を送っていた矢先に起こった忌まわしい事故。それが幸の人生を狂わせ、ここまで恐怖に怯え、卑屈で後ろ向きになってしまったのか。真由美は悲しくなった。

「……ごめんね。励ますつもりで、ここに来たんだけど……」
やがて真由美がそう言った。幸も押し黙る。

「だけど、幸。私はあんたを、ピアノリストとして尊敬もしてたし、かつての恋人が好きな女性としても、一目を置いてるつもり。べつに幸とカズを無理矢理くっつけたいわげじゃないわ。だけど、いい加減気づいてやって。カズの絵本は読んだでしょう？」

真由美の言葉に、幸は意味がわからずに顔を上げた。

「え……うつん」

「なんだ、読んでないの……そっか。じゃあ一度は読んであげなよ。テープ図書も出てるって聞いたけど、あれは幸のことを考えてのこ

とじゃないの？ それに、カズの晴れ舞台じゃない」

「……うん」

そういえば、和人からテープ図書まで受け取っていたが、なぜかそれを聞く気にもなれなかった。それは、和人の才能に嫉妬していた部分もあるだろう。自暴自棄になった幸の心に、当時はそこまでの余裕すらなかったのである。

「ごめんね、今日は。私も相変わらず、何が言いたいかわからずに突っ走っちゃって……今日のことは忘れてよ。今度、ゆっくり遊びにくるから」

真由美は部屋のドアを開けた。幸も我に返って、俯く。

「うっん、こっちこそごめんね、真由美……ありがとう……」

そう言った幸に、真由美は背を向けたまま微笑んだ。

「幸……悔しいよ。こんなにも愛されてるあんたが、そんな不幸そうな顔してるの……」

「真由美？」

「またね……」

真由美はそう言うのと、幸を残して去っていった。

幸には、真由美の言った最後の言葉が理解出来なかった。唯一わかったことといえば、真由美はサバサバした性格ながらも、未だに和人の思いを少なからず引きずっているのだという、漠然とした思いだけである。

真由美の言葉も、和人の想いも、幸にはまだ届いてはいなかった。

数時間後。食事や風呂を済ませた幸は、一階の寝室に戻るとベッドに座った。そのまま寝ようと思ったが、ふと真由美の言葉が気になった。幸は静かに立ち上がると、手探りで棚の上を探る。

少しして、オーディオデッキに手が触れた。使い慣れたデッキだけあり、ボタン配列まで容易に思い出せる。幸は左からボタンを数え、再生ボタンと思われるスイッチを押した。

CDが回り始めた音が聞こえる。やがて、音楽とともに声が流れ

た。

「テープ図書。絵本、さっちゃんと虹の美空。作、水上和人……」
ゆっくりとそう読まれるCDの声に、幸の耳は釘付けとなった。

以前、母親が気を利かせて、このCDを流そうとしてくれた。その時は聞く気になれず、すぐに止めてしまい、和人が出版したという絵本の題名すら知らなかった。その時のまま放置されたオーディオデッキから、初めて聞く内容が流れる。

幸は震える手で、再生ボタンの左隣のボタンを押した。するとCDが最初に戻る。幸はもう一度、再生ボタンを押した。

「テープ図書。絵本、さっちゃんと虹の美空——」
間違いなく、題名が自分の愛称を謳っている。

「和人……」

やがて、絵本の内容が朗読され始めた。幸はオーディオデッキの前で固まったように、そのテープ図書に聞き入っていた。

絵本の内容は、“さっちゃん”という女の子が、数々の困難に立ち向かいながら冒険を続け、やがて美しい虹の国に辿り着くという内容だった。そのラストは、振り向いた“さっちゃん”が見る、今まで歩いてきた険しい道を包む、美しい空の絵で締めくくられる。

どんな逆境にも立ち向かってほしいという、幸への願いが込められると同時に、夢に向かってまっしぐらだった幸そのものであり、和人自身が持つ強さへの憧れ、諦めなければきっと叶う夢が織り込められていた。

幸はそのまま、涙を流していた。真由美が言っていた和人が抱いている自分への想いを、思い知らされた気がした。

そして幸も、一気に和人への想いが膨れ上がる。今までの思い出が溢れ出す。

思えば和人を、何度も傷付けてきた。疎ましく思えた時代もあった。だが何があっても、和人だけは変わらず自分を見つめてくれていた。それが恋心というものに当てはめるのには、少し違うだろう。もっと大きな和人の想いに包まれていたのだと、幸は思い知らされ

て
い
た。

25、本心

和人は祥子の部屋の前で、祥子の帰りを待ち続けていた。時計を見ると、もう深夜零時を回っている。もうすぐ終電もなくなるが、和人は帰る気になれなかった。ふと携帯電話を取り出す。だが、思い直してすぐにしまい込んだ。和人はただその場に立ちつくしていた。

「大丈夫？」

二軒目の居酒屋を出て、橋野が祥子に言った。互いに少し酔っている程度だ。

「もう終電なくなるから帰ろう。送ってくよ」

橋野が言った。それを聞いて、祥子は小さく笑う。

「橋野さん。私って、魅力ないですかね……」

祥子の言葉に、橋野は苦笑した。

「馬鹿だなあ。ここにるのが祥子ちゃんじゃなかったら、僕はとつくに口説き落として、ホテルでもどこでも連れ込んでさ……人が折角、理性を抑えてまで紳士を装ってるんだ。カッコよく決めさせてくれよ」

「わからないな、その理屈……こっちは傷心なんだから、いくらでも落とせるのに……」

酔った勢いの祥子に、更に橋野は苦笑する。

「本気で好きな子が傷心の時につけ込むなんて、僕には出来ないよ……ほら帰ろう。僕の気が変わる前にね」

半ば強引に、橋野は祥子を連れて電車へと乗り込んだ。橋野の告白を聞いた後でも、祥子は未だ、晴れない顔をしている。

「水上と付き合う前は、よく一緒に飲んでこうして送ったものだけど、やっぱり人間、友情と愛情なら愛情を取るんだよね……」

祥子のマンションに着き、部屋に向かうエレベーターの中で、橋

野が言った。それを聞いて、祥子が苦笑する。

「そうかもしれないね……でも私は、愛情すら取れてなかったのかも。仕事も軌道に乗ってきて、あっちは学生。和人としょっちゅう会ってたってわけでもないですもん……」

「そっか。あいつ、あれでまだ学生だもん……」

橋野はそう言って、小さく微笑んだ。和人に抱く祥子の不満は、ある意味仕方のないことだと思った。和人はまだ大人とはいい切れないのだ。

エレベーターから降り、祥子の部屋に向かう二人は、部屋の前に座り込む和人を見つけた。

「和人……」

祥子はそう言つと、和人に駆け寄つた。和人もそれに気づいて、祥子に微笑む。

『おかえり……橋野さんと飲んでたの?』

和人の質問に、祥子は何も言わなかった。

「……じゃあ、僕は帰るよ」

そこに、橋野が声をかけた。祥子は頭を下げる。

「あ、ありがとうございます……」

「いいよ。それより……宣戦布告していい?」

「え?」

「水上。おまえが本気でいかなければ、僕が祥子ちゃんをもらうかな」

挑発するように、手話と声で橋野が言った。和人は驚き、目を見開いて立ち上がる。

橋野が何を言ったのか、一瞬、理解出来なかった。橋野は和人にとって、尊敬出来る仕事の先輩だ。だが今、向けられる橋野の目は恐ろしいまでに鋭く、敵意のようなものを感じる。

そんな橋野を、和人は拳を握り締めながら、唇を結んで見つめた。なぜ普段は温厚な橋野が、挑発するように言うのかも理解出来ない。なによりも、何も反論出来ない自分が腹立たしい。

そうかと思っているうちに、橋野はいつものように笑った。

「まあ、今言ったことは嘘じゃないけど、二人の答えが出るまで待つよ。水上……きちんと祥子ちゃんと話し合えよ。僕は初めて見たよ。笑ってるだけじゃない、おまえの顔……おまえ、今までプライドも感情も、全部押し込めて生きてきたんだろ。それを恋人の前でも続けてたら、信賴関係なんて崩れるのは当たり前だろ」

和人は俯いた。凶星だった。腹が立つても、悲しくても楽しくても、人前での感情は極力殺してきた気がする。祥子の前でさえも、すべてをさらけ出したことがあったのかは疑問だ。和人のすべてを知っているのは、両親と幼い頃から一緒にいた、幸くらいであろう。「じゃあ、おやすみ。あとは二人でどうぞ」

橋野はそう言つと、足早に去つていった。残された和人と祥子は互いに気まずさを持ち合わせながらも、静かに見つめ合つた。

「どうしたの？ メールしてくればよかったのに……それに、鍵は？ 忘れたの？」

やがて、祥子がそう尋ねた。

『樂せず、君を待っていたかつたんだ……』

和人が答える。

「……どうして？」

『……試練、みたいなものかな』

その言葉に苦笑して、祥子は部屋のドアを開けた。

「入って」

そう言つ祥子に、和人は玄関まで入るものの、部屋に上がろうとしない。

「どうしたの？」

『今日、ここへ来たのは……確かめに来たんだ……』

和人が、ゆつくりとそう言つた。祥子は察して、少し悲しげな目を向けている。

「そつ……それで、何か答えは出たの？」

大人を装つて祥子が言う。本当は言いたくなかつた言葉だった。

和人はそれを感じながらも、静かに頷く。

『ここ数日、ずっと考えてきた……祥子が怒った理由。過去にも同じようなことで人を苛立たせたこともあった。橋野さんにさっき言われたことも、全部図星だ。僕は感情を表に出さないようにして、人から傷付けられるのを……自分だけを守っていたんだと思う』

ゆつくりとそう話す和人に、祥子は黙って見つめている。

『だから、互いに疲れるのは当然だ。今日ここへ来たのは、僕の気持ちがあるのかを確かめたかったんだ……僕は、君を愛していないわけじゃない。だけど、僕が僕らしくいられる場所があるとすれば、それは君じゃないんだ……』

言うのが辛くて、和人の手は何度も止まった。だが祥子は冷静に和人を見つめ、先の言葉を求めている。

「よくわかった……うつん、わかってた。わからない振りをしていたのかもね……」

祥子が言った。

『僕もだよ。わからない振りをしてた。僕は……さっちゃんのこと忘れられない』

苦しげな表情ながらも、正直に和人が言った。変わらない表情の祥子の目から、涙だけが伝う。和人もまた涙を流していた。しかし、思い直してすぐに拭う。

『愛とか恋とか、そういう言葉で表せられない……だけど、僕の中にはいつもさっちゃんがいた。挫けそうな時も辛い時も、さっちゃんとの思い出が僕を支えてた。さっき祥子を待っている時も、思い出すのはさっちゃんのことばかりだ……こんな気持ちのまま、君と婚約なんて出来るわけがない。本当に、ごめんなさい……』

祥子は涙を拭くと、和人の頬を思いきり叩いた。そして次の瞬間、和人を力一杯に抱きしめる。

「許さない。最後の最後で、そんな本音見せるなんて……」

和人を間近で見つめながら、和人から離れて祥子が言った。和人は辛そうな顔をして俯く。

「でも嬉しい……おかしいよね、こんな気持ち。だけど、私も馬鹿だ……私は鈍感な和人と違って、和人の気持ちには気づいてたのよ。もう、ずっと前から……」

『……ごめん』

もう一度、和人は謝った。祥子は悲しげに微笑む。

「いいわよ、フラれてあげる……だけど、もうこんなことはしないで。後悔を恐れないで。私の涙も怒りも、無駄にしたら許さないんだから……」

その言葉に、和人は深く頷いた。

『わかってるよ……僕は祥子を不幸にしまっただけで、後悔するのはここで終わりにする。もう恐れない。やる前から諦めたりしない』

和人が言った。その真剣な眼差しに、祥子は微笑む。祥子の目から、不思議と涙が止まった。

「馬鹿ね。私は不幸になんかなくてないわよ。自惚れないで」

二人は互いに苦笑した。そして祥子が口を開く。

「もう行つて。今度はお互い、仕事で大成したら会いましょう。もちろん今まで通りというか、新しい私たちの良い関係でね」

『うん。ありがとう……』

和人は何度も頷くと、背を向けた。そしてふと思ひ出すと、ポケットから一つの鍵を取り出す。すでに鍵の束から外されたその鍵は、この祥子の部屋の鍵である。和人はその鍵を、祥子に渡した。

「ああ、ありがとう。ここにあるあなたの物は、暇を見つけて実家に送っておくわ」

祥子の言葉に頷くと、和人は静かに手を差し出した。祥子も自然にその手を取り、二人は暖かな握手を交わす。

『ありがとう……僕は恋愛だけじゃなく、仕事の面でも君に支えられてた。それは本当だよ。その鍵一つで、僕は人と同じような恋愛を、初めて味わった気がするんだ』

静かに和人がそう言った。祥子から預かった部屋の合鍵は、和

が初めて普通の恋愛を感じた一つだった。

いつだったか、思春期の頃は差別意識を肌で感じていた。障害を持つている自分が普通に恋愛を出来るとは、和人自身が諦めていた。そんな自らの意識を変えさせてくれたのが、祥子だったのだ。

祥子も頷いて、口を開く。

「それは私もよ。いろいろ不安はあったけど、和人と付き合えてよかった」

『僕もだよ』

名残惜しそうに、二人はもう一度握手をした。そして意を決して和人は祥子に背を向け、静かに去っていった。

互いに一人になった瞬間、二人は同時に涙を流した。だがもはや、二人の人生が変わることはないだろう……。

和人はそのまま、朝を待つ夜の街へと消えていった。

次の日。和人は家に帰ることなく、そのまま学校に登校していた。祥子と別れた喪失感の中に、どこか清々しさすら感じている。

（さっちゃん。君に会いたい……）

何を考えていても、思い出すのはもはや幸のことしかなかった。幸を想う気持ちが恋なのかは、未だにわからない。だが幸を失いたくないと思った。支えになりたい——。そんな想いが、和人自身を支える。

だが今すぐ幸に会っても、祥子と付き合っていた時と同じだと思っただ。本質的には何も変わっていない自分には、幸に告白し、そのまま付き合う度量などないことを、和人自身がよくわかっている。和人は、今こそ変わらなければならぬのだ。

和人はその日、学校を終えると、その足で母校である聾学校へと向かっていった。

26、告白

数週間後。幸はその日も、ピアノに向かっていた。大分慣れてきたようで、失敗も少なくなってきた。そして思い出せる曲を手当たり次第に弾く。やがてレパートリーが少なくなったところで、幸は一つの曲を思い出して弾き始めた。先日、和人が弾いて聞かせた“キラキラ星”である。

（小さい頃は、よく和人と一緒に弾いてたな、この曲。和人が初めて弾いた曲……和人にもまた聞かせてあげたいな。それが無理でも、せめて会いたい……今までのことを謝りたい。ありがとって言いたい。和人に会いたいよ……）

幸は手を止めて俯いた。最近、思い出すのは和人の顔ばかりだ。

先日、初めて和人の絵本の内容を知った幸は、自惚れでなく、自分の存在が和人にとって重要な役割を担っていたことを思い知らされていた。あれから何度会いたいと思ったか知れない。こうしてまたピアノを弾き始めたのも、和人のおかげだ。せめて会って、お礼が言いたかった。

しかしあの日から、和人は現れない。もしかしたら、もう会わないと言った自分の言葉をまだ真に受けているかもしれないと思うと、気が気でなかった。だが会って何を話したらいいのかは、考えても答えが出ない。

その時、部屋のドアが開いたのがわかった。

「お母さん？」

とっさに幸が呼びかける。父は仕事のため、入ってくるのは母親しかない。しかし、幸の呼びかけに返事をしない。

「……さっ、ちゃん……」

その時、そんな声が聞こえた。喉に力を入れてやっと出たような、少年のような声だった。幸は恐る恐る、ドアのほうへと近づいていく。

「……和人なの？」

幸は直感でそう言った。

差し出した幸の手を握る、暖かい手がある。まさしく和人であった。

「ん……」

頷きながらそう言う和人に、幸は驚きを隠せない。

「どうして、和人……」

そう言う幸の手を、和人は掴んで離さない。そして和人は、静かに口を開いた。

「……僕は、さっちゃんのことを、好きです……」

静かに、和人がそう言った。幸の目から涙が溢れる。だが、何を言ったらいいのかわからない。

和人は和人で不安の中にいた。苦しみに似たような、息苦しい不安だ。和人が言葉を話したのは、聴覚障害が治ったわけではない。ここ数週間、母校の施設で声を出す訓練をしていたのだ。だが、果たして幸に言葉がうまく伝わっているのだろうか、そして幸はどんな言葉を返してくるのだろうか。そう考えると、和人の顔はみるみる強張ってゆく。

それに反して、幸は微笑みながら何度も頷き、そして和人を抱きしめた。和人はそれに驚きながらも、この上ない安らぎを感じていた。まるで夢のように、幸が腕の中にいる。

やがて幸は和人から離れ、手話と同時に口を開いた。

「私も、和人のことが、好きです」

思わぬ幸の言葉に、和人は顔を綻ばせずにはいらなかった。嬉しさを隠せずに、幸の手を取る。

『本当に……？』

半信半疑で、幸に手話をする。幸はその手話に触れ、意味を理解して頷いた。

「嘘なんて言わないよ。ずっと和人のことを考えてた。そして今、わかった……和人が私にとって、どんなに大切な人なのかって……」

和人は感無量で微笑んだ。幸も優しい笑みを浮かべている。ピアノの傍らには、和人の絵本が置かれている。和人はそれを見て、自分の想いが幸に届いたのだと確信した。

その日から、二人の関係は幼馴染みではなく、晴れて恋人へと変わった。二人が出会ってから、二十一年目の春のことだった。

数年後――。

和人は無事に大学を卒業した。ここ一年は出版社でのアルバイトも忙しくなっており、また学校の近くで一人暮らしを始めている。そのため、幸と会えるのは実家に帰る週末くらいだったが、二人の愛は変わらず育まれていた。

卒業式のその日、同級生たちが名残惜しそうに大学構内に入り浸っている中、和人は卒業証書を持ち、足早に大学を後にした。

そして向かった先は――病院だ。和人は入院病棟の一室へと、足早に歩いていく。一つの病室に入り、また一つのベッドを覗くと、反応してこちらを見る女性がいた。幸である。その様子を見て、たちまち和人の表情が嬉しそうに変わる。

「……見えてるの？」

和人の手話での問いかけに、幸が笑って頷く。

「おかえり」

見えているからこそ言えるその台詞に、和人も安堵の顔を見せて、思わず幸を抱きしめた。

「よかった……」

やがて離れた和人がそう言うと、幸も微笑む。

「もう少ししたら目も慣れてきて、今より見えるようになるって。でも、今でも思ったより見えてよかった。それでも、やっぱり手

話は見えづらいから、触手話の生活が続くと思うけど……」

幸が言った。触手話とは、視聴覚障害者の会話の手段の一つで、聞き手の手の中で手話をするような会話方法である。それは、視覚障害者である幸と、聴覚障害者である和人の、主な会話手段であった。

和人は優しく微笑むと、もらって来たばかりの卒業証書を差し出した。

「うん。無事卒業、おめでとう」

『ありがとう。君も無事に目が見えるようになって、おめでとう』
「ありがとう」

二人は手を取り合ったまま、しばらく幸せを噛み締めていた。ここ数年で、二人の生活はがらりと変わっていた。両想いになったからこそ、二人にとって障害も大きい。互いに空き時間を利用して、福祉施設で触手話やパソコン会話について勉強した。

和人は長年拒否してきた、声を出してしゃべる訓練も始めた。幸に告白した時、少し訓練した方法だ。だがそれは、あまり上達していない。しかし昔よりは確実に、和人の声は幸に届いていた。

「さつき、真由美が来てくれたんだ。そこのお花いただいちゃった」
そう言って、幸が棚の上の花瓶を指差す。

『そう。元気だった？』

「うん、相変わらず。今は実家の音楽教室で、ちゃんと先生やってるみたい」

真由美は幸の大学時代の友人だが、幸の目が見えなくなっただけで、たびたび見舞ってくれた一人だ。

幸はしばらく休学していたが、和人の勧めもあり、しばらくして学校に復帰した。そして去年、無事に卒業している。卒業してからは、幸は施設で子供たちにピアノを教えていた。

中には幸と同じように、目の見えない子供もいる。やがて幸は、障害を持つ子供たちを通して、自分の目が手術すれば光を取り戻せるという希望に、改めて気づいた。そして今、やっとの思いで決意

を固めて手術を終え、やっと今日に包帯が取れたのである。それには和人も、感じるよりも大きい安堵感を得ていた。

『退院は、いつ頃？』

和人が尋ねる。

「様子を見ながらだけど、早ければ週末に出られるかもって」

『そう、よかった』

微笑みかける和人に、幸も静かに微笑み、口を開く。

「ありがとう、和人。手術するのがずっと怖かったけど、こうして決心出来たのは、和人がついてくれるって安心出来たからよ。こうして無事に和人の顔が見られて、本当に嬉しい。手術してよかった。ありがとう……」

幸の言葉に和人も頷き、微笑んだ。

『僕も嬉しいよ。また少し、君に近づけた気がする。僕は君と付き合えて、ずいぶん前向きになれた気がするよ』

「それは私もだよ」

『さっちゃん……』

久しぶりに、和人が指文字でそう表した。普段は“君”という言葉で省略している和人が、幸を愛称で呼ぶのは、決まって大事なことを言いたい時だと、幸はわかっている。幸も一瞬、息を飲んだ。

『僕は君より年下だし、障害も持ってる。だけど、君を好きな気持ち、誰にも負けないよ』

「和人……」

『僕には指輪をくれるお金もないし、これから食べていけるだけの保障もない……不安材料ばかりの僕だけど、僕はこれからも、誰よりも君のそばにいたい。だから……』

和人は呼吸を整えて、幸の顔を見つめた。幸もその先の言葉がわかっていながらも、期待に次の言葉を待っている。

『だから、僕と……』

幸も思わず身を乗り出し、自分の手の中で動く和人の手話を、固唾を吞んで待っていた。和人も幸が待つてくれていることを知らない

がらも、なかなか思うように口にすることが出来ない。

和人は深呼吸をすると、意を決して幸を見つめる。

『僕と、結婚してくれませんか？』

やっとの思いで、和人がそう言った。幸は待ちきれなかったばかりに、和人に抱きつく。

「和人、嬉しい。本当に嬉しい……」

和人は幸を離すと、何と言ったのかと尋ねる。幸も微笑んで、和人の顔を見て言い直した。

「ありがとう。嬉しい」

幸の言葉を聞いて安堵の笑みを浮かべ、和人は幸をもう一度抱きしめた。

（愛してる……）

二人の心が、共鳴するように高鳴る。互いに明るい未来が見えているわけではない。幸の目が見えるようになって、二人には困難な道もきつとあるだろう。しかし互いが互いを引き寄せ合うように、二人はもはや離れられない関係となっていた。

27、相愛

それから数カ月後。和人と幸は、幸が和人の一人暮らしの部屋へ転がり込む形で、同棲を始めた。和人は卒業と同時に、数年間アルバイトをしていた出版社に、正社員として勤め出した。幸も今までやっていた施設伝手で、新しい施設での音楽講師を始めている。新しい生活に慣れるのには時間がかかったが、二人は二人だけの時間を大事にしていた。

そしてある日の休日。二人は区役所に婚姻届を提出し、正式な夫婦となった。

「なんか変な感じ。今までと変わらないのに、少し違う気がする」
区役所からの帰り道、幸がそう言った。幸もはしゃいでいるように見える。そんな幸を見るのが、和人はたまらなく嬉しかった。

『そうだね』

「……これからだね」

『うん……』

言葉少なげに、和人は幸の手を取った。

「和人？」

和人は黙ったまま、ポケットから指輪を取り出す。いつの間に忍ばせていたのか、いつ買ったのか、幸は驚きを隠せない。和人はそのまま、幸の薬指に指輪をはめた。

「和人……いつの間に、こんな物……」

『さっちゃん。今の僕には、これが精一杯……結婚式もしてあげられないし、こんな安物の指輪しかあげられないけど……ずっと僕のそばにいてくれますか？』

改めてのプロポーズに、幸は涙を流した。

「当たり前じゃない……私たち、もう夫婦よ？」

幸の言葉に、和人は微笑みながら大きく頷いた。幸は嬉し涙を拭

くと、和人に尋ねる。

「もう、本当にびっくりした……いつの間に買ってくれてたの？」

『この間、仕事帰りにね。おかげであまり貯金もなくなっちゃったけど、今日くらい美味しい物でも食べに行こうよ』

「うん。でも、幸せ過ぎて夢みたい」

『それは僕も同じだよ』

二人は手を繋ぐと、そのまま街へと歩いていった。

穏やかな日々が続いていた。幸せな日々だ。その幸せの絶頂の時、更なる事件が起きた。

「妊娠してますね」

体調を崩していた幸が病院へ行った時、思いのほかそんな言葉を聞いた。付き添っていた和人も、驚きのあまり声にならない。

幸も同じだった。二人はまだ、子供のことは考えていなかったのだ。だがその時、驚いている幸を現実に戻す声が聞こえた。

「さっちゃん！」

和人だった。未だ声に出すのが苦手な和人が、それだけハッキリ言葉にしたのは久しぶりに聞いた。和人は嬉しそうに、幸の肩を抱く。

『嬉しい驚きだね。僕は素直に嬉しいよ』

心からの笑顔で、和人が言う。

「私も……なんか信じられないね。こんなに幸せでいいのかな……」
ボソッと、幸が言う。

『なに言ってるんだよ』

からかうように笑った和人に、幸も安堵の笑みを見せる。互いに顔が緩んで、嬉しさを隠し切れない。

その日から、和人は更に仕事に精を出し、忙しさに感けて書いていなかった小説も、書き始める意欲を見せていた。

「和人、まだ起きてるの？ 小説？」

ある日の夜、幸が尋ねた。

『うん。僕たちのことを、小説にしようと思って』

「私たちのこと？ そんなの小説になるかな……」

『なるよ』

張り切っている和人に、幸は微笑む。

「最近、忙しそうで書いてなかったもんね……いつか連絡来てたじゃない。また絵本とか書かないんですかって」

幸が言う。

和人が絵本を出してから、新作は一度も書いていなかった。理由は忙しいの一言だが、幸と会う時間を削りたくなかったことも要因となっている。

『うん……だけど、話題に乗ってのものばかりだもの。今はまだ、僕は書きたい物を書きたいんだ。この作品も、発表するとかしないとか、そういうんじゃないよ』

和人の言葉を心ごと理解するように、幸は微笑んで頷く。

「反対はしないわよ。けどちゃんと暖かくして、徹夜は駄目よ。身体を大事にしてくれなきゃ」

『わかってるよ。それより、君も気を付けなきゃ駄目だよ。今が一番大事だって、お医者さんも言ってただろ。出来る限りのことは僕がやるから、君も適度な運動して、よく食べて、ちゃんと睡眠取らなきゃ駄目だよ』

和人が言った。幸はその言葉に笑って頷く。このところ、和人は幸の身体をよく気遣ってくれ、少しの家事も手伝ってくれるようになっていた。

「じゃあ、もう寝るね。おやすみ」

『うん、おやすみ』

隣の寝室へ行く幸を見送って、和人はテーブルに向かう。執筆の手が緩むことはなかった。

幸は寝室へ行くと、すぐに布団に入った。だが、なぜだか寝つけず、隣の部屋から漏れる明かりをおぼろげに見つめる。

やがて幸は、トイレへ行こうと立ち上がった。おなかも大きくなり始め、最近では起き上がるのもやっとだ。そんな時、幸は布団に足を滑らせ、畳の上へと強く倒れ込んでしまった。途端に、腹部に激痛が走る。

「痛、痛い！ 和人……和人！」

幸がそう呼んでも、和人には聞こえない。あと身体一つ乗り出せば隣の部屋に手が届くが、それどころの痛みではない。幸は携帯電話を探した。枕元に置いてあった携帯電話は、僅かに手が届く位置にある。幸は最後の力を振り絞るように、手を伸ばした。

その時、突然ドアが開いた。幸の姿を見て、驚いている和人が立っている。和人はすぐに幸へと駆け寄った。

『どうしたの！』

和人が焦った様子で尋ねる。

「おなか、痛いの……転んで……」

あまりの激痛に声にならず、幸はやつとのこととで単語を言った。手話をする余裕もない。

和人は察して、そばに転がっていた携帯電話を取ると、すぐにメールを打った。

<幸が倒れた。救急車を呼んでください>

素早く送信した先は、和人の実家である。夜中にも関わらず、すぐに電話が鳴った。緊急で了解した合図は、和人が電話口に出られなくても電話で返すことにしている。

『さっちゃん、大丈夫?!』

電話口から、和人の母親の声がする。幸は少し安心したように、和人から電話を取った。

「お義母さん……」

布団の上に蹲りながら、幸が苦しそうに言う。

『大丈夫？ 今、お父さんが救急車呼んでくれてるから。頑張るの』

よ、さっちゃん!』

「ありがとうございます……」

和人は慌てながらも、出かける準備を整え始めている。そんな和人を見ながら、幸はそこで気を失った。

28、選択

幸が目を覚ますと、そこは病院の治療室であった。

「水上さん。気がつかれましたか？」

看護師の問いかけに、幸はハツとした。

「私……赤ちゃんは、無事ですか？」

一番に幸がそう言った。

「大丈夫ですよ……でも切迫流産しかかっていたんです。まだ安心出来ない時期だし、しばらく入院して、安静にしていないと駄目ですよ」

お腹の赤ちゃんが無事ということに、幸はホッと肩を撫で下ろした。けれど腹部の激痛はまだある。

「あの。夫は……」

激痛に耐えながら、幸が尋ねた。

「今、別室で医師から説明を受けています。しばらく入院してもらうことになりますね。今、病室の手配をしていますので、それが完了次第、水上さんはそちらに移られることになります」

「そうですか……」

それから間もなく、幸は入院病棟へと移った。すると、すぐに和人がやってくる。手には手持ちサイズのホワイトボードが下げられている。急だったので、自宅の冷蔵庫に伝言用としてかけられたそれを、筆談用に持ち出したに違いない。

『大丈夫？ 気分は？』

心配そうに、和人が尋ねる。

「平気。ごめんね、心配かけて……」

『なに言ってるんだよ。こっちこそごめん。もっと早くに気づいてあげられていれば……』

「大丈夫よ。そんなに時間は経ってなかったもの。それで、私の身体……大丈夫だった？ お医者さんと話したんでしょう？」

不安気な幸に、和人は優しく微笑みかける。それだけで幸は、不安が拭い去られる気がした。

『切迫流産寸前だったって。ごめんね、気を付けていた時期だったのに、こんなことになって……』

「それは、和人だけのせいじゃないってば……それで、赤ちゃんは大丈夫なんだよね？」

『今のところはね……』

突然、和人の顔が曇ったように見えた。

『今回のことで、幸の身体は思っている以上のダメージを受けているそうだよ。これからしばらくは、絶対安静だ。もしまたこういうことがあったら、命の保障はないと言われた……』

和人は医師に言われたことを、幸に隠さず話した。幸にも自覚してもらい、今後気を付けてもらわないと困るのだ。

「そう……わかった。気を付ける」

話を受け止めて、幸が答えた。和人は幸の手を握った。そんな和人の手を握り返し、幸はもう一度手を動かす。

「心配かけてごめんね。この間の検診の時も、今が一番大事だから気を付けなさいって、産婦人科の先生に言われたばかりだったんだ。この時期に流産する人も多いからって……赤ちゃんが無事でよかった。これからは今まで以上に気を付けるから、安心して」

『うん……僕も気を付けるよ。なるべく早くに寝るようにするし、なるべく一緒にいるよ』

幸は頷き、そして静かに口を開く。

「和人……」

『なに？』

「もし……私か赤ちゃんかを選ぶような時が来たら、きっと赤ちゃんを選んでね……」

突然の幸の言葉に、和人は目を見開いた。

『何を言っただよ！』

「だから、もしだつてば」

『それでも、そんなことを言うものじゃないよ』

「……そうね」

力なく微笑む幸に、和人も小さく微笑む。

『もうおやすみ。僕は君が寝たら一度帰って、入院用の着替えとかを持ってくるよ。数日安静にしていればいいみたいだけど、何か欲しい物はある？』

「ううん、特には」

『そう。じゃあ、しばらく静かに寝てるんだよ』

「はい……」

二人は見つめ合った。

「おやすみ」

『おやすみ……』

数日後、幸は無事に退院した。それと同時に、母親たちの薦めもあり、幸は出産まで実家へ戻ることになった。

和人にとって幸と離れることは寂しかったが、実家に幸がいるということは幸にとっても両親にとっても安心出来ると思った。なにより和人自身も安心する。

一人になってみて、改めて幸の存在の大きさに気づかされる。和人は寂しさを埋めるように、二人の人生を小説にして書き続けた。

出産予定日より一ヶ月ほど前の休日。和人は実家へ出向こうと、電車へと乗り込んだ。あと一ヶ月で生まれる我が子のことを考えると、胸を弾ませずにはいられない。逸る気持ちを抑え、和人は幸の実家へと向かうのだった。

その頃、幸は実家でピアノを弾いていた。音楽はお腹の中の子供にも良いし、自分もリラックス出来る。近所中に、幸のピアノの音

色が心地よく響く。

幸がピアノを弾いていると、近くに置いていた携帯電話が震えた。
「あ、もうすぐ和人が来るかな……」

携帯を開くと案の定、和人から駅に着いたというメールが来ていた。幸は大きくなったお腹を抱えるように立ち上がると、二階の廊下を進んでいく。階段は特に気を付けているが、お腹の大きさと重さでは、一段一段下るのがやっとなので、これ以上の気を付けようもない。

「お母さん。もうすぐ和人が来るから、コーヒー沸かしておいてね」
リビングに入るなり、幸が母親に向かって言った。

「コーヒーなら、今入ったところよ」

「ありがとう。じゃあ、私も飲もうっと」

母親の言葉に幸はそう返事をする、キッチンへと向かっていく。幸は和人が来るので、普段は使わないお洒落な食器を出そうと、シンク上の戸棚に手をかけた。少し高い位置にあるので、幸は思いきり背伸びをする。

ガシャン——と、食器が割れる音が聞こえ、幸の母親は慌ててキッチンへと駆けつけた。するとそこには、幸が腹部を押さえて蹲っている。辺りには、高いところに入れられていたはずの食器が散乱していた。

「幸、どうしたの!」

「痛い……痛い……」

幸はそう言うばかりで、立ち上がることも出来ないようだ。

「きゅ、救急車……」

動転しながら、幸の母親が立ち上がる。その時、呼び鈴が鳴った。幸の母親が玄関に走ると、和人の顔が見える。

『こんにちは……』

事情も知らず笑顔でそう言う和人に、幸の母は急いで和人の腕を掴み、中に引き入れる。和人はキッチンに蹲った幸を見て、事態を察知した。すでに幸の母親は、電話で救急車を呼んでいる。

『どうしたの！ 何があつたの？』

幸にそう尋ねるが、幸には答える余裕もない。そのまま幸はやってきた救急車で、病院へと運ばれた。

緊急治療室の前で、和人と幸の母親、そして後から駆けつけた和人の母親が、祈る思いで待っている。

「長いわね……」

和人の母親が、ボソツと言った。幸の母親は真つ青だ。和人はただ、祈るように俯いている。

しばらくして、手術室から医師が出てきたので、一同は立ち上がった。

「ご家族の方ですか。あなたがご主人ですか？」

「そうです。この子が彼女の夫です」

すかさず和人の母親が、手話で訳しながら答える。和人も後から頷いた。

「それで、幸は……」

今度は幸の母親が、すがる瞳で問いかける。

「母子ともに危険な状態です。このままでは早産となり、母体へのダメージも相当なものとなります。こちらも手を尽くしていますが、最悪の状況を考えて、お母さんかお子さんか、どちらを助けるか選んでください……しかし、もしお母さんが助かって、もう子供は望めないかもしれません……」

非情な現実だった。その選択に一同は驚いた。

「そんな！ どちらも助けてください！」

和人の母親が、そう叫ぶ。

「こちらの手は尽くします」

毅然とした医師を前に、和人の心も驚くほど冷静だった。いつだったか幸が言っていた。もしものことがあって、幸か子供かを選ぶ時が来たならば、子供を選べと――。

「カズちゃん、どうしたら……」

判断を委ねるように、幸の母親が和人にすがって言う。もしかしたら、幸は母親にも同じことを言っていたのかもしれない。和人は目を瞑り、そして静かに手を動かした。

29、感謝

そして私は今、死の床にいる――。

和人……私の人生には、いつもあなたがそばにいた。あなたがいなければ、今の私はないと言いきれるだろう。

私はあなたを深く傷つけてきた。それでもあなたは、私のそばにいてくれた。ずっとずっと、いつづけてくれた――。

私の人生、もう悔いはないわ……。

幸は真つ暗な場所で、目を覚ました。

ここはどこなのだろう……暗い中、辺りを見回すと、突然手が掴まれた。ハツとして、目を凝らす。その時、突然辺りが明るくなり、今度は眩しさに目を凝らす。そして、一人の顔が飛び込んできた。見覚えのある顔――和人である。

「和人……？」

その言葉に、和人は一層強く幸の手を握った。幸はここが病室なのだと理解した。そして和人を見ると、ゆっくりと手を動かす。

「……私を選んだの？」

幸の言葉に、和人は静かに頷いた。

『彼女を……母親を、助けてください……』

あの時、医師に言われて和人が出した判断は、こうだった。

「じゃあ、私たちの赤ちゃんは……」

自分が助かったにも関わらず、暗い顔で幸が言った。和人は優しく微笑むと、ポケットから何かを取り出し、幸に見せる。そこには眠った小さな赤ん坊の写真がある。途端に幸は涙ぐんだ。

「私たちの……赤ちゃん？」

和人は自信を持って頷いた。

『真正正銘、僕たちの子供だよ。元気な女の子だ。未熟児だったけれど、問題ないって医師は言ってた。今も近くの部屋にいるよ』

「ああ、嬉しい。なんて言ったらいいか……」

そう言う幸を、和人は抱きしめた。そして幸を見つめる。

『本当に助かってよかった。君も子供も……』

「和人……」

『大変な思いをさせてしまつてごめん。そして、ありがとう……僕に大事な家族を増やしてくれて』

幸は涙を流して、和人に抱きつく。

「うん……うん……」

二人はしばらく、そのままだった。もう、離れられなかった。

その夜、幸は初めて我が子をその手に抱いた。まだ小さな赤ん坊だが、元気に息衝いている。

それからしばらくして――。

「ひかりちゃん。あーんして」

“ひかり”と名付けられた和人と幸の娘は着実に、そして元気に成長していた。

「おかえり」

玄関が開いたことに気づき、幸が身を乗り出して手を振る。和人も遠くの玄関で手を振った。

『ただいま』

「その顔は、何か良いニュースでもあるの？」

嬉しそうにひかりの頭を撫でる和人に、幸が尋ねる。

『わかる？ 実は、これ』

和人はそう言いながら、編集途中の雑誌の一部を差し出した。見るとそこには、“水上和人、新連載”の文字が躍っている。

「これ……小説？」

『そう。しかも連載』

ここしばらく、小説の公募にも応募していなかった和人の久しぶりの小説、しかも連載だという。幸は驚いた。

「いつの間に、こんな話があったの？」

「少し前だよ。ごめん、黙ってて。驚かせたかったんだ。ほら、ずっと僕らをモデルにした小説を書き続けていただろう？ それをうちの編集長が聞いて、少し読んだだけで面白いて、大手出版社にかけ合ってくれたんだ。同時に、また絵本も出してほしいって頼まれたけど……忙しくなるけど、受けようと思ってる」

「私たちの人生が、本に載っちゃうの？」

幸が少し恥ずかしそうに言う。

「少しはいじってるよ。それに僕らはまだ人生の途中なんだから、完結なんかしていないし。ひかりも生まれたし、ネタが尽きることはなさそうだね」

「そうね。じゃあ今度は、ひかりをモデルにした絵本を書いてよ」

「いいね。じゃあタイトルは、“さっちゃんといかりの大冒険”なんて、どう？ またテープ図書にしてみよう。もちろんBGMは君のピアノだ」

「あら。楽しい内容になりそうね」

二人は未来を語り合い、笑い合った。二人の人生には、何度も落とした影など吹き飛ばされるように、光が満ち溢れているようだった。

それから二人は、二人三脚で歩んでいった。そして娘のひかりは、二人の架け橋となった。

「ただいまー！」

ここに、すでに小学生になったひかりがいる。小学校から帰るなり、ひかりはピアノの音色を聞いていた。開けっ放しのドアから覗く一室には、幸と数人の子供がピアノの前にいる。

幸は自宅となるこの場所で、近所の子供たちを集めてピアノ教室を開いている。もちろんひかりも、幸からピアノを習う一人だ。

「はい、今日はここで終わりね」

ちょうど終わりの時間が来て、幸が子供たちにそう言った。

「ありがとうございます。ひかりちゃん、おかえり。またね」

子供たちがひかりに声をかけながら、家を出て行った。

「おかえり、ひかり」

「ただいま！」

ひかりは元気にそう答えて、ピアノのそばに駆け寄る。部屋にはピアノの他は本棚があるだけだ。その本棚には、たくさんの楽譜の他、和人が書いた本も並べられている。

その時、和人が帰ってきた。

「パパ！　おかえり」

手話交じりで、ひかりがすかさず出迎える。手話は幼い頃から自然と身に付き、ひかりと和人のコミュニケーションも普通に取れる。

「ただいま」

和人は手話でそう言うと、持っていた絵本をひかりに差し出した。

「わあ。新作だね！」

ひかりは嬉しそうにそう言うと、床に横になり、受け取ったばかりの絵本を開く。和人は出版社での仕事を手伝い程度に続けながら、今は絵本作家を中心に活動していた。特に絵本の仕事は、“さつちやんシリーズ”として定着している。このところは、そのシリーズ物にひかりの名前も出ていた。

「ひかりちゃん、出てる？」

ひかりが、絵本の登場人物を和人に尋ねる。和人は優しく微笑む。

『さあ、どうかな？』

もったいぶってそう言う和人に、ひかりは胸躍らせて新作の絵本にかじりついた。

「出てる！　やっぱり出た」

そう言うひかりを、和人と幸は優しく見つめる。

やがて幸がピアノを弾き始めた。和人は椅子に座ってその光景を見つめる。何にも代えられない、優しい時間であった。

しばらくして、ひかりは絵本の上で眠ってしまっていた。開かれたページには、著者の写真が載っている。和人と幸とひかり、三人の家族写真である。

眠ってしまったひかりに、幸はタオルケットをかけてやった。和人はさつきと変わらず、部屋全体の光景を眺めている。それに気づいて、幸は笑って首を傾げた。

「どうしたの？」

幸の問いかけに、和人も笑って首を振った。そして手を動かす。

『いや……自分は幸せなんだと、改めて思ってたんだ』

「和人ったら。でも……私もよく感じるわ」

二人はそつと笑い合う。

『さっちゃん。ありがとう……』

「え、なにが……？」

『僕と一緒になってくれて、ひかりを産んでくれて、ありがとう……』

……

改めて、和人がそう言った。

「和人……」

『そして君も今日まで生きていてくれて、ありがとう……』

「……和人もね」

幸の言葉に、和人も頷く。

『僕たちは、離れていてもずっと一緒だったね……僕には耳が聞こえないけど、僕の目はもうずっと、君しか映っていなかったよ』

告白のような言葉だった。幸は恥ずかしさに頬を染めながらも、和人を見つめる。

『これからも僕は生涯を通して、君が好きだよ』

「和人。ありがとう……」

幸せを噛み締めるように、幸が言った。そんな幸の肩を、和人は

静かに抱き寄せる。

「私も……ひかりはもとより、もうあなたのことしか見えないよ。ずっと和人のことが好きだから……」

だから……その先の言葉は、互いの胸に響いていた。

（そう、僕は君が好きだ……君の好きなピアノの音色が、聞こえないはずの僕の耳に、しっかりと聞こえている。そして僕が生まれたその日から、きっと僕の目には君しか映っていない。もう、君しか見えない——）

そつと目を覚ましたひかりの目には、幸せそうな和人と幸の顔が映った。ひかりも微笑みながら、もう一度、安心して眠りにつくのだった。

29、感謝（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！
ご感想などありましたら、お気軽にくださいませm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2972e/>

Pure Love ~君しか見えない~

2010年10月8日12時52分発行